

41 一御関狩并御馬追由緒の事

御舊式類抄卷之二目次

(表紙)

御舊式類抄

二

(中表紙)

「御舊式類抄 卷之二 稿」

享保四年・寶曆九年史官のしらべ、左條に叙列する

ハ就て聊の愚考なり、

一寺社邊に獵する禁斷の事

承和八年の勅符、長久四年の國符、天喜三年の廳宣、

此等は皆 御元祖得佛(忠久)公文治二年の御入部より百三

十餘年以前の事にて、狩は神代よりの遺俗にや、久

きより流行せしと見得たり、

一狩倉に領家分地頭分の分ちある事

地頭得分の事は、元久元年以来の下知状にある赴き

嘉祿二年 鎌倉執權の下知状に見得たり、また康元

元年 道佛(忠時)公御代、鹿屋院の地頭代等領家の御狩は

打止め、地頭方を宗とし、元徳二年 道鑿(貞久)公御代ま

て、毎年春秋二度宛一狩倉の一狩に鹿皮一牧宛の納

分七十四年押領して地頭の得分と為りたれハ、其上

納分の皮を算用して地頭方に懸たる訴状あり、此等

に據れハ元久の頃より地頭狩のありしは疑なし、

一守護御狩并御家人分雇狩人等の事

正應二年八月、御家人等より左手右手の馬乗を分て

書出し、それを（忠孝）道義公の守護代僧唯道より先例通と申渡たる古書あり、同日馬數の賦、また同日御家人等雇狩人の人數割、又元亨三年七月、同四年二月共に同き守護狩の觸狀あり、且其狩立の賦、又同四月守護狩の觸、同しく守護私領頭役狩人の賦などあり、此等は皆 道鑿公の御代にて沙彌圓也狩の沙汰をハ守護代と申談し書注置く、守護狩の目録にも立宿またハ案内者等の人數を東手引西手引と宿場を分け、狩人以下案内者の沙汰をなし、毎年二度つゝ御狩のとき、先規を守り狩庭場の鹿子并皮を取進せんとの赴を當守護へ申上は、子細（まづ）あらしとの赴ともあら／＼かきおけり、

一國廻狩御供人數并其御宿次の事

元亨五年閏正月、 道鑿公御代にて御供廻惣牀程騎馬と見へ、御舎弟和泉殿はしめ、惣して家の子およひ諸殿原某／＼陪從の多きハ上下三十人乗馬十一疋、或は上下廿七人乗馬六疋雜駄三疋、あるハ上下廿五人乗馬七疋雜駄二匹、其少きもおほかた上下五人乗

馬一疋列れざるハ無く、太粧の行列にて薩摩郡より覺島郡まで十一泊の内、第三番串木野ばかり御狩の爲と註し、其餘は其事なけれハ専ら獸を取る爲の御狩にあらず、 御代／＼守護し給ふ御國を廻らせ給ふ御狩にて、蓋し 得佛公守護職御補任の御頃より遊ばし来れる守護御狩にて、守護方よりハ國廻狩と唱へられ、御家人よりハ守護御狩と呼らるらん、左あるにて、（久慈）道忍公御代より守護代せし僧唯道等も、正應二年既に任先例の語もあり、また 得佛公の時、御莊の狩倉を領家分地頭分と分けられ、地頭得分の事とも元久元年以来はや其下知ありし赴き、嘉祿二年の下知狀にも見へ、また山門院の黒多尾は立鹿倉且馬立場にて、 故殿御狩のとき 道鑑公なとも（天）完餘多射給へる所のよし 御筆にも見へ、本より 公は 道忍公かくれ給ひし時は 御十六、 道義公薨給へる時は御五十七に當らせ給へハ、此に故殿と宣ふハ 道義公は勿論 道忍公など御狩の時を指れし御詞にも當り、旁久しき守護狩の御作法な

らん、又應永三十四年 (忠國) 大岳公の御代始にも無為の  
 おりにて國廻の御滞なきことゝも粗應永記に見得た  
 り、彼此 今に傳はる御関狩の基本は、右等の遺蹟  
 を 御代く踐せられての御事ならん、

## 一 御関狩并初御狩の事

長祿二年の頃、大岳公の御子伊作家を嗣かせられ  
 し式部大輔久逸の分限を豊かに成し給ハぬとて、関  
 狩になぞらへ人數を催され、野邊刑部少輔盛仁か飢  
 肥櫛間に押寄られて御所望あるに、野邊も力なく差  
 上たり時き、新納近江守忠續を飢肥に、久逸を櫛間  
 に移され、盛仁か子隱岐守盛篤を魔島に徙され、采  
 地八町四段を田毛・原良の地に賜ふといへり、事は  
 渠か家乗あるハ鮫島日向入道か筆記等に見得たり、  
 其時関狩といへれば野邊か油断せしにて、御國廻の  
 関狩、其例久ふして、四至の隣國までも能く聞馴る  
 たることおもひ知らるゝ也、然らざればかやうの御  
 計策も設ゑられまし、其後天正四年、近衛前久公  
 魔島に滞在まします時、種く御饗應の件に春山の

関狩ミへたり、また同八年五月、新納忠元菱刈兩院  
 の衆三千餘を関狩と唱へ催し、肥後寶河内城を攻取  
 たる口碑あり、大岳公の遺轍を追ひてならん、ま  
 た慶長十二年閏四月、唐津侯寺澤政成等の魔島に來  
 れる時き、從士踊して 英覽に備ふ、此よりハ御舊  
 式の関狩を櫻島に催されしとあり、此外関狩とかけ  
 る古書右等の前に見ことなし、左あれとむかしより  
 其御作法必ず正月の初御狩に行はせられしとミへ、  
(實心) 大中公御代天文廿二年正月廿日春山の御狩とあり、  
(義心) 貫明公御代天正二年九月晦日も春山御狩とあり、同  
 十年正月伊作・田布施・加世田に初狩あり、同十一  
 年二月海江田にも狩あり、人數七百人、同十二年・  
 十四年の正月また伊作等に初狩あり、同二月谷山の  
 御狩、三月田野の狩あり、千人、寛永廿一年正月六  
 日吉野御狩、萬治四年正月七日春山御狩、同二月三  
 日谷山御狩、中城王子朝周あるハ澤崎主水等從て寓  
 目す、寛文二年・同六年正月皆春山御狩とかけり、  
 延寶八年正月十二日如例年春山初御狩、或は御関狩

と文を互にして横山日記にかきたり、此にて初御狩即御関狩の明驗也、左ありて此御狩までハ、府下六組總立なりしに、此日西風烈ふして、留主に三千三百餘軒の大火也、天和三年正月廿六日・貞享元年正月十四日、皆かわらず春山初御狩とあり、但し火後の関狩は、六組を割られ三組宛の狩立となれり、然あるに元禄二年生類あはれミにて、公義より猪鹿狼殺生の沙汰ありて、三度狩より牲狩に至り惣て禁止せられたり、左あれと年々、正月はしめ行ひ来られし御関狩は、御代々、の御作法にて、公義も苦しからすとの許にて、同三年正月、大玄(綱覽)公の御代、御関狩并に正月始外城土に催す初狩も関狩と同じけれハ、前々より一度づゝ仕来たる御作法の故、舊式退轉せざるやう心掛、行儀を專にして、其取たる(完)は横目に見せて土中に埋め、事を山奉行に報せよとの令あり、此令出てしより初御狩の名は消へて、偏に御関狩と唱へ、外城は皆舊よりの初狩と唱来れり、翌四年正月は谷山、同五年正月は春山、皆御関

狩とあり、同十二年正月、始て吉野に行はるとミゆ、さあれど五十六年まへ寛永廿一年にもあれハ其よりの始て欵、同十五年正月も吉野、寶永七年二月は谷山、正徳二年二月・享保九年二月皆吉野、同十三年十二月谷山、是より春山と谷山替々、三組宛も三年に一度づゝの順立と定られたり、  
一御狩或は大狩の事

天正二年十月、貫明公伊作に御狩あり、正保三年四月、大口地頭新納加賀忠清など菱刈の人数を將ひて出水に大狩あり、承應三年十二月十日、寛陽公(光念)春山の御狩あり、萬治四年二月三日、また谷山に大狩、詳に前に載す、寛文九年三月廿二日、寛陽公御發駕、四月十五日、高城有水村田尾御假屋より大狩を石山村の小善城鹿倉に催さる、諸外城より列卒に聚る人数四千八百人、猪鹿の御獲もの多し、同廿一日、細島御出船、同十一年二月廿六日、大玄公御發駕、三月十五日、同じ鹿倉に大狩あり、列卒千六百八人、御獲もの、猪鹿七十三丸、その二十五日

細島御出船、同十二年三月廿一日、(綱久)泰清公御發駕、  
同廿六日、また御狩、人數詳ならず、御獲もの三十  
五丸、その四月八日細島御出船なり、

## 一御立狩倉并六度狩付完持夫の事

慶長十二年三月、國老島津圖書入道紹益・樺山權左  
衛門久高(家久)琴月公のおほん旨を承け、伊勢大内記貞  
朝・白濱七助重(マサ)等に命して、山究の奉行となし、  
御立狩倉の法制を定らる、其とき春は正月二月三月  
に一度つゝ、冬は十月十一月十二月に一度宛、合せ  
て六度たるべし、其所の行司より獵に人の鉄砲を御  
狩倉に鳴し山に入ものを禁止せしめ、縦令手負鹿の  
入ても追つなくを得ず、若し入たることの脇より聞  
へは、其科行司に掛べし、尤御用の狩は地頭行司へ  
奉行の手形次第嘜と談し催せとの赴なり、又寛永廿  
一年十一月、六度御狩は完の立廻を見定め、念を入  
て行義能く狩べし、奉行手形の躰大山にても、御立  
狩倉は曾以て案内すましの令あり、正保二年五月、  
百姓とも御狩の外私（私）の狩馳等を禁せらる、同三年八

月、國老北郷佐渡守久加・川上因幡守久國・山田民  
部少輔有榮より、御蔵入・給地の差別なく、六度狩  
に立來たる百姓とも、向後皆赦免せらるの令あり、  
また同九月、山奉行の沙汰に應じ御狩毎に完持夫は  
立せよとの令あり、此までハ百姓も士衆と與に御狩  
の列卒に立たれたれとも、兵農の古風漸く變革し、  
此に至りつる兵と農と分られたり、左あるによて、  
其九月の御狩より始めて士衆はかりの狩立なり、萬治  
二年六月、狩倉の名員を糺され某く書出たると見  
得たり、

## 一三度狩の事

明曆四年二月、御狩毎に呈する指出の案文を三度御  
狩にして廻文あれハ、正保三年までの六度狩、其間  
に減省ありしならん、天和元年九月、三度御狩は必  
す近方より檢者を受、其日の人數、或は得道具、或  
は犬の疋數、或ハ獲ものゝ完數等、嘜と點檢し、假  
令獲なくても連印の證文を上げよ、又完を賣るにも  
價は横目と定め、同しく證文を上げとの山奉行廻文

あり、元禄三年正月、公義より殺生の沙汰に應せられ、三度狩もつる禁止せられたり、

一 狩検者并狩奉行の事

慶長十二年の制に、御狩の時は隣方の検者を受へし、寛永廿年十月六日吉田御狩検者園田仲右衛門・奥嶋右エ門と加久藤より出たる類也、また正保三年九月、百姓狩立を停められ、始めて士衆許にて飯野御城山御狩の時きハ、吉田地頭の嫡子弟子丸右京宗茂・加久藤地頭養子伊地知主膳重頼に狩奉行の命あり、

一 狩代銀并科物の事

慶長十二年の制、六度狩に不参の人は一日一人に百文つゝの科物とあり、寛永十三年十二月、御狩不参の衆を糺されたとミゆ、また正保二年二月、御狩は完(宋)の立廻を見届、必卯刻に集り、古来の作法に違はず朝晩の星合を厳にし、若刻限に後れたる人は其日の未進にして科物を掛へし、惣躰狩の作法あしく成ゆく所は、行司は勿論頭役の越度たるへき赴なり、狩代帳をハ寛永十五年分より十八年分まで御算用せ

ざるもあれハ、訖と勘定を遂させとの御沙汰にて、同十九年九月、御勘定所よりの催促あり、同廿一年二月、また行事より御勘定を受、六度狩の代銭并鹿皮上納の受取を上よと山奉行の催促も見得たり、

一 諸地頭狩夫銀の事

慶長十二年の制に、地頭狩は御立狩倉の外にて一ヶ年に二度宛と定られ、右外はしましきとの令あり、又寛永三年秋、二月、國老島津下野守久元・喜入撰津守忠政より諸地頭に令し、凡そ殿役は一ヶ月に三日づゝ召仕ふべし、地頭よりハ其所の百姓曾て以て召しましく、但し一年に二度づゝの狩夫ハ例年の通たるべしとの赴なり、同十三年十二月、狩夫遣帳といへること、蒲生地頭市来八左衛門宗友の任所に令する書に見へ、また同十五年正月、島原御加勢立の時き、伊地知左右衛門重政、地頭所の加久藤より百姓八人狩代の夫として召列、其日く路たる古帳なと参考れハ、此等の百姓を狩夫遣帳に載おき、其年の狩立二度分に除き狩夫銀を懸ざるならん、其仕は

れすして帳に漏れたる百姓は、其年二度宛地頭に仕  
 たるべき間を偷んで自分稼の利得あるハ、實に地頭  
 給ひたる雇銀も同じき故にや、古来より毎年二月と  
 十月に、一日一人まへ七分づゝ狩夫銀とて地頭に収  
 め来ると見へたり、然あるを、同廿年の冬より地頭  
 狩を停められ、十五より六十まで地頭方へ収来たる  
 一日一人の七分宛をハ、其明年より 御物へ上納せ  
 よとの令あり、寛永はしめ、殿役は月に三日宛と定  
 られ、其仕はれさる一日もあらハ、一人まへ百五十  
 文宛の出錢とミへるハもとの通ならん、詳なるを知  
 らず、其後何れの歳にや、また古来の通地頭方に収  
 るやうなされしと見へ、貞享三年十二月、狩夫銀を  
 一人五分宛に減省ありて、明年よりハ例の通一年兩  
 度づゝ地頭方に収よとの令あり、其後また何れの年  
 より欵、地頭は右の半分づゝ、半分は 御物と易へ  
 おかれしに、元文二年五月、(雜意)宥邦公の特旨にて、  
 御役料なく勤める地頭へは皆同、御役料あるは半分  
 下さるへきとの令あり、然あるを、寶曆六年七月、

御借銀の償せられ、御用として狩夫銀ハ皆同、私領  
 は三ヶ二上納せよとの令あり、其より三年め同八年  
 二月、また先年の通半分は御物、半分は地頭領主、  
 御役料なき地頭は皆同下さるとの令あり、按るに、  
 狩夫銀の今の百姓に懸れるハ、往昔兵農いまた分れ  
 ざる時より因循し来るところの遺制なるべし、

一講狩またハ神狩の事

(享)享祿二年二月、喜入にて例講の神狩あり、正保二年  
 二月、前くより講狩して杉指すの例あり、年く  
 の其員數を申出よとの廻文あり、寛永三年欵、國老  
 島津久元・喜入忠政より、衆中一人に五本宛、漆・  
 杓・杉年く植おき、枯たるハ其人植替との令あれ  
 ハ併せ知らるゝ也、天和元年九月、猥に講狩すへか  
 らず、由緒あらば申出、手形次第に催せよとの廻文あ  
 り、其のち 公義殺生の沙汰に遵はせられ、元祿三  
 年正月、神事祭禮の牲狩も停られ、獵師の獲ものを  
 求め備へよとの令あり、

一獵師狩の事

元禄三年の令に、外城の地利に應じて員を定め、商賣を許され、御城下は店を定め、其餘は禁止せらるとの赴也、

一 鰐犬山并作喰狩或肴狩の事

寛永廿一年十一月、鰐犬山は山奉行の手形に遵ふべし、六度御狩の狩倉には案内すべからず、また正保二年五月、百姓共の鰐犬山するを禁止せらる、又天和元年九月、猥に鰐犬山すへからず、三度狩御肴用の完取得すとの廻文なり、また作喰狩は噉・横目差(六)引いたし、取たる完は上納せとの廻文あり、亦た元禄三年正月、公義殺生の沙汰に應ぜられ、猪鹿狼荒れて田畑を損せば、日切を究め目付を乞て狩を致し、取たる完は土中に埋め、謹んで事を帳に具へ山奉行に報告せよ、以て公義の御届に副らるとの赴なり、

一 山法掟の事

承應二年八月、大山源兵衛・納山狩野介連判の古本を以て、鎌田筑後政昭寫しおかれし二十ヶ条也、

42 『史官雜抄』

覺

『右、皆此冊ニ事証ノ為メ、類抄シテ愚按ノコトトモ朱ヲ以テ旁註仕タル事ヲハ、爰ニ又類ヲ聚メ前後ヲ叙テ、右通大略ヲ綴オリキ考違ノ多キハ案中ト奉存候』

御関狩并御馬追之儀ニ付、御記録所ニ相知候趣茂有之候ハ、相札可申出旨被仰渡、左之通ニ御座候、

一 上使御返答ニ被書出候趣ハ、関狩之儀當家古来より之旧例ニ而、毎年正月相催、薩摩守不被罷登節ハ名代被差登事ニ御坐候、城下士其外諸所江召置候士等大勢相集、山野相圍、弓鉄炮を相放、其作法有之事ニ而、獵師共仕候狩ニ者相替候、依之御先代生類憐被仰渡、殺生之儀領内稠敷被申付候節茂、右関狩之儀ハ各別ニ候故、猪鹿類ハ打不申、舊例之儀無断絶被申付候由御返答有之候事、

一 右上使御返答之外、御記録之内又ハ旧記之内ニ御関狩『御関狩ノ起本共思ハルコトハ、正應年間ニ共例ニテ守護御狩ト申事之儀相見得不申候、然共古老之者共申傳候者、右御関



アリ、或元亨年中國廻狩ノ御供人數ナドアリ、左アレバ、道義公ノ狩之旧例者、頼朝卿御代富士牧狩有之候ニ付、御家ノ御代より守護狩ハ先例ニテ有シト見エ、且ツ元來守護ハ乱逆ヲ鎮ル用之儀者、頼朝卿御子孫之儀ニ被成御座候故、御関狩ノ職ニ設ラレシ官ニテ、正應元年ノ執違狀ニモ犯科ノ事ニ於テハ守護儀茂御家ニ相殘候、尤武備之ならしにて有之由候、方ヨリ沙汰スヘントアレハ、警固ノ為メ狩シテ國廻ノ作法先例ト為

且又 惟新様 中納言様朝鮮御帰陣之後、寺沢志摩守リシナラン、其ヲ守護狩ト云ヒ関所迄廻ヒ玉ヘレバ、関狩トモ國廻様・宇久後稱五嶋大和守様鹿兒嶋江御見舞之節、被召列候狩トモ申スハ非スヤ、專其年ノ正月ニ興行アレハ、初御狩トモ人数踊有之候付、右之為御返禮、御家御旧式之御関狩初狩トモ申シ地頭ノ催スヨリハ地頭狩トモ申タト思ハル、但シ関狩慶長十二年ノコトカ

於桜嶋御張行有之、右御兩人江御馳走被成候由申傳候ト云字ハ長祿ノ比、大岳公ノ日州福島ニセラレ御事ヲバ、慶長五年正月、敷島日向入道古船齋松岳ト申ス老人カ、孫ノ與一兵衛カ尋ニ書キ

右之通ニ古老之者申傳候迄ニ而、御関狩起候基之儀、與ヘタルニ見エタリ、此等ノ考証ニ拾テ此末ニ類抄仕置申候、相知不申候得共、中納言様御初年之時分ニ茂、右之通ニ旧式之御関狩為有之儀ニ御座候得者、古來より之旧式ニ而可有御座事ニ御座候、

一 右、御関狩場所之儀者、山田聖業自記ニ吉野ノ大セタラニテ氏久完アソハシ候ト書レタレバ、此説ハ是ナラン、其以後伊集院春山又ハ谷山野ニ而為有之由ニ御座候、尤 寛陽院様 泰清院様 大玄院様御三代共ニ、数度御登せ被成琉球王子被召列、見物被仰付候儀茂為有之由、古老セノ時ノ事ナラン、

43の1

一 御馬追之儀、是又古來より之旧式ニ而有之由申傳候迄ニ而、御記録之内又ハ舊キ書留等ニ茂相知不申候、然共 御家五代貞久公御代、薩州出水於瀬崎野牧被立置候由、御記録之内ニ相見得候、馬追有之候儀ハ相見得瀬崎馬追ノ次テアレバ見エストハ如何、天正二年上井日記ニモ馬追不申候事、

右之外、御記録所ニ相知候儀無御座候、以上、

【居史廿七年】相良角兵衛「長香」  
 【居史四十八年后号独樂】  
 享保四年己亥十二月五日 川上平右衛門「親史」  
 【居史三十一年】肥後藤之丞「盛香」

一 御関狩 寛

一 十六代之 太守義久公御代天正四年、近衛前久公御當國江御滞在之節、御馳走事与相見得、段々ケ条書有之候、右之内ニ春山之御関狩与書記有之候、其節 前久公御一覽被成候儀者究而相知不申候得共、右通御譜中ニ被召載置候得者、其砌ニ茂御関狩有之候与相見得申候事、

一 古老之者共申傳候者、御閑狩之旧例者 頼朝卿御代  
富士牧<sup>〔符〕</sup>閑有之候ニ付云々、先役共書記置候事、

一 右御閑狩場之儀者、最初吉野ニ而有之云々、是又同  
断、

一 一説ニ古老之者共申傳候者、御閑狩・御馬追之儀、

軍事之習セニ而、御閑狩者御出陣之御作法、御馬追  
者御帰陣之御作法与申傳候得共、古書付等ニ而者見

當り不申候、依之此節段々相糺申候得共、右之訳相  
知不申候、依之御庖丁人頭方江茂、右御規式之次第

承合候処、御閑狩ニ者御盛塩御引渡有之、御馬追ニ  
者御盛塩、式御三献之差別有之、右御規式之品を以、

御出陣御帰陣御三献共相見得不申、尤右通之申傳茂  
無之由承届候、然共従前々右通申傳儀ニ候得者、如

何様由来有之事ニ而、其通申傳候哉与相考申事ニ候  
事、

※ 『勝目聞書ニ、天正六年 義久公耳川御討勝より御帰館  
の次日ハ、御祝言の會筵として伊集院右衛門大夫・喜入撰  
津守・平田美濃守・村田越前守・町田出羽守・本田下野

守・河田駿河守・鎌田刑部左衛門・吉田美作守・伊地知  
伯耆守など参上して、御三献の後美膳の饌御酒宴始云々  
見得、今御馬追ニ御三献有之、川上家御相伴等被相勤、  
<sup>(享)</sup>享祿・天文・天正之御馬追茂皆賑々敷酒食取はやし候躰  
ニ相見得候間、決而古老之申傳通御帰陣之御作法ニ可有  
御座、御狩立之右式事を書留候をいまた見當不申候、御  
出陣者急速之御作法ニ而、御盛塩御引渡御閑狩ニ相残候  
茂申傳通ニ可有御坐欵と奉存事ニ御坐候』

(本記事ハ行間ニアリ)

### 一 吉野御牧

右川上家仕立召置候牧ニ而候処、慶長年中當川上久  
『天正三年亥四月廿三日、吉野御馬追ニ義久公御機敷ノ主居ニ川  
馬先祖川上上野久隅代、右之牧 家久公江被差上、  
上殿ト上井日記ニアリ、其上其時既ニ御馬追トアレハ、久隅私ノ牧  
家久公吉野御馬追御登被遊、久隅茂参上為仕由ニ  
トハ思ハレス、差上ラレシハ天正以前ノ事ナラン、日記ノ赴キハ  
候、且又慶長九年閏八月十九日、吉野御牧毛付書卷  
馬追ノ篇ニ載セ頼抄シオケリ』  
通、伊勢兵部所持之文書ニ相見得申候、右を以者、  
『上井日記ニ委クアラバ  
慶長年中より吉野御馬追相始り候筋ニ相見得申候、  
何迄慶長中ニ始ルトハ申上シヤ、不審也、古来第一流行之日記ニ  
吉野御馬追中古ニ者御名代無之、御家老一人・惣奉  
右通明文も御坐候事ヲ引証無之義者何分ニ茂難解事ニ御座候』  
行一人、川上嫡家御目付二人羽織袴ニ而罷上り、御  
規式無之候得共、如旧例可被仰付旨、宝永三年被

仰出置候、左候而御家老勤方有之候得者、若御年寄勤ニ被仰付候旨、享保廿年卯八月相究り申候、然者自古来 御名代并役々被差越御規式為有之与相見得申候得共、何年間より相始り候儀者相知不申候、

右、寶曆九年卯五月十九日、要用集御用ニ付、諸調書之内書拔御座候、

覺

前久様御滞在中 御歌之會 御花見 御馬追 御連歌  
春山之せきかり 御老中衆四人より御成四日 御馬揃  
御川遊 御犬追 福昌寺御成 瀬引 笠かけ 道場より御成 春日御社参  
右者、天正四年丙子三月、近衛龍山様鹿兒嶋江御下向之節御馳走与相見得、龍伯様御譜中江書記有之候ニ付、書寫差上申候、以上、

宝曆十三末二月廿二日

吉田【用右エ門清純】

安藤【左平次茂真】

右通、御関狩御馬追之事御記録方しらへ、世上ニ相洩見當為申分御座候、右御譜中之趣、惟新様御代加治木士大村市兵衛重頼与申者之古戦書付と欵申舊記ニ【関ヶ原乱後、蒲生城ニ移サル、列ノ人ト覺タリ】茂相見得、左之通御座候、

四月、近衛前久様薩摩鹿兒嶋江御下向被成候、御會尺として、御歌會 御連歌 御馬追 御鷹野 御関狩 御花見 御濱遊 御川遊 瀬引 御馬揃 御犬追物 御笠懸  
御老中ヨリ御成被申候、福昌寺より御成被申候、御下向之儀者九州之大名衆より申下シ、弓箭和談之儀嶋津殿江御吳見被成候而可被下由被申候付、御下向被成候得共、義久様御合点無御座候付、御帰京被成候事、

（本記事ハ「旧記雜録後編」一八四六号ト同一記事ナルベシ）

右やう相見得大同小異御座候、

御閑狩の事付狩夫銀之事

一御國は神代より山「ノ」幸マユの古蹟にて、好狩輩ありて寺内等をも憚らす狩獵せしこと多く、清水臺明寺の文書に見得、また御國計にもあらず五畿七道までも其事の流行せしにや、續日本後紀にも見得、御閑狩とは別沙汰なから狩の久敷をおもひ、此に類抄す、

46 『續日本後紀』

※一承和八年二月乙卯、勅天平勝寶四年騰勅符云、先禁斷寺邊殺生事、今如聞、時序稍遠、禁斷遂薄、若違犯者、即以違勅論者、春蒐秋獮釣而不網、事不得已期乎止殺、況乎仁祠之邊、精舍之前、從來解脫之界、非是漁獵之地、如聞、勢家豪民無憚憲章、國宰講師不存檢校、遂使寺内馳馬、佛前屠禽、如レ此淫濫、不レ可勝言、夫妖孽之臻、不レ必自天、

民自取焉、可レ為太息、宜重下三知五畿七道諸國司、敕令禁斷寺邊二里殺生上、如有犯者、六位已下科違勅罪、五位已上錄名言上、不レ得阿容、三月壬申、判勅大和國添上郡春日大神神山之内狩獵伐木等事上、令當國郡司殊加禁制、

(本記事ノ返り点ハ朱書ナリ)

※(頭注)

『爾雅釋天、春獵為蒐、夏獵為苗、秋獵為獮、冬獵為狩、白虎通曰、四時之田總名為獵、為田除害也、尸子曰、虞羲氏之世、天下多獸、故散人以獵也、說文放獵逐禽也、廣韻取獸也、說文狩犬田也、左傳冬狩註、狩圍守也、冬物界成、獲則取之無所擇也、白虎通義、冬謂之狩、何守地而取之也、孟子天子適諸侯曰巡狩、巡狩者巡所守也、禮王制、天子五年一巡狩、註狩或作守、正字通獵以供俎豆習兵戎、皆國家重事也』

47 『清水臺明寺藏』

國符 贈於郡司

48 『企』

廳宣 贈於郡司

可任代々廳宣旨、永停止臺明寺山四至内狩事、

右、件山、是佛法興隆之地也、因之代々宰吏、件狩永可

停止之由所下知也、而如聞者、背彼起請之旨、近來有好

狩之由傳言云々、仍重所仰如件、郡司宜承知、以停止、

若不憚制旨、猶有好狩輩者、且搦進其身、兼且注〔進〕

可任先符旨、重以制止臺明寺傍示内山野狩獵雜人等事、  
右、如聞者、件山國內第一之勝地、靈驗無比砌也、所住  
僧侶等致鎮護國家之祈、而間先々依彼山辞状、件狩獵制  
符已明、而今愚暗雜人等、不憚制止、動致狩獵之計云  
々、佛法陵遲只在於斯、仍重所仰如件、宜承知之、任先  
符旨、早以停止、若不憚制止者、慥召進其身、將以糺  
決、符到奉行、

大介藤原朝臣在御判

長久四年八月十一日

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一五号文書ト同一文書ナルベシ〕

49 『比志島氏藏』

和与 山門院地頭所務条々

一地頭狩倉開發事

止両方開發、可為本狩倉也、

一藪等事

酒藤藪者、重而安堵其身、於彼藪有限在家役并地利物

等可令弁勤之、於源次郎藪者、可為地頭之藪、於高少

姓名、可言上事由也、隨則現世重可召禁之、後生永斷佛  
種者也、故宣、

天喜三年七月廿五日

大介高橋朝臣在御判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

右外、狩禁止之廳宣四五通有之、略于此、また去子  
正月、狩夫銀之事書述候砌、少々載置候茂御座候間、  
左ニ類抄之、守護御狩又ハ國廻狩・地頭狩・六度  
狩・三度狩・初狩等之事も同断、

野園者、半分者可為地頭進止、今半<sup>⑩分</sup>者居百姓可取在家役「自是下文用紙接離無之」

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二四六・三三七号文書ト同一文書ナルベシ)

50  
【全】

一狩倉事

右、如両方申状者、云領家分、云地頭分▽<sup>⑩</sup>之役△

〔被<sup>⑩ナシ</sup>〕分狩倉事勿論也云々、然則地頭分之外、不可妨

領家分之狩倉矣、

以前条々、大略如此、抑當御庄地頭得分事、已去元久元年・承元・建曆下知先畢、而地頭代等各守彼状、可被沙汰之處、張行新儀非法之間、於事誼譚、<sup>⑩為</sup>及庄務乱之由、雜掌所訴申也、地頭代等所行甚不穩便、自今以後者、停止自由非法、且守先下知之旨、且任當時成敗、可致沙汰之状、依鎌倉殿仰、下知如件、

※ 嘉祿二年〔丙〕十二月八日

(泰時) 武藏守在御判

(時房) 相模守在御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」三三八号文書ト同一文書ナルベシ)

※「得佛公御年四十八ノ御時也、翌三年丁亥六月薨シ玉ヘリ、其后三十年康元元年、道佛公御代ノ比ヨリ領家ノ御狩ハ打止メ、地頭方ヨリ専狩シタルコト年々積レハ不可勝<sup>(計カ)</sup>許ノ故ニ、康元以来ノ算用ニテ元徳二年鹿屋院ノ雜掌ヨリ訴タル旁例ニモ合ヘレハ、地頭狩・守護狩ハ得佛公ノ御代ヨリ有来ル御作法ニテ、左ニ載スル正應二年ノ比道義公御代ナトハ任先例ト書タルナルヘシ」

(本記事ハ行間ニアリ)

51  
【國分宮内社人澤氏藏】

守護御狩左手右手書分事

〔此正應ノ比ハ、道義公守護職ノ御代也〕

合 左手馬

税所介

曾郡司

重久加賀房〔朝時〕

祢寢郡司〔弥次郎 清種カ〕

佐多九郎

惣檢校

河俣大掾〔又太郎重明入道 禪心コトカ〕

向笠諸次郎兵衛尉

佐多弥四郎

田代七郎入道

伊佐敷大掾

栗野大進太夫

修理所

秋ハ七八月ノ比ナト、見エ、是コソ御関狩ノ根據スル所ナ  
ラント此ニ類抄ス」

合 右手馬

上木田大掾

(本記事ハ行間ニアリ)

加治木郡司

小河郡司

下木田大掾

羽坂藤七太夫

52 『全』

東郷郡司

姫木弥四郎

守護御狩踏馬之事

切手又次郎

田所小太夫

税所介 十疋

惣檢校 五疋

木房大掾

國修行

重久加賀房 四疋

河俣大掾 五疋

牧山大掾

曾郡司 三疋

東郷司 五疋

向笠諸次郎兵衛 三疋

右、任先例、書分状如件、

切手又次郎 三疋

羽坂藤七入道 五疋

正應二年八月廿一日 『裏ニ宝治より正應ハ  
十二年トあり』

称寝郡司 十疋

姫木弥四郎 三疋

右、任先例、被注申候之間、与判早、仍各無緩怠之儀、

同九郎 二疋

伊佐敷大掾 三疋

可被勤仕状如件、

※ 守護代僧唯道

『正平十二年ニ見ヘル七郎入道ヨリ六十九年  
田代七郎入道 五疋  
前ナレバ其父ノ兼盛コトカ』

小河郡司 六疋

同年同月同日

※ 守護代僧唯道

栗野郡司 六疋

修理所 五疋

(本文書ハ「旧記雜録前編一」九三二号文書ト同一文書ナルベシ)

※ 『此唯道ハ御家老記ニ 道忍公ノ守護代トアレハ、其時ヨリ

ノ先例ハ 御元祖様ノ守護職召サレシ御時ヨリ守護御狩有

テ先例トハ為リシナラン、春ハ二月比ヨリ四月比ニ至リ、

加治木郡司 十疋

上木田大掾 五疋

下木田大掾 五疋

木房大掾 五疋

田代小太夫 五疋

国修行 三疋

右、<sup>(任脱カ)</sup>先例踏馬次第如件、

正應二年八月廿一日 「本ノマ、裏ニ寶治ヨリ四十二年正應、是ヨリ三三年元亨、本書ノ見エ次第ニ前後ニ書之

右、任先例、与判早、仍各無緩怠儀、可被勤仕状如件、

同月同日

「道義公御代」  
守護代僧唯道在判

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」九三三号文書ト同一文書ナルベシ)

53の1

「全」

御家人分雇狩人之事

税所介 百人

惣檢校 五十人

河俣大掾 五十人

同藤三郎 三十人

向笠諸次郎兵衛卅人

東郷郡司 四十人

羽坂藤七太夫 四十人

姫木弥四郎 二十人

切手又次郎 三十人

修理所 四十人

小河郡司 五十人

木房大掾 四十人

田所小太夫 五十人

右、任先例、支配状如件、

正應二年八月廿三日

右、任先例、与判了、無懈怠可被勤仕状如件、

「道義公御代」  
守護代唯道在判

53の2

「全」

木原朝追立宿事

東手引

<sup>⑩</sup>追渡瀨五郎男 三十人

左右六  
源太郎 八郎

栗野屋形源三郎 二十人

成佛  
源三郎 諸太郎

後邊河俣領分弥次郎 二十人

「瀧口カ」  
案内者紀藤次

瓦 <sup>(マ)</sup>

十五人 案内者十郎

西手引

杉尾ホカラノ峰 二十人

馬衆  
弥次郎 藤次

カイナサ、ヶ源藤次 三十人

弥次郎官衆

一坂 十郎 三十人

案内者平六  
藤四郎

守護狩目録次第事

右、代々雖有目録、先如此、然者長領為知行分、彼

狩人以下案内者、堅所申沙汰也云々、穴手皮任先例、



54 「全」

取進之候条、文書明白之上者、可守先規候歟、但近年者狩庭之鹿子并皮之事、行事為私用事、國面々存無相違也云々、守護代官方狩沙汰申談越如此、為後代於私注置之間、〔守護狩ハ二度ツ、春秋ニリ、シト見ユ〕毎年二ヶ度之御狩之時、當守護可申上者、不可有子細者歟、

沙弥圓也

(五三号文書ハ「旧記雜錄前編」九二四号文書ト同一文書ナルベシ)

来廿五日守護狩事

加治木郷

郡司

歩兵狩人廿人

上木田大掾

十人

下木田大掾

十人

中津河湯「原ニ」拂曉可有狩聚候、致三ヶ日用意、自身早々可有見参候、若雨降候者、可為次之日候、〔⑩〕右、任先例、支配状如件、

元亨三年七月十一日

酒太夫季親

55 「全」

来二月五日守護狩事  
曾野郡

税所介

歩兵狩人廿一人

惣檢校

十人

曾郡司

五人

河俣大掾

八人

重久「大掾篤兼」

十人

向笠

五人

同藤二郎

三人

中津河湯原可有狩聚候、致三ヶ日用意、自身早々可有見参候、若雨降候者、可為次之日候、〔⑩〕右、任先例、支配状如件、

元亨二年正月廿五日

沙弥圓也

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一三三七号文書ト同一文書ナルベシ)

来二月五日守護御狩之事

税所介	廿一人	惣檢校	十人
曾郡司	五人	重久大掾	十人
河侯大掾	十人	向笠諸次郎兵衛	五人
〔河侯〕 同藤三郎	五人	東郷郡司	十人
羽坂藤七大夫	十人	切手又次郎	十人
姬木弥四郎	五人	木房大掾	十人
祢寝郡司	廿人	佐多弥四郎	十人
同九郎	五人	伊佐敷大掾	七人
田代七郎入道	十人	小河郡司	十五人
栗野郡司	十五人	修理所	十人
加治木郡司	廿人	上木田大掾	十人
下木田三郎	十人	牧山大掾	七人
田所小大夫	十人	弟子丸	五人
國修行	五人		

元亨二年正月廿七日

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三三八号文書ト同一文書ナルベシ)

来廿一日守護狩事

祢寝院	郡司	步兵狩人	廿人
	佐多弥四郎		十人
	同九郎		九人
	田代大掾		十人
	伊佐敷		五人

中津川湯原拂曉可有狩聚候、致三ヶ日用意、早々可有見参候、若雨降候者、可為次之日候、

右、任先例、支配状如件、

元亨二年四月十八日 沙彌圓也

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三九七号文書ト同一文書ナルベシ)

守護私領頭役狩人事

重富	四人	用松	四人
庄司	二人	光王	二人

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三九八号文書ト同一文書ナルベシ)

元亨四年四月廿二日

右、先例如件、

秋松 二人

三郎丸 二人

政枝 二人

太郎太夫 二人

立田 二人

徳永 二人

主丸 四人

原木 二人

安氏 十人

吉光 二人

三郎太郎 二人

元行 二人

用丸 四人

59

『山田直五郎藏』

殿御国廻共人数

(ⓐ「引返シ裏ニ」ノ注アリ)

道鑑公御代「供」  
國廻狩御共人数事

御分

御力者四人

御物夫殿

御厩者十二人御馬十疋

福崎八郎

下二人馬一疋

田中入道

下一人馬一疋

乙鶴御前 御舎弟

下三人馬一疋

市来御前 同

下三人馬一疋

殿原

東条藤二郎

上下三人馬一疋

鳥羽孫七

上下三人馬一疋

鳥羽右衛門二郎

上下三人馬一疋

鳥羽弥六

上下二人馬一疋

御中間

御弓袋差

下一人馬一疋

『今モ三門乙名ノ永田氏ヨリ稱  
荷御神事ノ竊流  
永田太郎 馬ノ馬長ニ弓袋  
差ト云ラ年ノ勤メルモ此等  
の遺風ニヤ』

下一人馬一疋

宗五郎

下一人馬一疋

※「此ニ國廻狩ト申ス事、所謂天子巡狩ノ意ニテ巡レ所レ守也

ノ御狩ニテ、時キハ春ノ蒐ニ當レトモ、専ニ取レ獸ノ為ニ非

シ、此御供人数ノ多キ事トモ、實ニ今ノ御関狩ノ基本トモ

謂ツヘシ、又其御宿割ニ番串木野ノ場ニ限テ、御狩ノ為メ

ト註シタルニテ、其餘ハ守ル所ヲ巡リ玉フ為メナラン、本ヨリ守護職ハ其國ヲ守護シ玉フ御勤ナレハ、守護狩地頭狩毎年ノ御勤事先例ト為リ、其御作法年々ノ正二月比ノ初御狩ニ遣リ行ハレ、今ノ御関狩ナルヘクト愚考仕事御座候』

一惣家子并殿原次第不同

『山田』

式部彦七

④小田原「彈正忠カ」

小山田入道

『山田』④小三郎

式部

今村七郎

酒勾兵衛入道「称阿カ」彈正左衛門尉

兵庫尤

本田孫二郎

「久兼入道兼阿」

益山入道

中条六郎

本田藤内左衛門尉

直木彦二郎

本田新兵衛尉

仲四郎

市来崎彦六

本田四郎兵衛尉

上下六人馬二疋

源藤左衛門尉

上下八人乘馬一疋雜駄一疋

本田又四郎

上下五人乘馬一疋雜駄一疋

井入道

上下五人馬一疋

高水彦九郎

上下五人馬一疋

執行殿

「まゝ」  
上下四人馬一疋

白拍子一人

「和泉家元祖實忠ノ御コトカ」  
一泉殿御分

御馬三疋

御厩者五人御雜色二人御力者二人

松房御前御分

御馬二疋

御厩者三人御雜色一人

又三郎殿

御馬三疋

上下五人

殿原分

新田又四郎

馬一疋下二人

式部源四郎

馬一疋下一人

本田又六

馬一疋下三人

石塚平三郎

馬一疋下一人

- 谷口二郎三郎 馬一疋下二人
- 町田 馬七疋
- 大隅五郎兵衛尉 上下廿五人 雜駄二疋
- 伊集院 馬八疋
- 大隅助三郎 上下廿五人 雜駄二疋
- 猿渡新左衛門尉 馬三疋
- 猿渡藤三郎 上下十一人 雜駄一疋
- 姉崎八郎 馬三疋
- 猿渡藤四郎 上下十一人 雜駄一疋
- 伊藤入道 馬二疋
- 古庄縫殿允殿人数事 馬二疋下三人
- 脇殿 馬一疋さう駄一疋
- 國 下一人馬二疋
- 廻 御くにまわりかり御入所しゆくつきの事
- 狩 宿次
- 薩摩郡 官里
- さつまこほり 二はん
- 申木野 南郷
- くしぎの御かりの 四はん
- 日置 伊作
- へぎの庄 六はん
- 知寛 類娃
- ちらみのみん 八はん
- 給黎院 谷山
- さいれのみん 十八ん
- 鹿見島 郡
- 十一ハンかこしまのこほり

60の1

元亨五年後正月廿二日

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」一四二〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔鹿屋氏文書〕

嶋津御庄大隅方鹿屋院雜掌兼信謹言上

欲早領家一乘院鎮西御代管領匠作退座上者、當院惣

地頭名越尾張孫次郎殿代官、有限領家御進止地、令

押作六十余町水田并在家山野等、抑留追年領家御年

貢濟物等上、適僅遂内檢地、重令押作三十余町水田・

同在家山野等、毎年々貢濟物抑留間、彼是年々積不

可勝計上者、所詮、康元々以後悉遂結解、云御年

貢、云下地、被糺返子細事、

副進

一通 肥後藤内左エ門尉信行等ナラン、肝付郡ノ地頭名越尾張前司入道道監ノ地頭代ハ信行ト他ノ古文ニアリ

一通 同下地押領注文

右、於當院者、為領家一圓所務、至下地者、弁濟使進止也、佛神事之重色、公家武家之所課、吳于他、仍雖為地頭名、領家年貢不可有對押之由、貞應・嘉祿・寛

喜代々御下知柄焉也、況以領家御進止地、不相綺領家

御使并弁濟使、追年々貢一向抑留之上、適所遂内檢下

地等、同押作之、令抑留御年貢、剩押止田貫社御米之

間、年々積不可勝計、所詮、康元以後、悉遂結解、云

御年貢、云下地、可被糺返之由、為蒙御成敗、粗言上

如件、

元徳二年八月 日

※(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五五九号文書ト同「文書ナルベシ」)

※(頭注)

『田貫社ノコト、永正四年伊地知縫殿介重周垂水五ヶ所ヲ領

スル比、大旦那忠治公・同御親父忠昌公ノ御為メニ 手貫

大明神ヲ新造一字ノ棟札アレハ手貫社ナルヘシ』

注進

嶋津御庄大隅方鹿屋院惣地頭代官等、領家御年貢色

々濟物抑留并下地押領坪々在家山野等注文、

合

一押作田三十二町五段貳杖云々、「外八件略于此」  
【季安】

一狩倉事

皮三千七百枚

是者領家御狩者打止之、地頭お為宗、或狩倉跡在家等

仁不被相綺雜掌之間、所懸申于地頭也、康元々年以後

七十四ヶ年、一年別五十枚宛、

「此間数件略之」

一狩倉注文

大炊平 走出 立山 小板屋 牛平 由須乃木 狩谷

白木 大板屋 高牧 荒平 寺尾 牟禮 黒山 屎比

利山 楊橋之小平 赤木平 須田木 内乃小平 中武

鋤崎 東吹 西吹 妻鹿平※

右、水田在家園々山野④大略如斯、此外尚以押作在家以

下在之、且注文如件、

※(本文書ハ「旧記雜錄前編」一五六〇号文書ノ抄ナルベシ)

※『以上二十四狩倉分一ヶ年弁シノ皮上納五十枚宛ニ當ルト見

エレハ、大抵一狩倉二枚許宛ニ當ル、左アレバ、前ノ元亨

年間ニ沙彌圓也ガ注シ置ク守護御狩毎年二ヶ度ノ御狩ノ時

ニ、鹿皮ノ事トモ守護ノ代官ト申談タル赴ニモ合ヘレバ、

61

一狩倉分ニハ一狩ニ皮一枚ツ、春秋二度ニ二枚許ノ上納ヲバ、領家近衛殿ナドニ納ムベキヲ、道佛公御代康元元年以來、道鑑公御代元徳二年迄七十四年分地頭方ニ押領シテ領家方ノ御符ハ打止メケルノ故ニ、右ノ上納皮モ地頭方ニ懸ケテ算用致シ、鹿屋院ノ雜掌兼信ヨリ言上セシ文書ト見エタリ、且守護ト地頭ハ、得佛公ナト御兼務ト考ハル、コトモアレハ、地頭符モ守護符モ大抵同シ事ナラン、但名越尾張ナトハ肝付一郡ノ地頭ト見ユ、得佛公ハ島津御庄三州ノ惣地頭ヲ聞セラレシト考ハレ申スコトモナリ』

『田布施土岐島氏藏』  
 ※大岳の御よをつきたまふハ、せつさんさまと申、その御きやうたいニたふくはらニ式部太夫殿と申て御座候、それこそ御當けの御せんそにて御座候、それを分限ニつけ御申あらんとて、其比くしまハ野邊殿のもちきりにて候、せきかりニなつて、大岳さまくしまへ御光儀にて、野邊殿へくしまを御所望候程ニ、野邊殿ちからなくかこしまへさんてう申され候、やかてくしまへうつし御申ある云々、  
 『長祿二年比』

『慶長五年正月吉日』

鮫嶋日向入道  
『古船齋』松岳

(本記事ハ「旧記雜錄前編」一四二一号ト同一記事ナルベシ)

※(頭注)

『此野邊氏カ事ヲ按スルニ、刑部大輔盛仁カ時ニ至リ、忠國公其御子ノ伊作家ヲ嗣キ玉ヘル式部大輔久逸ヲ分限者ニ成シ玉ハントテ、御関符ニナズラへ、親カラ櫛間ニユカセ玉ヒ、盛仁ニ説キ飢肥櫛間ヲ奉ラシメ、飢肥ニハ新納江州忠續ヲ移サレ、櫛間ニハ久逸ヲ移シ、與ニ伊東界ヲ鎮メ玉フ、新納譜ニ據レハ、長祿二年ノ事ナラン、其時キ盛仁カ子野辺隠岐守篤盛ヲ覺島ニ召サレ、八町四段ヲ田毛村・原良村ニ賜ト云ヘリ、関符ト名付ラレシニ野辺氏ノ油断セシニテ、國廻符ノ先例久シキモ考ヘ知ラル、事トモ也』

62 「應永記」

同卅四年丁未、屬ニ無為ニ依ニ代始、國廻之無ニ滯夏、去程ニ年春テ應永モ卅五天ニ成行計利、

『右ノ代始トハ、義天公御他界ノ後、大岳公ノ御家督涯ノ事ヲ言ヘリ、此ニ國廻ノ滯夏無シトアルモ、元亨

四年、道鑑公國廻狩ノ例ニテ御閑狩ナラン

(本記事ハ「旧記雜錄前編」二一四三号ト同一記事ナルベシ)

63 『島津撰津介忠譽古日記』

一享祿二年二月廿日、れいかふ神かりにて候、かのし、  
「ツ」猪「ツ」猪「ツ」猪  
二・ゐの子一取候、与四郎殿・弥二郎殿越候、桶口殿  
父子多へ越候、十郎三郎との・大儀殿父子谷山のこと  
く出舟候、吉永方帰候、平七殿・藤左衛門殿狩ニ上候、  
廿一日、藤さへもん方帰候、

64 『全』

一天文六年丁酉正月五日、恒例ニ下かくらかり候、城衆  
五人上候、しゝ七まるひ候、晩氣より雨しきりにふり  
候、  
「荒平」「狩」「猪鹿」「ツ」「轉」  
一七日、あらひらかりにて候、しかに五まるひ候、又多  
「頭姓ノ地名」「別府」「手負」「此方」「射」  
※ないくさニひやうよりておい入候をこなたにてい留候、  
「キ」「別府」  
次の八日ニひようニ遣候へハ、あんとう前ニ七日まで

ハ申合候間、此しゝハ返し候、七日過候てハ相違ニ可  
申承候とて、禮ニいて遣候由、清左衛門申候、此しゝ、  
城ニあかり候、

※「此天文年間ノ狩立ハ、皆弓箭ニテ如此猪鹿ノ獲ものも有シ  
ト見得タリ、天正十五年 太閤西征、平佐城責の事をハ、  
城兵山口又左エ門カ覺書に、味方は能程弓箭にて敵は鉄炮  
ニテ候云々、桑波田孫八郎殿鉄炮にて能敵被射候事云々、  
山内淡路守殿鉄炮にて過分敵被射候と、此二人の外ハ皆弓  
鎗指刀にてとあれは、此時代の狩も想ひ知らるゝ事ニ御坐  
候」

65 『伊地知越後守重實日記』

一天文廿二年正月朔日、御社参、老中御酒持参被申候、  
御酒もりにて候云々、 廿日、春山の御かり、

66 『上井伊勢守覺兼日記』

一天正二年甲戌九月卅日、春山御狩にて候、其夜御供申、  
罷帰候、



67 「全」

一十月十三日、伊作就御狩之儀、早朝永吉へ越候、  
【實明公】  
 十四日、御狩ニ而候、三窪江参候而、其夜は留候、  
 十五日、此朝永吉へ帰候、十六日、又御狩ニ而候間、  
 早且三窪へ参候而、直ニ御供申、如鹿兒嶋罷歸候、猪  
 鹿二日之御狩ニ廿丸まろひ候、  
(⑨九)

68 「大村市兵衛重頼古戦書」

(本記事ハ四五号トホボ同文ニツキ省略ス)

69 「新納内蔵久備書出」

覺

肥後佐敷之城御責之時、忠元大口より人数差向申之由、  
 佐敷へ其聞得有之、致用心ニ付、心能難責落、家来馬  
 ※ 場走左衛門へ申合、往来之旅人ニ取仕立、佐敷罷通ら  
 せ候処、彼表ニ而走左衛門江尋候者、大口之新納武蔵、  
 當城を責落之支度いたし、人数揃有之由ニ相聞得候、  
 薩州より罷通候旅人と相見得候、右通之次第見掛不申

哉と申たる之由、其時節候者成程罷通候、大口ニ而者

関狩と申候而、狩集之勢揃ハ有之由ニ承候、軍陳之勢  
 揃ニ而者無之候与相答候、其時佐敷方案ニ落、用心之  
 心掛相やミ候儀を相伺、急ニ責入申候故、其節致落城  
 候、天正八年より十年迄之内ニ相見得申候、究而年間  
 書記無之候、右答之趣、武蔵より走左衛門江委細申合  
 答させ候、其翌年より関狩之号難取止候之故、大口・  
 羽月・山野三ヶ所打寄、正二月之間ニ年々致狩立、其  
 首尾山奉行江申出来候申傳候、

但天正九年辛巳九月廿日、水俣之城御手ニ入、

右、御用之由承知仕候付、書記差遣申候、

〔安永五年〕  
申

三月十七日

新納内蔵

※ 『此事は勝目兵右エ門聞書に、相良修理亮頼房ハ其頃より改  
 名して義照と名乗れける、去々年豊州勢日向着陣の折節、  
 大口表へ色々念を掛られけれども、武蔵守忠元日向表の出  
 張を差許され、大口へ住番せられける間、おもひのまゝに  
 難計して、今日よ明日よと時刻を俵れける處に、豊後陣敗  
 軍と成れハ、今ハ早手持あしくそ見えにける、されとも阿

蘇家に一味して未<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>薩摩<sub>一</sub>に依て、天正八年五月十三日に新納忠元計にて、菱刈・牛屎両院の軍兵三千餘騎を催し、朴の河内の城を攻落さる、聽て終野の岩牟禮といふ所に城を構へ、両城差合ひ持せ給へ者、相良弥敵と成にけり、右通見得たる忠元の計といふ、即此関狩の声音にて、両院の兵三千を催したり、大口にても丸田利兵衛と云もの、享保九辰閏四月、祖父休右エ門より聞おける口碑を留置くあり、此ハ忠元の菱刈七ヶ外城の衆町人百姓聚らるゝを佐敷地頭聞て其備あれハ、丸田筑後を使として、當年より始て関狩を持月浦に催せり、何そ氣遣に及ましと言論させ、備を弛へし比其使の販るに、忠元の出勢に小川内の上場にて行逢ひ、其假押寄せ攻陥されし例にて、菱刈七ヶ外城の土衆町在まで御舊式の御関狩年々興行し、何比より欵四ヶ外城ハ立さるとの赴き口碑なれハ年号等さたかならず、然トモ休右エ門ハ筑後か孫也といへり』

(本記事ハ行間ニアリ)

一天正十年壬午正月七日、川上上州御指出候云々、伊

【久留】

作・田布施之初狩之し、行司兩人持参候、しハ納戸へ渡申候、一九日云々、此日加世田之はかり之し、参候、行司ハ通之間ニ而懸、御目候、早晚之ことくしハ納戸へ渡候云々、

(本記事ハ一八号ト同一記事ナリ)

71 『上井伊勢守覺兼日記』

一天正十一年癸未二月十八日云々、此日、狩のため加江田へ越候、此夜ハ常瑠璃寺江留候、見物之為娘召列候、鎌源同心申候、爰かしこより酒肴杯預候、此朝野村丹後守鹿兒嶋より帰候也、十九日、こゝの比良江着候、鹿蔵様子共見候云々、廿日、狩させ候、宮崎衆中各被立候、清武よりも衆中五六人被立候、都合狩人七百餘にて候、猪鹿九まるひ候、拙者も一射候、諸所より酒肴等到来候、鹿倉一狩候て、▽⊕御酒にて△日を暮し候、此夜もこゝのひらへ留候、

72 『伊地知右京亮重則御年男日記』

一同十二年甲申正月拾日云々、従加世田井尻宗左衛門殿  
初狩之猪し、三丸持せ被参候、とふりの間より御目に  
懸候云々、拾四日云々、伊作のきやうし初かりの  
し、持せ参候、とふりの間より 御目にかけて候、し、  
ハ六丸にて候、

(本記事ハ一九号ト同一記事ナリ)

73 『伊地知勘解由重元御年男日記』

一天正十四年乙酉正月八日云々、伊作・田布施のは狩申  
上候て、きやうし兩人懸 御目候、猪三丸御具足の餅  
之時にして召置候、まる猪一丸・鹿四丸奥へ上申候云  
々、九日云々、加世田のきやうし、は狩の猪六丸・鹿  
五丸上申候、納殿江鹿四丸渡申候、奥江猪二丸上候、  
猪三丸納殿衆・三官へ遣申候云々

(本記事ハ二二号ト同一記事ナリ)

74 『上井覺兼日記右同年』

一二月廿日、御遊山ニ昨夕より谷山江御光儀之由候間、  
出仕不仕候云々、廿二日云々、此晚従谷山御帰鞍也、  
一廿三日、出仕如常、御留守中談合ノ趣、伊伯・本刑被  
申上候、御同前被思召由也云々、此日御狩の鹿一丸  
被下候也、

75 『全』

一三月二日云々、此晚紫波洲崎へ参候云々、田野より行  
士山本越後拯来候、於田野近日御狩之由候条、其儀尋  
ニ来候由被申候、是茂宮崎衆同前御酒寄合候、

76 『全』

一三日云々、田野行司ハ来七日八日狩たるへき由申聞、  
帰申候也、四日云々、従田野使者到来候、御狩来七  
日之由、日出候由也、五日早朝、穆佐・飯田・木  
脇・蔵岡・富吉・曾井・清武・細江・長峯・下之別  
府・宮崎江明後日七日於田野御狩たるへく候、人数馳

走▽<sup>④之</sup>候て△可被登せ候由、申渡候也、 六日云々、

衆中各同心申、田野へ罷越候也、楠原上之門へ宿申

候、廳而大寺殿、行司其外山功者之衆被召列被來候

て、狩談合共申候也、 七日、狩ニ罷立候、吉利山城

守殿・福永宮内少輔殿・同備後守、樺山殿より御同名

衆御立被成候、曾井より衆中各被立候、比志嶋殿<sup>④ハ</sup>中

途迄打立被成候得共、指合事候て歸らせ也、清武衆中

各被立候、田野衆勿論候、宮崎・海江田衆・木脇衆被

罷立候、猪鹿十二三取候、此夜ハ行司処江宿申候、吉

山城守殿・大寺殿御座候て語也、大寺刑部左衛門殿

酒肴被持來候、各寄合賞翫仕候、 八日、如海江田罷

歸候、路次續之鹿藏之狩にて候、吉利山城守<sup>④殿</sup>も同道

申候、大寺殿柴屋構被成、種々馳走之會尺也、鹿五六

取候、狩人昨日ハ千人程候、今日ハ五百人計也、 四

月十五日云々、蓮香民部少輔、

77 『蒲生谷口氏蔵』

一御かくらのうちに鉄放なり候はん砌者、其寄々の行司

前より穿鑿仕届られ、則可被申上候事、

一御狩、從鹿兒嶋墨付地頭行司へまいらざる間被仕まし

く候事、

一御狩之時分、隣方より檢者可被罷出候、自然狩ニ不參

之人於有之者、一日ニ老人ニ付鳥目百文宛之可為科物

事、

一御狩之可有之時分者、行司可被存候間、前以伊勢大内

記殿・白濱七介殿山究之奉行被仰付候間、彼衆へ可被

申越候事、

一猪鹿之えた、噯衆以談合彼等才覚可被仕候、但シえた

御用之時ハ、右兩人より可被申越候事、

一地頭狩、一年ニ式度たる可候、付御立かくらの外山ニ

て可然候事、<sup>『元亨年間沙弥園也カ守護ノ代官ト申談タルモ、毎年ニケ度之御狩トアリ、地頭狩ノ二度宛モ舊遠の作法ナリ』</sup>

一地頭かり、御定之外仕られましく候事、

一御狩定の事、正月一度、二月一度、三月壹度、十月壹

度、十一月一度、十二月一度、合六度たるへく候事、

一御立かくらの内ニ自然為入者有之よし他所より相聞得

候者、其所ニ行司科可被仰付候事、

一 鹿兒嶋又従方々茂墨付無之人、山へ被入ましく候事、

一 御立かくらの内へ、縦手負鹿雖入候、つなき入ましく候事、

右之條々、聊不可有緩者也、

【琴月公御家老】

樺山權左衛門尉印

慶長十二年三月廿九日

【島津】、【忠長】  
圖書入道印

【絶益】  
うるし

行司

※(頭注)

【一ヶ年六度ツ、ノ御狩此ニ見ユ、未詳其始】

78

【季安家藏】

猶々、所之衆中耆人ニ付植木五本ツ、年々ニ可被

植候、うへ所ハ所の衆被見合候て□所ニ日當ニ

可被植候、木ハうるし・はし・杉たるへく候、若

枯候ハ、其人可被植替候、

※1 急度申候、仍諸百姓殿役沓ケ月ニ三日ツ、被召仕候、

其上者被召仕間敷被相定候、然者右之様子殿(役カ)行奉行江

茂被仰渡候、就夫右被召仕候分量諸所愛衆へ被仰付、

手形を以殿役奉行江一ヶ月ツ、之首尾可被申理やうニ

可有談合候、巨細者殿役奉行より可被申候、兼又地頭

※2 其所之百姓曾以被仕ましく候、但如例年之地頭ハ一年

ニ二度ツ、之狩可為其分候、かたく右之通申渡候、又

遠方之諸所ハ一夜泊二夜泊之日數、右三日ニ可被相引

候、馬老疋も一人役ニ可立候、通道宿送も右三日ニ可

有算用候、若三日之内一日二日被仕候而、余日分者一

人ニ付鳥目百五拾文ツ、可為出錢候、右相定儀、緩に

おゐてハ可有其沙汰候、恐々謹言、

【琴月公御家老】喜入摂津守

忠政判

【疑寛永三年】

二月九日

【全】

【島津】

下野守

久元判

【加久藤地頭】

【友泰】

五代勝左衛門尉殿

御宿所

※1 【殿役奉行ハ宝永七閏八月被相疊候、人馬賦ハ郡方差引ニ被

仰付、實米等之手形ハ表方代官座差引ニ被仰付、正徳三巳

八月、殿役方ノ唱ハ人馬賦、殿役米ハ賦米と被唱替候】

『蒲生土有馬氏藏』

※

## 覺

- 一 御狩ニ不參衆改之事、
- 一 每度木引之時不參衆之事、
- 一 諸役人書立可被見事、
- 一 殿役夫遣沙汰之事、
- 一 狩夫遣帳之事、
- 一 當年出物皆濟之事、
- 一 浮所方見舞衆算用無油断可被究事、

『寛永十三年』

「子」

十二月廿四日

『蒲生地頭』

市来八左衛門尉判

※『諸百姓夫仕一ヶ月ニ三日ツ、召仕、其上ハ不召仕ノ制令也、其故ニ三日ノ内ニテ若モ一日ニテモ二日ニテモ召仕ハレザル百姓アラバ、其者ハ其日モ自分稼シテ居ルノ故ニ、

※<sup>2</sup>『元享年間より地頭狩一年ニ二度トありて、慶長十二年ト此

寛永三年欵も一年ニ二度ツ、の狩許ニ地頭其所の百姓を召仕候事、上古より旧遠の作法と見得たり』

一日一人ニツキ錢百五十文ツ、ノ出錢ニ定ラレシト見エタリ、延喜式ニ正丁ハ歳ニ十日ツ、役ス、其役セサル者ハ一日ニ布二尺六寸ヲ為ル十日ニ二丈六尺ヲ收ルトアルノ類ナラン、地頭モ其所ノ百姓ヲ自由ニ召仕コトハ曾テ成ラザル法令ナレトモ、先例ニテ一ケ年ニ二度ツ、惣立ノ狩バカリハ右ヨリ年々御免ナレバ、此モ若シ地頭ヨリ二日トモ狩セズシテ召仕ハザル百姓ハ、同ク自分ノ稼シテ利得アルノ故ニ、毎年二月ト十月ニ、古来ヨリ一日ニ七分宛狩夫銀トテ地頭ニ收ル事ト見得タリ、此来由能ク郡方ナト知レザルトテ問ハレ集置タルヲ、全縣狩ノ事ニモ係レハ其假ニ類抄之仕置候』

80

一 寛永十五年戊寅正月、嶋原御加勢立之節、加久藤地頭伊地知左右衛門尉在陣中、米錢出入付衆中小原織部佑留置帳内狩夫召仕候事如左、

『地頭其所ノ百姓ヲ一年ニ二度ツ、召仕、御免ノ夫ヲ狩ノ代リニ軍ニ召列タルト見エタリ、左アレハ此者共ヲ此年狩ナトニ召仕事ハ成ラン御法ト見ヘタリ』

一 真米八升者 狩代ノ夫

長江浦之下之藪之 同樋口之 同東之 同西之  
 久作 七郎 新次郎 八兵衛尉  
 同中間之 中福良ノ川北之 同川北之 栗下北川  
 弥右衛門尉 内蔵介 新六 孫作  
 右者、正月十七日之晚より同拾八日之朝迄、三ヶ村  
 より狩代ニ参候夫賄候、

以上

一筆申入候、仍御暖中度々狩代雜石代八合未進之首尾、  
 上使賄方御旅代官付衆帳面之写、爰許へ首尾可被申旨、  
 数度申渡候得共、于今不相濟候、重而御觸申間敷候間、  
 御手前より稠敷被仰渡、急度其首尾可承候、恐々謹言、

「寛永」

五月廿六日

「島津」  
 左近将監

久重判

蒲生

暖衆中

まいる

「暖ハ今ノ郷士年寄也」

「久高次男ニテ、甥幼年ノ比家  
 督、后ニ別立、今伊織殿先祖」  
 枕山權左衛門尉  
 久盈

一書申□候、仍  
 寛永十五年分  
 かり代帳未進之事 澤原野御牧ニ狼當候ニ付、狩御免之由候而  
 御使衆之御状有  
 (寛永十九年) 「行司」  
 午閏九月三日 竹内權左「エ門」

右者、沢原野御牧ニ狼當候ニ付、六度狩り御免候て

犬立可被仕之由、御老中衆被仰通、鎌田源左殿より伊

地知左右衛門□参候書状見届消候、未七月七日、

同十七十八年分  
 一狩代帳未進 寛十六年より境目ハ狩代御免の廻文写見届、未七  
 月七日消候、

「外十二ヶ条略于此」

右、御算用首尾無之候間、来月中ニ被致参上可被相  
 濟由可被仰渡候、多年之算用出入不相究ニ付、當春  
 「寛陽公」  
 御上洛之刻、我々江被仰付相究候、此中之様於遲参  
 者、稠可及御沙汰候間、延引有間敷候、或相果候衆、  
 或無跡衆ハ相糺可被申出候、於緩者各之越度ニ可罷  
 成候、為後日如此候、跡大分之出入相究事候間、相違  
 之儀も可有之候、若算用相濟候衆ハ、何年之何月何  
 日之目録と書記、可被差出者也、

御勘定所

伊集院左京亮【久眞】

新納加賀守【忠清】

加久藤暖衆中参

寛永十九年  
九月十七日

83  
【全家蔵】

一筆令申候、仍其地毎年之上納方品々未進立之書物御算  
用所より御遣ニ而候、以請取惣別相濟候て、右書物消申  
候、満足此事候、向後共ニ其時節々々ニ上納候様可被申  
付候、少も油断有ましく候、恐々謹言、

【加久藤地頭】

伊本右衛門尉判【地知】  
【重政】

寛永廿年癸未  
九月廿二日

加久藤暖  
白坂大炊左衛門尉殿

西田和泉守殿

川野与右衛門尉殿  
御宿所

84  
【加久藤暖案文留】

今月初より行司衆御算用ニ参上候様ニ、前々廻文相廻候  
処、干今延引、無心元候、早々参上様稠敷可被仰渡候、  
御算用之様子ハ、六度御狩之代錢上納請取、同鹿皮受  
取、前々算用ニ被逢候時之次御目録持参候之様可被仰付  
候、聊御延引有ましく候、恐々、

【山奉行】

仁禮藤左衛門

寛永廿一年甲申  
二月十六日

藥丸大炊兵衛尉【兼陣】

和田讚岐守【正貞】

新納二右衛門尉【久親】

横川栗野諸所

御暖衆中

85  
※ 寛永廿一年申正月五日勘定所日記

『正月六日雨天』

一 今日吉野御狩御座候而、人数迄打立候得共、雨天の  
故相留候事、

(本記事ハ「旧記雜錄後編六」三六七号ノ抄ナルベシ、尚本記事ハ前号文書ノ行間ニ



7リ)

86

吉田御狩檢者

〔寛永廿一年〕  
〔申三月十日集者長野之由候〕

茵田刑部左衛門尉

松岡長右衛門尉

飯野御狩檢者

〔全〕  
〔三月十八日〕

奥神介殿

上野半兵衛殿

御狩者南山也、

87  
〔全〕

猶々、以此狩代先春之一度分、今月中ニ上納可有之候、今一度分者、當秋中ニ上納候様ニ可被仰付候、勿論此状見届候通諸所ニ而喫衆之判可被仕候、左候而、曾於郡より此方へ可被持せ候、以上、

※ 急度申越候、仍此中地頭衆年中ニ二度之狩ニ諸百姓相立候處、去年地頭狩之儀ハ被召留候条、 公儀江右之

狩人一日老人ニ付七分ツ、之賃銀、前之地頭被召仕候狩人より可差出之由相定候間、今月中ニ七分ツ、之算

用を以、上納仕候様可被申付候、人数究之儀者、喫衆以吟味帳相調、狩代銀上納之刻、同前ニ可被差出候、緩之儀共候ハ、各々可為越度候、

〔寛永廿一年〕

〔御使衆〕

相良權兵衛尉〔頼貞〕

〔全〕

平田豊前守〔宗直〕

五月九日

帖佐平松ヲ始とシテ曾於郡迄三十四外城

諸所喫衆中

但此状五月十三日ノ八ツ時分ニ馬関田より參候而、即刻飯野之様持せ遣候、

※ (頭注)

〔地頭ノ狩夫銀、寛永廿年末ノ冬ヨリ一日一人ニ付銀七分ツ、御物上納ニ被仰付、地頭狩ハ停止セラレシト見エタリ、御物ノ丁庸ハ一日ニ出錢百五十文ツ、ト見エルニ、狩夫大抵半減七分ツ、ノ出銀ニヤ、毎年二月十十月ニ地頭方へ古來納來ル由、是所謂狩夫銀ナリ〕

88  
〔全〕

猶以病者之沙汰有ましく候、以上、

急度申越候、然者此中諸地頭衆へ、在郷之百姓以下之者年中ニ二度之雇御給候へとも、去冬より〔寛永廿年〕 公儀江被召上

候間、其御心得ニ而、人衆拾五歳より六十歳迄新改札帳面ニ而被書記、其所之嘍衆・行司衆與書被成連判候而可被遣候、指出ノ案文別紙ニ而遣候、被御覽届、来月十五日ニ鹿兒嶋山奉行所江可有上納候、自然緩之儀候ハ、其所之嘍衆・行司衆可為越度候間、為御心得候、書状次第ニ可被次渡候、恐惶謹言、

『寛永廿一年』

『山奉行』仁禮藤左衛門尉

六月五日

藥丸大炊兵衛尉『兼陣』

黒葛原周右衛門尉

新納二右衛門尉『久親』

横川より日州表穆佐迄十五外城

嘍衆 行司衆中

まいる

89 『全』

差出案文

合人数何百何十人 但札ノまゝ

雇錢何百何十人

右者、年中ニ二度之地頭雇賃銀之内、去冬老度分在郷

人数拾五より六十歳まで、一日一人ニ付銀七分ツ、ノ

算用ニ上納申候、右之外ニ一人も無御座候、若隠人御

座候ハ、我々如何様ニ茂可被仰付候、已上、

寛永廿一年 何月何日

何方ノ嘍 何条何かし判

かこしま 山奉行所

同行司 右同

90 『全』

一書令申候、仍諸百姓符代銀年内老度分、十五より六十

歳迄上納可申之由被仰付候間、急度上納可申覚悟候、就

夫諸士かけ披官衆神領之者連々地頭符ニ不罷立候、左様

之者ハ今度茂相除申候、御方ハいかゞ被成候哉、具之通

御報ニ可示給候、尚期後音候、

『寛永廿一年甲申』 七月廿一日

『加久藤嘍』

四人

白坂大炊左衛門篤豊  
西田和泉守時通  
川野與右衛門通昌  
伊地知彌右衛門重延

本田半右衛門尉殿

弓削将監殿

91 『全』

野田狩野介殿

〔此帳案文留ニテ只四人トアルハ以下皆同シ、時ノ地頭ハ伊地知左右エ門重政ニテ、右ノ通昌ハ其附衆中、重延ハ其實弟ニテ、子孫皆加久藤ニ居レリ〕

一書令申候、仍狩代錢年内一度分、諸百姓并名子脇之者十五より六十迄付立、一日ニ一人ニ付七分ツ、算用ニ、今度八朔之次ニ上納申候、然処ニ歴々ノ披官衆も在郷ニ罷居、作敷を仕程之人者、誰人之御内衆ニ而茂狩代上納可申之由、山奉行被仰聞セ候故、此度ハ皆濟不罷成、使之人茂帰宅ニ而候、就夫右之狩代銀ハ、行司衆算用ニ被逢答之由、山奉行被仰候、然時者、右之出銀行司衆被受取候而、上納之首尾被仕候ハてハと出合申候、乍去御方如何被仰付候哉、承度存候、御隣方之儀ニ候条、御同前ニ仕度候、御報具可得御意候、恐惶、  
〔寛永廿一年申申〕  
七月八日

四人

飯野

御慶衆中

まいる

92 『全』

受取此受取、岩『崎』彈丞殿算用ニ被參候時持參可申由候間 錢拾貫文ハ、此本受取濟ニ而算用ニ被合候而けし被申候へ共、被持戻候間受取、袋ニ入召置候。 右者、加久藤地頭狩夫代錢去冬壹度分ノ内人数式百人分ノ由、山奉行引付也、

金銀藏

〔寛永廿一年〕

川村半左衛門尉

申

八月四日

大山九郎兵衛

満尾堅介

〔加久藤行司〕

竹内權左衛門尉殿

93 『全』

御返札之趣、具令披見候、仍狩代銀、御方茂行司衆へ被仰付候哉、尤ニ存候、此方ハ、先日上納申候分ハ、庄屋被取揃、八朔之御禮ニ被參候人被相納候、右ニ申候様ニ、諸士披官衆茂作敷仕程之人々ハ上納之由承候、左様成過分之儀ニ候条、行司衆へ申付、上納之首尾可被申通可申渡候云々、恐惶、

〔寛永廿一年甲申〕

八月九日

飯野  
御暖衆中

四人

94 〔全〕

貴札之旨、具令披見候、仍當毛御檢者御越可被成時分ハ、

所より御注進可申之由、兼而被仰聞せ候、就夫来ル十日

比ニ者、御奉行衆も可被成御越之由御申上可有之通、尤

ニ令存候、左候ハ、此方より茂其分ニ可申入候、飛脚

も名中へ可被仰付由乍案中候、何も御隣方之儀ニ候間、

御同前ニ可仕候、将又狩代銀之事、白鳥山ハ無公役之儀

ニ候、其外諸士披官衆などハ被仰觸候哉、けにく不被

成候ハ、墨付御取、鹿へ可被差上之由候、是又御尤ニ

候、此方も其分ニ可仕候、尚期後音候、恐惶、

〔寛永廿一年甲申〕

九月二日

〔飯野暖〕

弓削将監殿

本田伴右衛門尉殿

野田狩野介殿

御報

四人

95 〔全〕

態令申候、仍

一當年中之御狩并代錢、所賣之竹木之代、萬札運上彼是、

各取納之分ハ無延引、来ル十二月廿日より内ニかこし

まへ參上候而、必可有首尾候事、

一六度御狩之儀、しゝの立廻りを見定、念を入、行儀能

可被狩候、しゝの立廻無之候時分、人数之隙次第ニ被

狩候ハ、行司衆落科たるへく候事、付かこしま衆

犬山之儀、不依誰人我ゝ手形出申候間、其心得有へく

候、若手形ニ書違候共、六度之御狩倉ニハ曾以案内者

有間敷候事、

〔外ニハケ条略于此〕

右之条々、連々申渡儀ニ而候間、無申迄候へ共、為後

日如此候、是を其所行司衆手前ニ被寫置候而、目のあ

たりニ押付候而節々被見、如此油断有間敷候、恐惶謹

言、

〔寛永廿一年甲申〕

十一月朔日

藥丸大炊兵衛尉

〔兼傳〕

和田讚岐守 〔正貞〕

黒葛原周右衛門尉

【忠清】

横川ヲ始倉岡迄十五ヶ所

右諸所

行司衆

竹木見廻衆

御暖衆中

まいる

96 【全】

差出

【御使役】

一相良權兵衛尉殿・平田豊前守殿御条書を以被仰聞せ候

【頼具】

【宗直】

趣、慥承届候、

一諸百姓狩代銀、去八月帳相調、銀子上納申候、受取有之候、外諸士かけ披官衆申分有之候而、狩代銀未納候、

【外五ヶ条略于此】

【寛永廿一年】

申

十一月廿日

御奉行所衆中

まいる

【今ノ郡見廻】

郡奉行

暖衆

【今ノ郷士年寄】

97

態以廻文申越候、仍

一前より山之講狩被成候而杉さし被成儀ニ候、何方へいか程さし調被成候哉、其年々之分、于今何程有之由、堅固ニ可被書出候事、

※ 一御狩之時分、完之立廻見届候て、必卯之刻ニ相集り、

狩立念を入、むかしより之作法ニ無相違被狩、朝之星晚之ほしかた、可被相調候、勿論卯之刻過候而相集

狩人ハ、不依衆中【狩不參ノ人ハ一日一人ニ付鳥目百文宛ノ科物被相掛タルヘキコト慶長十二年ノ制令ニアリ】在郷其日之未進ニ書留、科物被相掛

可然候、畢竟狩之作法あしく罷成候儀、行司衆ハ不及

申、其所之頭立衆御外聞いか、敷候事候、【外五ヶ条略于此】

右之条々、被聞召届候通御返事可給候、恐惶謹言、

【山奉行】

藥丸大炊兵衛尉

和田讚岐守

川上五兵衛尉

新納二右衛門尉

【正保二年】  
酉二月廿九日

横川より倉岡迄十五ヶ所

行司

竹木見廻衆

御暖衆中

※(頭注)

『元亨三四年守護狩ノ觸狀ニ拂曉ニ狩聚アルヘシ云々ヨリ此  
正保二年迄三百廿餘年、況ヤ元亨ノ時ニ既ニ先例トアレ  
ハ、此ニ昔ヨリノ作法ト見ヘルハ實以テ 得佛公三州ノ守  
護御補任ノ御頃ヨリ有シ御作法共可申ヤ、何レニモ舊遠ノ  
御作法ナラン』

98 『全』

書物

一 諸百姓 公儀御定御狩之外ニ、私狩犬山鰐などに登せ  
申間敷候事、「外十一ヶ条略于此」

右之條々、若緩之通脇よりも被聞召付候ハ、、我々越  
度ニ可罷成候、為後證如斯候、以上、

正保二年

五月廿四日

暖四人

郡見廻

二人

後醍醐院喜兵衛尉殿

『宗信』

99 『全』

覚

一 はしの木 一 うるしの木 一 桑 一 さし杉

一 茶 一 梶 一 萬かぶ類

右植木首尾鹿兒嶋江可被申出事、

一 狩代銀之儀、二月一度十月一度、古来より地頭被仕候  
様ニ狩人一人一日ニ七分ツ、上納可有之事、「外八ヶ条  
略于此」

『正保三年』  
戊正月三日

此条書ハ川『野』与右衛門尉殿年頭ニかこしまへ参上  
之砌、寫候て持帰被成候、

100 『全』

猶く申上候、求麻表當分ハ為何事も無御座候、

乍去連々商買ニ参候もの一人、為可承合今日又々

さし遣候、何そ新敷儀共承付候ハ、、次飛脚を以

可申上候、已上、

※ 急度令啓上候、仍菱刈表之衆加州老御奉行被成御當出

101  
『全』

水表江大狩御座候ニ付、人数被召烈昨朝大口ヲ御打立之由相聞得申候、為何様子共爰元江者不相知候、此地堺目之儀ニ候間、ちと様子被仰聞せ度存候、如御存知【伊地知】『重政』寛永十三年ヨリ加久藤ノ移地頭ナレト之、當分左右衛門尉留主之儀ニ候間、心遣千萬ニ候、モ、此時ハ御使役ニテ江言ニ御供ノ故留主也自然此表之衆も罷立儀ニ而御座候ハ、前以御注進可被仰聞せ候、内々其用意可仕候、先々為御内證申上候、萬端御入魂之儀奉頼候、恐惶、

『正保三年丙戌』  
 四月廿六日  
 『御使役』『忠秀』  
 新納刑部様  
 参人々御中  
 『加久藤』  
 四人

『加州老トハ大口地頭ノ新納加賀守忠清』

貴札之旨、具令拜見候、仍御無事ニ其許へ御参着、目出度奉存候、随而者出水表江大狩御座候ニ付、加州様も其表之人数被召烈昨朝御打立之由候、俄之儀ニ御座候間、彼是御太儀無申計候、然者自然此表之衆も罷立儀にて候

102  
『全』

ハ、前以御注進奉頼之由申て、今朝刑部様迄飛札を以申上候、是又為御存知候、將又求摩江茂為可承合せ一人さし遣候、新敷儀とも御座候ハ、即刻御注進可申候、又為何儀も無之候ハ、申上ましく候、此度之御狩之様子、具ニ被聞召付候ハ、ちと被仰聞せ度候、將又何比御帰宅ニ而候する哉、承度候、尚期後音候、恐惶、

『正保三年丙戌』  
 四月廿六日  
 『地知』『重頼』『地頭左右エ門筆養子、實ハ新納加賀次伊主膳様』  
 男ニテ、刑部忠秀ノ弟也、此時實父ノ尊報 地頭所大口ニ往キ居レリ』  
 四人

猶々以令申候、江戸御犬追物、今月七日ニ相調候而、御仕合能候由御左右御座候と、大口より相聞得候、是又為御存知候、以上、

貴札之旨令披見候、仍昨日申入候様ニ、菱刈表之人数加州老被召烈、一昨日出水表江大狩御座候ニ付、御打立之由候、無心元存候て、當分伊主膳正も大口へ被差越逗留ニて候間、兩度尋ニ遣し申候へ共、為何様子とハ不相知候、唯大狩之由候通被申越候、就其鹿兒嶋新刑部様江為

可得内證ヲ、昨日飛脚差上候、彼飛脚明日明後日ハ可罷

帰候条、新敷儀共有之候者、追付御注進可申入候、將又

御方へ茂日州表よりも新敷左右共御座候ハ、御注進頼

存候、恐惶、

『正保三』  
卯月廿七日

二人

飯野御暖衆中

参

103

『全』

一書申候、仍諸所六度狩、不依御倉入・給人持、自今

『是迄ハ六度狩ニモ御蔵入・給地ノ差別無ク、百姓共モ衆中同ヤウ狩立

以後ハ可為御赦免候間、其段可被申渡候、就夫別ニ被

シ来レルヲ、此正保三戌八月ヨリ、百姓ノ狩立ハ御免アリテ、御符ニ

仰付様子共候、御蔵入奉行喜入吉兵衛尉殿・相良權兵

衛殿方より可被申渡候、可有其心得候、恐々謹言、

『寛陽公御家老』『山田』  
民部少輔『有榮』  
『川上』  
因幡守『久國』  
『北郷』  
佐渡守『久加』

平松吉野より曾於郡迄三十四ヶ所

暖衆中

まいる

104 『全』

覺

六度御狩之内考度、今月十日より内ニ相調候て、十五

日より内ニ皮可有上納候、むかはき用ニ候間、かわの

『此年ノ十一月十三日於王子原

はりやう常よりも長くはり可被調候、天下御用ニ相

立儀ニ間、御延引被成間敷候、此状ハ不嫌夜白、時付

被成次第ニ可被相届候、以上、  
『山奉行』  
和田讚岐守『正貞』

『正保三年』  
戌  
九月朔日

仁禮藤左衛門尉

藥丸大炊兵衛尉『兼陣』

横川より倉岡迄十五ヶ所

行司衆中

御暖衆中

まいる

105 『全』

急度申候、仍諸所六度狩、不依御蔵入・給人之百姓、自

今以後者可為御赦免之由、先日被仰渡候、然共完持夫者、



御狩毎ニ可出候間、山奉行より断次第、其心得を以可被  
申付候、恐々謹言、

【正保三年】

戊 九月三日

【山田】

民部少輔【有榮】

【川上】

因幡守【久國】

【北郷】

佐渡守【久加】

横川始十五ヶ所

噯中

まいる

【全】

覚

【是ヨリ以前ノ御狩ニハ、衆中ハ勿論百姓迄モ符立セシヲ、百姓ノ符立  
飯野御城山之御狩御座候ニ付、衆中取計可被罷登之由  
ハ御免ニテ、完持夫許出スヤウニ仰付ラレ、此正保三戌九月ノ御狩ヨ  
候、日限ハ飯野へ相談可有之候間、可被聞召合せ候、  
リ始テ衆中許ノ狩ト為レリ、但シ衆中ハ今ノ郷土也】  
為御心得候、以上、

山奉行所

【正保三年】

戌

九月十九日

仁禮藤左衛門

和田讚岐守

吉松・吉田・馬関田・加久藤

小林

御噯衆中

【吉田地頭播摩守  
宗益嫡子】  
【宗茂】  
【加久藤地頭  
李右五門兼子】

追而申候、狩奉行衆ハ弟子丸右京亮殿・伊地知主膳  
【重頼】  
正殿ニ而候、是又為御存知候、已上、

此状急用之儀候間、早々相届候様ニ可被仰付候、以

上、

【正保三年】

戌

九月十九日

山奉行所判

御普請方 吉野 脇本 加治木 有川

横川 栗野

宿次所

107 【全】

一書令申候、仍明後日六日ニ南御狩可申之由、行司衆被  
申候、如早晚御檢者衆被仰付可預候、集者彙引たるへく  
候、自然天氣悪敷候ハ、八日たるへく候、為御心得候、  
恐惶、

八月四日

二人

飯野御暖衆中  
まいる

108  
【全】

覚

鹿皮并亥代銀、急々上納候様ニ行司衆へ可被仰渡候、若  
延引候ハ、後日可致其沙汰候、依何延引之通、各々よ  
り以證文可承候、以上、

【慶安四年】

卯

十一月十二日

【山奉行】

岸良盛右衛門

向井吉左衛門

野村外記

伊集院宮内

敷根より馬関田迄十六ヶ所

御暖衆中

109  
【季安家藏】

覚

【慶安四年】  
十一月廿九日

※1

四才猪壹丸

代銀八匁

人数六十六人 内鉄炮六十丁

弓六丁

【全】  
十二月七日

式才猪壹丸

代銀三匁

人数六十四人 内鉄炮五十八丁

弓六丁

※2

右者、前目山ニ見籠就有之、御檢者不申請ニ御狩  
仕候間、檢者之儀御談合被遊、被仰付可被下候、

以上、

【慶安四年】

卯

十二月十八日

【吉田暖】

宮田慶左衛門判

境田志賀右衛門判

田口兵部左衛門

加久藤

御暖中

【此時加久藤地頭伊地知主膳ニテ此モ家藏ス】

※1 【天正十五年、桂神祇忠防ノ平佐ニ城守シテ京軍ヲ拒ク頃マ

テハ城兵モ弓許ニテ鉄炮ハ無カリシト前ニモ旁註セン通ナ  
ルニ、其ヨリ此慶安迄六十四五年ノ間ニ如此六十六人ノ狩

立ニ鉄炮六十挺・弓六張ト振替リ、大抵弓ハ十分ノ一ツ許  
減少セリ、亦以テ時勢ヲ觀ルヘキ也』

※2 『慶長三年、泗川ノ御大戰ニ大手口許鉄炮二千挺ノ賦ニテ射  
防クト云モアレハ、朝鮮ノ役ヨリ多ク成リシト考ラル、コ  
ト也、関狩ナトモ其以後鉄炮勝ニ成タルナラン、因テ  
松齡公朝鮮ヨリ鉄炮御催促ノ御書左ニ寫シ標註ニ備ヘル也』

110 ※3 『撰宿土海江田仲左エ門藏』

『一てつほう并玉藥被成御用意、可被食越候、鏝ハ一切  
不用立候、何としても鉄炮數被仰付肝要ニ候、追々  
可罷立人來心得可入儀ニ候之条、よくく被仰付て  
つほう奔走<sup>④申</sup>候<sup>④ナシ</sup>〔之〕様ニ、可有御才覚之事、  
一石火矢之事御たつね候て、有次第可被差渡候事、  
餘者此使<sup>⑤江</sup>へ相合申候間被<sup>⑥申</sup>聞食届、御入魂所仰候段、  
可然之様ニ可預御披露候、恐々謹言、

九月廿九日

義弘御書判

比志嶋紀伊守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄後編」二二三八六号文書ト同、文書ナルベシ、尚本文書ハ前  
号文書ノ行間ニアリ〕

111 『鎌田筑後政昭日記』

山法<sup>⑦捷</sup>據之事

一 貴人江丸猪鹿 御目ニ懸候時ハ、猪者頭之方、鹿者白  
毛之方へならべ候也、被成 御座候而より猪鹿持參候  
時は、必跡を行司持もの也、

一 御狩ニ行司道具不持者也、

一 御狩之躡<sup>⑧</sup>有候而、色々差合候而狩延之刻、其門内にて  
とれ候猪鹿者狩之完<sup>⑨</sup>ニ納也、又狩過兩日之間ニ里落犬  
おとしの完右同前ニ納也、矢沙汰之事、

一 間伏より矢ニあたり、掛ニ而射留候而も間伏ニ相付也、

一 掛より矢ニ當、間伏ニ而射留候へ者間伏ニかふ、掛ニ  
腰骨相付也、

一 間伏ニ居ならひ一時ニ射候而矢皆當候時ハ、完之來ル  
方之射手一之矢也、若我か前ニ而不射、人之前ニ而

射、又者一足もすけ候而射候得者、一之矢ニ而も二之  
矢ニ成也、

一 其日之狩奉行并行司ゆるしなきに者、狩倉内ニ入完仕  
候ても、骨射手ニ不渡、御物ニなる也、

一間伏引立相濟候以後、跡より隠来り間伏ニ居候而完仕候而茂、二之矢ニ成也、是も立手下知無之故也、

一完仕候而矢所へ不伏、二三町茂過行候へ共もおし不來候へハ、一之矢相すたる也、

一大狩ニ而射留といふ儀ハ、一之矢より下り者間伏七人、

上り者三人過候得者射留ニ付也、右之内ニ而も一之矢もとおし不來候へハ、射留ニ相付也、

一里落猪鹿見付候もの・腰骨射候者、かふを取也、片平

ハ走合之たます、女わらひ子ニ至まで配分也、残而片平者御物上納也、

一ときり完射手かふ、ときり候もの腰骨納、たます兩条同前なり、

一大ハへ聲を懸候而より矢ニ當候といふとも、犬之完也、

一矢當之猪、犬吠候而も射手もとおし來候へハ、射手利運なり、

一矢當之猪鹿ニ射手より犬を付候而可給由頼候而、犬を付其完を取候得者、腰骨犬ニ分也、

一大山ニ而者射手者かふ、犬にハ腰骨たますニいたす也、

一猪鹿をとき候時取所之事、草脇者行司、折はた者完持、そしらはとき手、鹿頭者皮張、如右定也、

一串目狩、鹿飛切通候刻、依躰刀ニ而切候事有、鹿者刀に付候、猪者不付候也、

一狩くじ納やう、其日之三鉢玉女之方ニ納也、つものりヲ引候へハ其つとも同方ニ納也、

一つのり祭之事、謹而再幣再拜敬白、今日之官神三鉢玉女之方ニ向て、山神之御部類けん屬のみさきく、ヲ申

おとろけ奉る、日天月天のみさき、地ミさき、荒神のみさき、今日之狩主狩人之災難を四方四千里ニ除給ひ

て、今日之得物を百有物を拾ヲ、拾有ものを五ツ、五ツ有物を三ツのまゝに給候ハ、今日申酉之時間ニ必

九十九本也、御ほこを丸崎ふく崎ニ相添祭奉候ハん事ハ疑有間敷候、拾ヲ五ツ、五ツを三ツ間給わらぬ物な

らは、唯今之つものり主之一寸の舌之根より血を出、三本之御ほこを染て參へし、山口四郎殿を始三萬三千三

百卅三鉢、中山三郎殿を始三萬三千三百三十三鉢、奥山太郎殿を初三萬三千三百卅三鉢、惣而九萬九千九百

九十九躰之御神部類眷屬、のほるは山五萬五千、下るは山五萬五千の山之御神御部類眷屬、東方千里北方千里四方四千里之中ニ山野御神御ふるひけんそく一社も不漏奉頼、心のまゝニ今日之獲もの給候ハ、申酉之時ニ一ノ再ノ可奉祭事疑有間候、(敷脱カ)其時山神のみさき、水神のみさき、海龍王のみさき、道ニ者道を神、水神のみさき、とよく神・けちち神・しやう神のみさきノ細ノ奉祭者也、急々如律令、

右書前大山源兵衛・納山狩野介連判以書物如此候也、

条数廿ヶ条、

『承應二年』

巳八月廿九日

『鹿籠御廻文留』

覺

一人数何百人 持道具何々 衆中

外(六)

完持夫幾人

※1

衆中幾人ハ御奉公方ニ付御狩ニ不被罷登候、

衆中幾人ハ當病さし合ニ而不被罷登候、

一猪幾丸ハ年付堅固ニ可被仕候、

一鹿幾丸 右同、

右者、何年之三度御狩内何度分相調申候、以上、

何ノ 何方噯何かし

何月何日 右同行司何かし

御狩

檢者衆中

※2 右之表ニ檢者衆裏書無別儀通裏書被仕、後日山奉行所へ可被指出候、已上、

諸所 行司衆

『明曆四年』 右者戌二月廿九日ひる、川邊より次來候、則坊泊へ

持せ申候、

※1 『承應三年甲午日記

十二月七日

一來ル十日ニ春山御狩御座候ニ付、諸役所之衆為被召上之

由候云々、

※2 『慶長十二年の制令に六度狩とミへ、大かた其通なりしに、

此明曆四年ハ三度狩にして如此御廻文、直に此時三度宛に成されし歟、詳ならず、都合五十二年の間なり』

参人々御中

113 『加久藤案文留』

猶く御郡代座より御急用之儀候条、無油断様ニ可被差出候、将又右ニ申渡候御用木改留帳同断可被急候、以上、

態以廻文申越候、各見廻中之山鹿倉敷相改、鹿倉如何程と可被差出候通、六月拾九日ニ以廻文申渡候、于今其首尾無之候、御急用之儀候間、近日中ニ差出可被成候、聊延引有間敷候、若於延引者、各可為越度候、恐惶謹言、  
『萬治二年』  
亥十月七日

山奉行所

三原九兵衛

五代三左衛門

町田七郎左衛門

横川より穆佐まで

御唆衆

行司衆

114 『全』

南山御狩倉付事

一飯森山一狩倉 一黒ヶ山一狩倉 一ふけ山一狩倉

一二ツ橋山一狩倉 一大谷山一狩倉 一作鹿倉山一狩倉

北山御狩倉付事

一黒原一狩倉 一飯田川地一狩倉 一山ヶ城一瀧

合北南九狩倉

『諸外城皆如此書出たるならん』  
右、加久藤御狩倉指出可申之由被仰付候、此外御狩倉

無之候、當二月御支配所より御用之由候間、右之如く書付指出申候、以上、

加久藤行司

竹内志摩丞

萬治二年亥十月十五日 岩崎藤左衛門

山御奉行衆中

115 『全』

態以飛札申上候、仍而御狩倉付并ニ御用木留帳之儀被仰

越候間、相調指上申候、御狩倉付事ハ御支配所より茂御用之由承候間、相調指上申候、是又為御存候、恐惶謹言、

十月十五日

三人

※1

三原九兵衛殿

五代三左衛門殿

町田七郎左衛門殿

116の1

一※2

萬治四年辛丑嶋津新八久瀨日記

『此御狩ニ琉球王子被召列見物仰付ラタル事ハ、古老ノ申傳ヲ承テ二月二日 晴 享保四年ノ御糺ニ史官モ御関狩ト申上タリ、左アレト此日記ハ只谷山御狩或ハ以ノ外ノ大狩トカケリ』

『光久公』

一谷山御狩ニ付、今日七ツ時ニ宿所たち篠貫村江一宿、

※3 あたりニヤと衆無之候而徒然にあり、

同三日 晴

※5一※4

未明ニさゝ貫の宿を出、狩場へ出、今度者琉球中城主、  
其外澤崎久左衛門等、又入来山江有合旅人共江狩御見  
せ候故、人数茂かたのこたく罷登候様にと被 仰出候  
により、以之外之大狩にて候、若き衆者様ノのした

116の4

※3 『全』

二月三日雲

一谷山御狩有之ニ付、鹿兒嶋諸士いづれも役人迄被登候、  
琉球王子被為上候事、

116の2

※1 『一寛文元年辛丑勘定所日記』

正月七日晴天

一春山御狩有之候事

『 (本記事ハ前号文書ノ行間ニアリ) 』

116の3

※2 『園田成芳覺書』

一綱久公ハ 御関狩にハ不依風雨、毎年御在國の節者被遊

御立候事、

『 (本記事ハ「旧記雜錄追録一」一七六七号ト同一記事ナルベシ、尚本記事ハ行間ニアリ) 』

※4

『此中城主ハ中山王尚質ノ長子尚貞ノ中城按司朝周ト申此  
光久公 綱久公ニ御目見ノ願ニテ、萬治三子七月六日上  
國、十六日登城、光久公ニ御目見、十二月廿八日御能拜  
見、五々三御膳賜之、四年辛丑三月三日御上落、綱久公  
ハ其六月十九日御着城、八月廿二日登城、賜鶴羹、閏月四  
日登獻膳羞、其后御暇回国トアリ、時年十七、此澤崎カ事  
ハ、松崎采女カ系傳、寛文三年癸卯、御上洛御供ニテ江戸  
御番賦ニ番頭樺山長門殿・本田與兵衛・岩切六右衛門・名  
越清右衛門・平山八右衛門・澤崎主水・税所彌五右衛門  
云々アリテ、此萬治四年ノ四月寛文ト改元ナレハ、三年前  
マテハ右ノ久左エ門ニテ、其間ニ主水ト改名セント見エタ  
リ、且此主水ハ謙信流ノ兵學ニ精キヲ以テ 寛陽公召抱ハ  
レ、志和屋左京ナト其門人トカ承レリ、然アルニ此御舊式  
ノ関狩ヲ拜見シテ大ニ感賞シ、吾ノ師範スルハ席上ノ空  
論也、是程ノ大勢某ノ隊伍ヲ乱サス廣野山谷ヲ引廻ハサ  
レテ進退ノ自在ニ整ヘルハ舌論ノ指南愧入トカ申、御暇仕  
タル哉ニ古老ノ口碑承傳ルコトトモ也、主水カ末流今モ江

(本記事ハ行間ニアリ)

戸御旗本ノ陪臣ニカ傳居トモ承レリ』

(本記事ハ行間ニアリ)

※5 (頭注)

『太子上国ト申義、此時キ初テノ事ニテ別テ御寵遇、為メニ  
御庭上築山造ラセラレ、毎日諸士七八十人ツ、數日相勤メ  
テ日本ニ二トハ無之ヤウ出来タトノコト、誰カノ書通ニオ  
ボヘ如此』

117の1

「山ノ口古今記録」

※1 寛文九年酉四月十五日、高城之内田尾於小善城 太守

※2 光久公被遊御狩、諸外城より人数被召立、惣人数四千

八百人、猪鹿御取得有之、當地鹿倉之内、石ノ下下リ

谷場貫キ水くり三分田、右之五鹿倉御取添ニ而 御狩

串目引廻シ、御地頭兒玉(利豐)四郎兵衛殿江茂衆中被召列、

御狩ニ被為立候、

※1 『此年三月廿二日御發駕、東目御通行、四月廿一日細島御出

船ナレハ、其間此日ノ御狩ナラン、田尾ハ有水村ニアリ、

其比ノ御假屋址今ニ本御假屋ト呼、今ノ地頭假屋ヨリ子方



119 「全」

一里廿三町四十二間トアリ、小善城鹿倉ハ石山村ニアリ、今ノ假屋ヨリ子方一里十六町、光久公東自御通行ノ節御狩場ニテ今ニ御狩倉ト唱ヘル由、尤往古ノ陣場トテ城ノ址モアルト也」

(本記事ハ行間ニアリ)

120 「横山慶左衛門日記」

一同十二年子三月廿六日、同所御狩完數三拾五丸御取得(朱)「此年三月廿一日、綱久公御發駕、四月八日細島御出船、其間ノ御狩也」有之、地頭兒玉四郎兵衛殿江從「山ノロニ」上様完御拜領ニ而當地江被持帰、諸衆中江被下候也、

117の2

※2 (頭注)

「寛文二年壬寅日記」

正月十三日十四日春山御狩有之付、諸役人兩人有之所ハ卷人ハ可罷登之由御觸有之云々、

同六年丙午、

月日如右、春山御狩、

118

「全」

一同十一年亥三月十五日、右鹿倉ニ而人数千六百八人ニ「此年二月廿六日、綱久公御發駕、三月廿五日細島御出船トアレハ、其而御狩有之、猪鹿七拾三丸御取得有之、地頭兒玉四郎兵衛殿衆中被召列被為立候、」「利實」

※1 一延宝八年庚申正月十二日癸卯、晴天、

西風大に吹、巳之刻登城仕、未之刻帰る、

一如例年、春山初御狩、今日ニ此中より被仰渡候、近方

之外城御當地衆中在郷不殘例之通、御関狩ニ昨日より

※2 今朝ニ至皆々登有、(◎罷立)

(本記事ハ「旧記雜錄追録」一七六七号ニ見ユ)

※1 『此延宝より以前に御関狩トあるハ、長祿二年頃 大岳公の

櫛間を取玉フ時の事をハ関狩と唱られしこと、鮫島日向慶

長五年に書おき、天正四年 前久公の御馳走に春山の関狩

と見へ、同八年新納忠元の宝河内を取の計も関狩也との口

碑大口に遺れり、其餘の舊記ハ 大中公御代天文廿二年正

月春山御狩とかき、 貴明公御代天正二年九月も春山御狩

とかき、同十年・十二年・十四年の正月、伊作・田布施・

加世田皆初狩とかき、同十一年二月上井日記も、狩させ候、狩人七百餘とかき、同十四年三月谷山御狩トかき、同七日於田野御狩云々狩人千人ほとかき、正保三年四月於出水表大狩とかき、萬治四年二月 寛陽公中山太子ニ觀せらるさへ只谷山御狩とかき、此に至り春山初御狩或例ノ通御関狩とかきたり』

※2 『佐多久達譜云、延宝八年庚申正月十二日、依舊例 太守公

蒐于伊集院春山蓋講武事也、久達俄奉 敕命、代于 公赴彼地闖之、此日魔府大有池魚災、久達亦罹此災、久達未歸、家臣等亦盡相從、所在宅之者惟老翁稚童女子之儔耳、輒轉而逃去、歷世之舊記文書等皆焚失、但家傳系圖者、老士武田吉左エ門信秀取其篋出、時久達之養母不能出宅而徘徊、信秀使己女子持其篋、自負久達之養母去、漸而免、又有信秀之子阿齋者、懷刀篋出、篋重而不堪持、孥之於地衝烟辛苦而遁去、當家累代之寶器瓜切瓶子切等之名刀乃得全、同十三日、 綱貴公賜竹木及躰牙二百俵於久達、結構「家屋」

(本記事ハ行間ニアリ)

一 殿様今年ハ御登無之候事、

一 為御名代佐多内記殿御登被成候、

一 申之下刻より田尻軍角殿江火事致出来、此間相續晴天、殊更今日ハ西風大ニ吹申候時節ニ起為申火事之儀ニ候得者、火元之家半分程焼申に、早風下なる樺山殿・有馬殿・武井殿・益満殿江火相付と見得候に、其風下方く飛越、家々は火のこを吹付、一町方之火元と成、

末廣焼立候得者、火の雨火の風と申も不過之と思ひ、取物も取あへず焼不死る計にて、あわでさわき、四壁のやぶをくゞり逃を本とせり、或は焼死も有、或ハ身を焼候人幾人と云数を不知、右火事之廣事、西者客屋・六日町・新築出海を限り、南ハ天神宮より樋之口・南林寺門前脇寺・屋久嶋藏海を限に、申の下刻より戌の上刻迄一時ニ致焼失候事、於御當地未聞之大火事也、

一 如右之大焼仕候ニ付逃去、焼通と則屋鋪へ帰り見候得者、四壁庭之草木迄不残焼失仕候、万ニ焼野之如く成候得者、夢現の様ニあぎれて、

今出て今来てミレハ我宿の只時の間に替ものかは

一 爰ニ筆を取て書付事も残念至極、為絶言語事ニ而候得

共書付もの也、

一 生年九十二才に成し祖母との、此火事に相果被申事、

何共残多、迷惑仕候得共無是非、今晚送り可申と仕候

へ共、且那寺も焼申候へ者、先野邊送り申候而、明日

寺江者可申と致相談、去方江葬禮道具有之候を取替申、

今晚九ツ時ニおくり申候事云々、

正月十四日乙巳 晴天

一去ル十二日之夜火事之儀、江戸江以飛脚御左右御申也、

同十五日丙午 晴天

一 江戸江火事之御左右御使ニ野村藤左衛門殿上洛之由也、

一 火事ニ付焼失之屋敷数并家数之事、

惣合家敷数八百四十九ヶ所

惣合家敷三千三百八軒

惣合死人五十四人

内 士八人男三人 女五人 下人貳拾二人

土方下女七人 土方町人十人男五人 女五人

七人町江死骸有之候得共、何方之者共不相知、男女

之分ケも不相知、大焼仕候て不見分、

外ニ町人九人、行方不知候由、右町江死骸七ツ有之、

此九人之内七人者右死骸ニ而候半与人ノ申候、二人

者海に入相果候半欵、又ハ船ニ而遠方江逃行候半欵と

人ノ申候事、

一 町江焼残リ候屋敷四ヶ所、家五ツ、土蔵四十残リ候由

也、

一 右大火事之翌朝者、公義より粥を御調させ、町人上

下江為被下之由風聞仕候事、

一 火事ニ付屋久嶋江早船を以、平木船早々可被上由為被

仰渡由候、

一 火事ニ付仕上せ米為被召留之由候事、

正月十八日己酉 晴天

一 火事ニ付米拂之事、

一 真米六拾石ハ佐多殿江御渡候由候事、

一同五百石ハ火事ニ逢候諸士江家内存人ニ付尅俵ツ、

酉十一月限に拜借被仰付候事、

合米千八百石餘

内

六百拾壹石七斗 拜借

三百九拾六石餘者 拂切

外

米千石下町江 拜借

百五拾石南林寺門前江拜借被仰付候由候事、

右ニ付、御簡略向 御條書を以段々稠敷被 仰出候

事共雖有之略于此、

121 『加久藤御廻文留』

覺

一初御狩之儀者、所噺衆致差引、相取候<sup>(夫)</sup>完ハ、現ニ而當

座江上納可有候、人数并持道具・犬数・相取候完員数

證文ハ、噺衆・行司衆連判ニ而可被差出候、尤御看狩

ニ相取候完員数之證文、右同前ニ相調可被差出候、

一三度御狩之儀者、近外城より檢者申受、可被相勤候、

人数并持道具・犬数・相取候完員数證文之儀者、其日

之檢者衆・所噺致連判、其場ニ而可被出置候、勿論完

不取得候共、證文可被出置候、相取候完被賣拂候ハ、

直付衆被申付、狩檢者衆横目衆檢者ニ而直成被相付、其場ニ而直付證文取置、完可被相拂候、

一作喰狩并犬山被仕候刻、所噺衆・横目衆致差引、相取

候完員数證文其場ニ而相調、如御定之上納可有候所ニ

而、完被賣拂候ハ、直付衆被申付、横目檢者ニ而直成

被相付、其場ニ而直付證文取置、完可被賣拂候、

一鯉呼ニ相取候完、如御定之可有上納候、左候而、完所

ニ而被賣拂候ハ、直付衆被申付、横目衆檢者ニ而致直

付、其場ニ而直付證文取置、完可被賣拂候、

一依所ニ大かいぢうつ藁ぢうつ上納無之所も有之候間、

向後者堅固ニ上納可有之候、

一鹿ノ皮ニへ皮鹿ノ角并松やに、取得次第堅固ニ上納可

有候、

一依所ニ講狩獵ニ被仕外城茂有之由候、向後曾而被致間

敷候、尤前より由緒有之仕来候所ハ、當座へ被申出、

免手形申受可被相調候、

一依所ニ獵ニ被致犬山候ニ付、三度之狩御着用申渡候時

分も完不取得、各不届至極ニ候間、御用可被相調場毎

ニ見合置、御用相調候様其格護尤ニ候、常々私ニ而御用并三度狩不被調ニおひてハ、重ク其沙汰可有之候、一諸手形銀前以取揃、勘定之時分可有上納候、

押札萬札運上銀之事ニ而候、此節より山免手形銀と相直候間、向後其心得可有候、

右者、狩被相調候時分、右之通ニ證文其場ニ而行司衆方へ受取置、取拂帳相調、右證文相添、毎年十二月十五日限ニ行司衆致参上、如早晚可被遂勘定候、延引有間敷候、且又犬山鯉呼ニ相取候完、如御定上納無之所も有之由、其聞得候、是以不届千萬之儀ニ候間、相取候完、如御定無相違堅固ニ上納可有候、聊怠無之様ニ兼々可被申渡置候、以上、

但向後之見合ニ被寫置、外城之下ニ印形被仕、終之外城より當座へ可有首尾候、

山奉行所印

「天和元年」

西

九月四日

林久兵衛印

三原清右衛門印

鈴木宇左衛門

曾木甚右衛門  
加世田七右衛門

所ノ  
行司衆

横目衆

噯衆

122 天和三年亥正月嶋津甲斐久馮日記

同廿六日 晴

一今日春山御初狩、御名代嶋津宍「久倍」岐殿、惣奉行町田式部殿・嶋津又五郎殿、横目頭嶋津助太夫、家老嶋津中務「久」殿、用人衆鎌田後藤兵衛殿、各昨日被差越、  
此兩年モ皆春山御初狩、春山初御狩とかき、関狩の字なし  
一貞享元年子正月十四日、春山初御狩有之、御名代嶋津美作殿、御老中嶋津帯刀殿、御狩奉行者嶋津又五郎「久雅」殿・嶋津宍岐殿、與力之士餘多有之、

一右初狩者、御城下諸與之諸士、惣躰前々者登リ申候、然に四年前之申正月十二日御初狩有之、其日鹿兒嶋下方大火事有之、夫より以来惣様登リ不申、與分ニ而六組有之候を二ツニ分ケ、三組ツ、御登せ被成候、當年

者一番組・二番与・五番与、此三與之人数登り候事、

(本記事ハ「旧記雜錄追録」一一七六九・一八六三号トホボ同文ナリ)

【蒲生土有馬氏藏】

覺

一 諸地頭就 公用ニ地頭所へ差越候節、滞留中老日ニ水

夫三人ツ、可被下之事、

一 地頭所狩夫之儀、符夫銀ノ七分ツ、ヲ五分ツ、ニ成されし此時よりと見へたり 老人ニ付夫銀五分ツ、ニ被召成候間、

来卯ノ年より右之通如例、年中ニ兩度地頭方へ可相納之事、

一 外城噺就 公用ニ鹿兒嶋并外地行之節、主従飯米并送

人馬可被下之事、

一 田地方ニ相付候噺之儀ハ、所中行ニ茂右同断、送人馬

之儀ハ道程老里より可被下之事、

一 右同郡見廻之儀、諸行所中共一身飯米可被下之、人馬

右同断之事、

一 噺役年五拾以上就 公用ニ所中之節、道程老里より

送人馬可被下之、五拾以下茂為差知病者ハ可為同断事、

【公義仰出】

覺

一同役高百石以下就 公用ニ行之節、水夫老人ツ、可被下之、但所中ハ老夜泊之所より可被下之事、

右之條々被得其意、地頭所江茂早速可被申越者也、

貞享三年

寅

十二月十三日

評定所印

地頭所

一 兼而被 仰出候通、生類あハれミの志、弥專要ニ可仕

候、今度被仰出候意趣者、猪鹿あれ、田畑を損さし、

狼者人馬犬等をもそんなし候故、あれ候時計鉄炮に

てうたせ候様ニ被仰出候、然処萬一存たかひ、あはれ

ミの志をわすれ、むさと打候者有之候ハ、急度曲事

ニ可申付候事、

一 御領私領にて猪鹿あれ、田畑を損さし、或者狼あれ、

人馬犬相損さし候節者、前々之通随分追ちらし、それ

にてもやミ不申候ハ、御領にてハ御代官手代役人、

私領にては地頭より役人并目付を申付、小給所ニ而ハ

其頭へ相断、役人を申付、右之者共に急度誓詞致させ、

猪鹿狼あれ候時計、日切を定、鉄炮にてうたせ、其わ

け帳面に注置之、其支配ニ急度可申達候、猪鹿狼あ

れ不申候節、まさらハしく殺生不仕候様堅可申付候、

若相背もの有之儀者、早速申出候様ニ其所ノ之百姓等

ニ申付、みたりかましき儀候ハ、訴人に罷出候様ニ

与兼々可申付置候、自然かくし置、脇より相知候ハ、

當人者不及申、其所之御代官地頭可為越度事、

右之通堅相守可申者也、

【元禄二年】  
巳六月 日

125 覚

兼而被 仰出候生類あはれミの志、弥專要可仕旨、且又

猪鹿狼殺生之儀ニ付而者、急度從 公義被仰出候御書付

之趣、謹而奉承知候様云々、

元禄二年

巳  
十一月廿六日

評定所

126 【御通達】

覚

一此節、生類あはれミニ付猪鹿狼殺生之儀、從

公義被仰渡候御書付之趣者、先比申渡候、依之前々よ

り有来候三度狩牲狩其外何角之儀ニ付而、惣而狩いた

す儀、御禁止ニ被 仰付候事、

一毎年正月初被仰付候 御関狩之儀、 御家御代々有来

候御作法ニ付而者、從 公義不苦旨被 仰渡候間、御

関狩并於諸外城正月初土中相催候初狩之儀者、関狩同

前之儀候間、一度ツ、者自前々有来候御作法ニ候故

御免候条、舊式不致退轉様心掛、行儀專可仕候、取候

(失) 完之儀者横目見届、土中ニ埋之、其段山奉行所江以書

付可申出事、

一猪鹿田畑をあらし、狼人馬犬等を損候節ハ、先頃被仰

渡候御条書之通追ちらし可申候、それにてもやミ不申

候ハ、日切を究打候様ニ被仰付、目付をも被相付、

打候猪鹿狼之員数帳面ニ相記、公義江被差出答候間、

日切之儀者追而可申渡候、右日切之内打候猪鹿狼之員

数銘々相記、横目何某見届之、何所之何山土中ニ埋候  
通具ニ書記、山奉行所江可差出候、公義江被差出候  
書付之儀候間、成程可念入事、

一 獵師之儀者渡世いとナニ候間、猪鹿狼類取之、食物  
ニいたし、又者令商賣儀、御構無之候付而者、諸外城  
獵師人数之儀者、應其所、山奉行所より見合可申渡候  
間、獵師望之者ハ山奉行所江申出、帳面ニ相付、獵師  
札受取之、委細山奉行所へ可得差圖事、

一 右打候猪鹿狼相拂候儀、所中其外何方ニ而茂勝手次第  
可仕候、若鹿兒嶋へ持越、於致商賣ハ、完屋上町江一  
軒、下町へ二軒、西田町へ一軒定置候条、右三所之完  
屋へ遣之可相拂、尤鹿兒嶋ニおひて、脇賣かたく令禁  
止候事、

一 獵師之外、猪鹿狼類致殺生儀一切御禁止之事候間、右  
鉢之儀曾而仕間敷候、自然獵師ニ紛、蜜々犬山鯨等仕  
者於有之者、横目より可申出候条、可得其意事、

一 神事祭禮牲之儀者、獵師打候猪鹿を求、可備神事、  
右條々、堅固可相守之、若令違背者於有之者、可為曲

事之旨、諸外城江申渡候間、此段云々、

元禄三年

午

正月廿一日

評定所印

127の1

【古寓在飯島】

覚

毎年正月始被仰付候 御関狩之儀者、  
御家御代々有来候御作法ニ而、從

公義茂不苦旨被 仰付候間、御関狩并於諸外城正月始

土中相催候初狩之儀者、関狩同前之儀ニ而候間、一度

※ 從前々有来候御作法故御免候付、舊式不致退轉心掛、

形儀專ニ可仕候、取候完之儀者横目見届、土中ニ埋、其

段山奉行所書付可申出旨申渡候間、此旨承置候様、組中

江可被申渡者也、

【元禄三年】

十二月廿九日

評定所

127の2

※ 『元禄四年辛未岩山金左エ門老号散木日記

正月廿六日



谷山御関狩、川邊嘍衆末廣民部左衛門申目下知相勸申候、集者落之上御棧敷ハ鮎山也、ハツ半ニ相濟也、

〔本記事ハ前号文書ノ行間ニアリ〕

〔右元禄三年の仰渡より御城下ノ御初狩は 御関狩とかき、諸外城は初元禄五年壬申正月九日晴

狩とかき、平日の唱も其通と見得、是より以来ハ皆御関狩とあり〕忠

一春山御関狩、御名代嶋津下野殿、御家老嶋津助之丞

守、惣奉行阿多淡路殿・北郷惣次郎殿・嶋津内記殿、

三番与頭樺山權左衛門殿・四番与頭仁禮小吉殿・六番

者嶋津頼母殿、二番たゝへ者松のうと木に火付て、鉄

炮揃ひ不申、大筒之人者間々打候、星合無之内ニ四番

與者少星合ニ合申候、惣野火ニ而鉄炮猥ニ打候、御詮

議有之候、三番與者惣寺領被仰渡候、

一元禄十二年乙卯正月廿六日、吉野ニ而初而御関狩有之、

惣奉行佐多左・嶋津主計〔久年〕・鎌田隼人、

一同十五壬午正月十四日、如例年吉野御関狩有之、當年

者三番与・四番与・六番与上り前ニ而今曉よりいづれ

も罷登候、當年者式人有之役人茂其座明不申候ハ、

一人者上り可申由也、老若共ニ二男三男迄茂可罷登由

〔組方古帳〕

覚

之事、

一御関狩之儀、御家御代々有来御作法、且組中之人数

行儀并多人数集候場所鍛錬、諸士不撰老若罷上候様

被仰付儀ニ候之處、至頃日年長候人者令懈怠、年若面

立は狩犬山等ニテ朝を山阪の峻難に馴熟するを第一の嗜と仕たるよ

々迄罷登事之様ニ存、狩立之人数相減之由不可然儀ニ

し、左やうの心掛なきものハ諸人非謗せしとの赴き、伊勢貞昌より

候条、狩場之歩行相叶候人者、不依老若可罷登之事、

求麻の相良備兵イニ與へし書に見ゆ、全文ハ寛永軍徴に載せおけり

一鹿兒嶋組中之人数不殘與頭召連罷登儀ニ候処、申ノ年

火事以後、組分ヶを以罷登候筋ニ今以被仰付儀ニ候、

一與之与頭漸忝人宛被罷登節茂有之由候、向後者一与

之與頭何れ茂可被罷登候、其與之人数追立罷登儀ニ候

得者、月番之与頭茂尤可被罷登候、無據御用於有之者、

其訊御家老中江可被申出置之事、

一外城申目下知騎馬之人、乘馬御棧鋪邊ニ召置、人数引

立候節者歩行為稽古歩立ニ而罷在事ニ候、雖然萬端為

物馴被仰付事ニ候、依時宜者、馬上ニ而駈廻り、可加

下知儀茂可有之候間、乘馬 御棧敷前ニ不立置、向後  
其身跡より牽せ可申之事、

一 小頭之内、兼役ニ役所之勤仕候人茂有之候、御狩之儀  
者纒一日之勤ニ候間、役所之支無之筋ニ申合、御狩ニ  
罷上候様ニ連々相心得可被申渡之事、

一 諸役人之儀、前代より役所不明様ニ申合可罷登之旨申  
渡候、近年者諸役人罷登候儀被差止置候得共、此節よ  
り諸役人罷登候様被仰付候間、差當御用無之人者、其  
役所不明様<sup>(④)</sup>申合可罷登之事、

右之條々、此節組頭中江申渡、与中之人数江御狩前以  
申聞せ、向後無怠相守候様可相達之旨

御意候間、可被奉得其意候、以上、

「元禄十五年」 「大玄公御家老」 式部

「喜入」 「久亮」

午 正月十二日

「新納」 「久珍」

市正

「島津」 「忠守」

助之丞

「島津」 「久明」

大藏

(本文書ハ「旧記雜録追録二」一一三七号文書下同一文書ナルベシ)

130 「御通達」

從 公儀生類御あはれミの事候得共、初狩之儀者 御家  
代々有来候御作法之故、先年其御断被仰上、依御免被仰  
付事候間、諸外城之儀も弥初狩可仕候、此節茂生類御あ  
はれミの儀被仰渡候旨茂候間、狩立之行儀を専ニ相勤、  
所人数不殘罷立、完打取候儀者堅令停止候間、右之段地  
頭より所中江早々可被申渡者也、

宝永二酉十二月

131 「組頭申渡」

覺

一 今月十八日、於谷山御関狩被仰付候間、 御狩之御作  
法第一行儀之儀、於御狩場御條書を以可被仰渡候間、  
堅固可相守之候、

一 此節御狩場谷山被仰付候付而者、若心得違損之儀共有  
之候而者、別而不可然事候間、吉野同前可相守候、

一 御狩ニ罷登候与中之面々、十八日夜八ツ時刻限無遅滞  
郡元一條之宮江可相集、其節星合可致候、左候而小組

分を以与頭召列可罷登候間、猥ニ不行散其小与頭江可相付候、為其小与分之目印申付置候、

一十五歳以下之者は、鉄炮持不申可罷登候、

一御狩ニ罷登候者共目立候持之刀・脇差指申間敷候、尤半首・火羽織、平生之羽織之外目立候異様之支度、堅無用可仕候、

一中途往来共鉄炮を打候儀、又者高雜談堅令停止候、

一落之上江相集候節、小与一番より十番迄次第ニ罷居、

他与江不入交、引立之節小組一番より順々ニ可罷立候、

一御関狩之儀者、行儀第一之事情得者、引廻候節方々行

散、又者一所ニ相集、もの影などニ立寄不罷居、最初相た々候通可罷居候、右躰無行儀故、猥成儀茂有之

事情間、十人間ニ為差引小与頭老人ツ、請込ニ申付候条、萬端可随下知、若小与頭下知相背候人者、無用捨与頭方江早速申出候様ニ稱鋪申付置候、且又為締方、

一與に横目足輕被相付候間、專可随下知候、

一追聲廻鉄炮之儀、手先之與頭手廻より可相初候間、順々打廻可申候、尤追聲鉄炮間違曾而仕間鋪候、

一廻鉄炮之節、自然火不通候ハ、其通ニ而可召置候、跡達而曾而打申間鋪候、

一鉄炮吹せ候儀、且又致押紙候事一切仕間敷候、若右通之儀有之候ハ、訖可致沙汰候、

一野火不起様可致覚悟候、自然近方江野火起候ハ、早速走付可取消候、致大形手廣成立候ハ、越度可罷成候、

一切火繩曾而仕間敷候、尤火繩之儀者致格護置、家来下人江相渡候節者、入念候様ニ主人より茂氣を付可申付候、

一三番た々へより御棧敷前寄候節、寄貝吹候而茂不立騒、与頭下知次第跡より静ニ寄可申候、

一御棧鋪下江相集候節、猶以猥ニ無之、他与と不入交一所ニ可罷居候、左候而御暇と有之候而茂、與頭差圖無之内立さわき、行儀を不可乱候、与頭先立而罷立候節、<sup>④違</sup>最前引立候節之通、小与一番より順々ニ罷立可申候、<sup>④付</sup>於中途星台可申候、

右行儀之儀ニ付而、御条書を以段々被仰渡事候得共、

若違背之者有之候而者、其身之為ニ茂不成儀ニ候故、面々為落着、前以申渡事候間、得其意、堅固可

相守之候、以上、

〔寶永七年〕  
寅二月

與頭

〔本文書ハ「旧記雜錄追録二」二九二五号文書ト同一文書ナルベシ〕

132 一 正徳二年壬辰二月廿五日、吉野御関狩、

一 享保九年甲辰二月三日、於吉野御関狩、惣奉行嶋津主

計殿・嶋津市太夫殿・種子嶋平馬殿、三番与・四番

与・六番与罷登候、朝雨天、昼より晴天、

一 御関狩ニ付、若き衆鉄炮多打候故、夫より野火起候、

同四日、御関狩ニ罷登候人数、御用廻り鉄炮御定之外

打候事、野火付候事、吳様之支度仕候事、右三ヶ条御

詮議、三番与者嶋津藤次郎殿宅、四番與肝付典膳殿宅、

六番与者町田宇右衛門殿宅、同十日迄茂御詮議ニ而、

閉門被仰付候衆餘多、其外出家抔江被仰付候衆茂有之

候、

一 村田平右衛門弟村田清右衛門事、去ル三日御関狩ニ付

133

罷登候組ニ而茂無之候処、吳様之躰ニ而罷登、三番与串目之場ニ罷在、玉目五拾目之鉄炮を廻り鉄炮外狼ニ下人ニ為打、自分ニ茂鉄炮打、其上下人鉄炮打候処より七八間風下ニ而野火起、右不屈ニ付切腹可被仰付旨被 仰出置候へ共、 總州様思召之訳有之、再三被仰進趣有之、切腹之儀被成御免、命者御助ケ、士被召放、出家ニ被仰付候、

村田平右衛門弟本村田  
名字之  
清右衛門

右清右衛門事、去ル三日御関狩ニ罷登候與ニ無之候処、吳様之躰ニ而罷登、三番與串目之場ニ罷居、玉目五拾目之鉄炮を廻り鉄炮外狼ニ下人ニ打セ、自分ニ茂鉄炮打、其上右下人鉄炮打候所より七八間風下より野火起たる由、右ニ付而者段々不屈之仕形付、切腹可被仰付旨被仰出置候得共、 總州様思召之訳有之、再三被仰進趣有之候故、命を被助、士被召放候間、出家可為仕

「鹿籠古帳」

一 享保九年辰三月、三度狩初狩相納候事、

一 享保十三年戊申十二月五日、御関狩於谷山被仰付候、

集者落之上、惣奉行種子嶋織部殿・嶋津仁十郎殿・北

郷四郎殿、當年より春山・谷山兩所ニ而替々御狩被仰

候、此儀早竟

總州様思召迄を以、切腹之儀御免被成候、

本井上名字之

甚助

右、吉野御関狩之儀ニ付、於與所詮議有之候節、無筋

證據相立不届之至候、依之切腹可被仰付旨被 仰出候

へ共、總州様思召之訳有之、再三被仰進趣有之候故、

命を被助、土被召放候間、出家可為仕候、此儀早竟

總州様思召迄を以、切腹之儀御免被成候、

右之通被仰付候旨、享保九年辰二月十三日被仰渡候

也、

付候、鹿兒嶋三與罷登米候得共、二與ツ、ニ被仰付、

三ヶ年ニ一度ツ、外城茂同断、

御狩賦

當申年登り前  
一三番與 四番與

谷山 知覽 山川 川邊 加世田 田布施

伊作 久志 鹿籠 指(◎宿)

来酉年登り前  
一ニ番與 六番與

伊集院 喜入 坊津 山田 日置 吉利

山田 樋脇 限之城 郡山 永吉

来ニ成年登り前  
一ニ番與 五番與

帖佐 入来 吉田 山田 阿多 百次

串木野 桜嶋 額娃 市来

一 限之城・入来・百次・加治木之儀、以前谷山・春山江

不能登候得共、當年より三ヶ年ニ一度ツ、狩立申付候、

乍然花野村・塩屋村・西田村・吉野村・下田村・小野

村之儀、跡々より御関狩ニ不能登候条、向後共ニ被差

免候、

一 已前者御名代を初、御扶持米送人馬等為被下事候得共、

人役ニ此節より被仰付候旨段々被仰渡候、

一元文二年巳五月、狩夫銀之被下方ニ付御通達、

嶋津玄蕃殿 嶋津市太夫殿 肝付典膳

川上縫殿 大野七郎太夫 喜入主膳

新納五郎右衛門 北郷四郎 種子嶋弾正

伊勢兵部 仁禮十兵衛 菱刈孫兵衛

義岡左平太 柵寝孫左衛門 鎌田源左衛門

藥丸長左衛門 蒲生十郎左衛門 野村勘兵衛

平田次郎兵衛 新納次郎四郎 中村早太

米良藤右衛門

右者、地頭所被下置候人江者當時狩夫銀半分被下置事候へ共、右人数ハ御役料不被下御役相勤候ニ付、思召を以此節より以前之通、地頭所狩夫銀不殘被下置候旨被 仰出旨 御意之段、右人数申渡候条、首尾係江茂申渡、右地頭所へ可申渡候、左候而、向後地頭所被下置御役料不被下相勤候人者、地頭所狩夫銀不殘可被下候条、御規模帳ニ茂被載置候様、御勝手方江茂可相達

候、以上、

元文二巳五月十一日

(島津久實) 主殿

一 地頭所被下置候人、當時ハ夫銀半分被下置事候得共、御役料不被下御役相勤候面々江者、思召を以此節より以前之通地頭所夫銀不殘被下置候、以上、

元文二巳五月十一日 主殿

一 當分御役料不被下狩夫銀皆同被下来候人之内、御役料被下候節者、狩夫銀半分被下候段者、只今之通ニ候、

一 狩夫銀半分被下来候人、御役料皆同不被下筋ニ罷成候節者、狩夫銀之儀者、皆同可被下候、

一 御隠居御方江相勤、御役料高所務被下候人、表同前狩夫銀半分被下候、其段者時々 御隠居御方より證文ニ而申来答候、

元文五申九月廿一日

(北條時成) 織部

一 諸外城狩夫銀之儀、御役料被下置候地頭江者半分被下、

半分ハ御物江上納、御役料不被下地頭江者狩夫銀惣様  
被下置候得共、御借銀及太分、別而難被相續時節候故、  
當秋冬狩夫銀より一往都而 御物江上納被 仰付候、

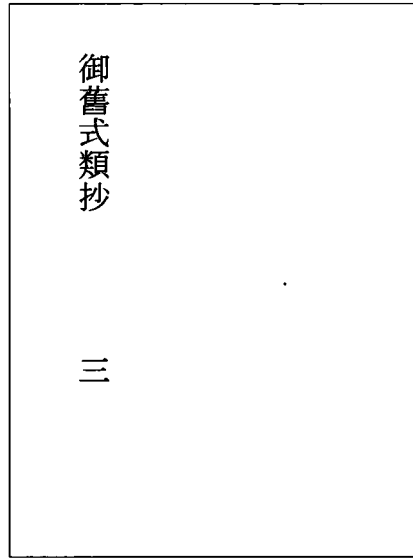
宝曆六子七月

(鎌田政昌)  
典膳  
主殿  
(島津久柄)

一 地頭所狩夫銀、先年より半分ハ御物上納、半分ハ地頭  
へ被下、御役料無之人江者、狩夫銀都而地頭江被下置、  
私領狩夫銀茂半分ハ 御物上納被 仰付置候処、  
御所帯難被續ニ付、地頭所狩夫銀ハ都而 御物上納、  
私領狩夫銀者三ヶ一領主江被下、其餘者 御物上納被  
仰付置候得共、給地高重出米人別出銀等之上納方、去  
年迄ニ而年数等合候間、狩夫銀之儀茂當春夏之納よ  
り、先年被定置候通半分御物上納、残り半分ハ地頭領  
主江被下、御役料無之地頭江者都而被下候、

宝曆八寅二月十六日

(島津久柄)  
主殿  
(鎌田政昌)  
典膳



「御舊式類抄 卷之三 稿」

139 『御馬追シラヘハニ卷ニアリ』

御馬追并牧之事

先年季安西藩田租考と名つけ著撰仕掛、寔の草藁なれとも馬牧といへる篇目を第八に置き、大略の地取をいたし掛て果さず、日向の馬は書紀にも見へ、薩摩の馬は湯坐ノ連か 允恭帝に獻れること姓氏録にミへ、大隅の馬は吉多・野神の二牧多く蕃息して、農業に害あるとて貞觀二年廃せられし事三代實録に出、また日向に馬牧・牛牧など諸所に置れしハ延喜式にも見へれハ、馬追も久しき御作法ならん、此等ハ姑く置き、左に文治以来の事とも類抄す、

140 『史官雜抄』

覚

一瀬崎野

右御牧、忠久公文治・建久之間、薩州山門院江初而御入國之節、本田靜觀一年前御先キニ罷下、御牧等立初為申与舊記之内ニ相見得申候、且又天正十四年之秋、義久公御代志賀道温降参之時、瀬崎野之<sup>ツキ</sup>鶴毛之馬拜領被仰付候由、出水士長野氏系圖之内ニ



有之候、

※『山田聖業自記ニ 氏久仰置候云々、山門瀬崎馬追ノ次テニ

モ候ケル由承傳候、

上井日記

天正二年九月一日、從和泉、瀬崎之馬追被成候云々、

右等ノ事引証ナキコト不審、

〔本記事ハ行間ニアリ〕

一福山野 ※

右、義久公御代、天正元年御牧始与「於」曾郡士木場氏

系圖之内ニ相記置候、

※『史官雜抄

一鹿野屋高牧野・福山野江伊集院殿御代ニ被召直候割付之

通罷移候、慶長四年、山田民部少輔殿御地頭之時致 御

目見候、

右、福山土山下藤左衛門文書之由、

〔本記事ハ行間ニアリ〕

※ 一廻野

右御牧立初年間相知不申候得共、曾於郡士馬場氏系圖之内、天正・延寶之間御牧相勤候由相見得候、然

者天正年間御牧被召立候哉与相考申候、

一廻野

右、天正八年四月十四日、御牧立初有之、同十四年

八月十二日、御牧之御祈念為有之与福山土渡邊氏文

書之内相見得申候、右天正元年同八年兩說難決御座

候得共、天正八年ニ御牧被立初候方可宜哉与相考申

候、

※『私補

一拙者先祖蒲池伊賀事、拾三歳之時從 日新公 義久公江

被召付、女房迄高崎大炊助妹御媒被遊、八十三歳迄被召

仕候、義久公御法躰被遊候砌、伊賀事茂入道被仰付、

名甫心与拜領仕候事、

一福山之儀、前ニ者廻与申候処、肝付御取合之節、互ニ手

ニ入申候儀及度々申候処、伊賀入道申候者、所之名廻与

申候故、互之御手ニ廻リ申候間、所之名御改被遊候而者

如何可有御座哉与申上候得者、甫心存寄可申上旨 上意

候故、乍憚福山与在名を御改被遊候而者如何可有御座哉

与申上候得者、其通御改被遊候由申傳候、

右通、蒲生仲右衛門申出書ニ有之、此通ニ候得者、廻

野、福山野名者替候へ共、牧之儀者一牧ニ而式ヶ所ニ者  
無之候半、

(本記事ハ行間ニアリ)

一 福山野

右、義弘公御代慶長三年、朝鮮國より御帰朝之節、

於福山從 義久公拜領物廻野之駒と、出水士八重尾

氏系圖之内傳記ニ相見得申候、

曾於郡之内  
一 春山野

右御牧立初年間相知不申候得共、曾於郡士馬場氏系

圖之内、天正・延寶之間御牧見廻相勤候由相見得候、

然者天正年間御牧被召立候哉と相考申候、

伊集院之内  
一 春山野

右、勝久公御時永正・大永之比、春山野黒駒一疋

伊集院士中山加賀江被下候由、系圖之内ニ相見得候、

右年間御牧為有之事共ニ而者有御座間敷候哉、御牧

被召立候訳相知不申候、

一 穎娃野

一 鹿籠野

※ 右御牧、何年間被召立候儀者相知不申候得共、穎娃

野牧役を差上、鹿籠野者親之跡役故相勤候由、穎娃  
士種子田氏慶長十三年十月書記置候内ニ相見得申候、

其比より御牧相立申候哉与相考申候、且又 義久公

御代、種子田伊豆代瀬崎野之黒与申御馬拜領仕候

由、種子田氏由緒書之内ニ有之候、

※ 『山田聖榮自記、 氏久之御代、犬追物場始マル云々、穎娃

郡之内嶽之腰、ケルコ牧ノ内云々、其比ヨリ牧モ有タルカ

詳ナラス、享祿二年四月十七日、穎娃野馬追ミエ詳ニ此末

ニ類抄ス』

(本記事ハ行間ニアリ)

清水  
一 平野

右御牧、何年間被召立候哉、御牧為見廻分ニケ村合

五石被下候由、慶長六年三月山田理安在判之書付、

清水士大田氏文書之内ニ有之候、

一 野間野

右御牧、被召立候年間相知不申候得共、天文十年之

比より天正之始迄、御馬追 御名代相勤候由、加世

田士春成氏由緒書之内ニ相見得申候、

一伊作野

右御牧、被召立候年間由緒等相知不申候段、川上十

郎左衛門より申出置候、

一市来野

右、忠國公御代、川上十郎左衛門先祖川上十郎左

衛門義久道安江 御家傳御傳授ニ而、為御名代年々

【天正三年四月十一日 義久公為御馬追市来エ 御光儀見于上井日  
市来江為罷越由、此節委細當十郎左衛門より申出置  
記】

候、然共御牧被召立候年間ハ相知不申候、

右之通、為御見合書付差上ケ申候、以上、

明和四年

亥

三月廿九日

御記録奉行

141

【雜抄】

覺

廻野之牧立始之事

天正八年庚辰四月十四日癸ウ

一卯之時入始馬立也、

一其 前牧御祈念而

一帝釈天之法

一百座

一馬頭觀音之法

一百座

一牧神觀請神樂

自是牧馬繁昌也、其後狼犬競来之損馬之事多々有之、

天正拾四年丙戌八月十二日より牧之御祈念ト而

一五大尊之法

三百座

是ハ三ヶ所行成就也、

一山神護應法

一百座

是ハ一分ニ請取、

一牧神年々神樂、俵ニツ、一年春ゴトニ以此俵物御祭閉目申候、

慶長九年<sup>甲辰</sup>正月廿五日誌之、 能勢軍助 請取之、

右者、御領内諸所御牧所由緒相糺候覚扣帳之内書拔之

云々、明和四年亥正月十七日、御記録方稽古郡山主右

衛門・川上<sup>【員良】</sup>大六、御記録方添役郡山次郎左衛門、御記録

奉行吉田用右衛門<sup>【居史十八年】</sup>之、【清純】用調

142

【全】

覺

牧数拾九ヶ所上使御答書之内

薩州 薩州東郷 隅州蒲生 隅州曾於郡

吉野 比志嶋野 笠山野 青色野 春山野

隅州 隅州鹿屋 隅州 隅州 薩州

福山野 高牧野 末吉野 佐多野 額娃野

額娃之内 薩州加世田 薩州 上飯嶋 薩州出水

唐松野 野間野 下飯野 市山野 瀬崎野

薩州 薩州高江 薩州 薩州

長嶋野 寄田野 市来野 伊作野

143 『全』

覺

市来野・伊作野御牧ニ付而御尋ニ付、左ニ申上候、

市来御牧、従前々御代々、御直ニ而御座候、

忠國様御代ニ、私先祖川上十郎左衛門義久江 御家傳

御犬追物御相傳之節、市来御馬追ニ付御相傳之儀御座

候、私家代々亡父川上十郎左衛門迄、元禄六年之比迄

ハ毎年御馬追奉行被仰付罷登リ申候、右御牧立初之年

号相知不申候、

一伊作野御牧者御國ニ而最上之御牧与旧記見得申候、是

又年号相知不申候、

右之次第、私方江相知申候訳迄申上候、以上、

【明和】  
五月廿日

川上十郎左衛門(親慈)

144 『全』

覺

額娃士種子田七左衛門所持古書付之内

一額娃野ハ御秘藏之御牧与有リ、「末略」

一額娃野ノ牧役をサシ上ケ、加籠野ハ親之跡ナルユヘ一

切相勤有るへき也、「末略」

種田九郎左衛門

慶長十三年戊申十月吉日

秀正判

145 『史官雜抄』

※1 覺

吉野御馬追之節、川上久馬家より御相伴金差初被任来、

且又御馬追之節、先祖川上(久隅)愨(久隅)代取駒之内疋疋ッ、被

下来候処ニ、其以後當時迄不被下候ニ付、以前之通御

馬追之節より取駒之内疋疋ッ、被成下度旨、段々願被

申出趣有之、調被仰渡、左之通ニ御座候、

一元文五年申正月廿九日、川上一学家吉野御馬追之節、

御相伴又ハかね指被仕候由緒、當座江相知不申候ニ付、

一学方江尋究候書付、別紙書写者通差上ケ申候、

一久隅事ハ當久馬より九代之祖ニ而御座候、右代取駒之内卷疋ツ、年々拜領被仰付来候儀ハ別条有御座間敷与

相考申候、然共吉野牧ニ狼當別而馬少ク相成候故、取駒茂出来不申、夫故被下来候馬を茂不被申受筋ニ相見

得申候、

右之次第ニ御座候、最早及数代、當時迄何様之御沙汰茂不被申出候故、年間久敷中絶与申外無御座候、

右躰ニ而茂願之筋御取揚有之事ニ御座候ハ、以来

餘例ニ茂可罷成哉与奉存候、尤(吉寛)淨國院様御代中絶

ニ付而者御取揚被成間敷旨、御格式被究置候、左候

得者、此節願之通可被仰付儀与ハ私共究而難申上御

座候間、何分ニ茂御詮議次第奉存候、以上、

明和二年

西 奥山次太夫

十月二日

川上大六  
御記録方添役  
郡山次郎左衛門  
御記録奉行  
吉田用右衛門

※3

右之通相調、小松式部殿(備前)へ差出置、願通取駒之内卷疋ツ、年々拜領被仰付筋ニ為被仰渡由候、

146 ※1 『史官雜抄』

元文五申正月廿八日

一川上家、吉野御馬追罷登御相伴かね指候儀、吉野御牧、

本者川上先祖川上在任之節仕立召置候儀ニ而候処、慶長

年中、慰政久隅より右之牧を進上于 家久公、御馬追ニ

御登之節久隅も参上仕、御馬追之式法共申上候而、かね

をも指初為申由候、家傳之咒之文等茂有之候、往古ニ者

自分牧所ニ有之、互ニ馬を奪候故、目印にかねを當置た

る由候、牧差上候翌年御馬追より、取駒之内卷疋ツ、可

被下旨被仰付候間、久隅秘藏仕候月毛之馬父ニ入置候、

其子共を年々拜領為仕由候、右之儀ニ付而者、于今書付

等茂御座候、其後牧ニ狼あて別而馬少相成候間、取駒も

出来不申、其節より馬不被下筋相成候、御馬追之節、祖

父上野代差支、川上伊織當祥山兩度罷登、御相伴かね指

候儀有之候段、川上一学より被申上、

吉野御馬追之節、金指初并御名代御三献御寄合之御相

伴被相勤、一学難相勤候節ハ嫡子差越、一学勤方同断

可相勤候、兩人共差支候節ハ、庶流之内家筋不極置、  
 一学より見合、金指迄為相勤候様兼而相心得可被居候、  
 右之通庶流より相勤候節者、首尾被申出候様可申渡、  
 四月(北條時成) 織部

右、元文五申四月萬調朱書

〔本文書ハ前号文書ノ行間ニアリ〕

## 147 ※2 『全』

一染川傳七先祖染川喜兵衛御馬追之節、駒ニ燒印當候儀、  
 惣鍛冶役ニ而相勤候、其節惣鍛冶染川殿江三年ニ一度駒  
 疋疋ツ、自以前被下来先例之由候間、駒奉行江可被申入  
 旨、其節之御用人仁禮右近より御馬方國分帯刀江申遣候  
 書狀傳七家ニ所持仕候、右を以相考申候得者、傳七自以  
 前惣鍛冶役相勤候儀、無別条相見得申候云々、  
 右、寛延三年三月八日、本田・安藤・川上調書

〔本文書ハ一四五号文書ノ行間ニアリ〕

※3 『以上、史官雜抄ヨリ此ニ類抄ス、以下此節類抄』

## 149 『史官雜抄』

日向國嶋津ノ御庄ニ御居住有、嶋津判官ト申、御下向  
 ノ時、女子殿原トシテ本田ヲ父秩秩父ナリヨリ付申サレケ  
 ル事ハ、忠久ノ上様本田次郎親經カムスメ、重忠ノ思  
 人ニテワタラセ給フ、其腹ニ持給ヒタル御ムスメト云  
 ヲ、其故ニ當國迄モ御供サセラレケルトナリ、先御先  
 ニ下向シテ、薩州山門院知行シ、瀬崎野ノ野牧、又ハ  
 感應寺ナト立ハシメケルニ、一年後忠久ハ御下向、御  
 供十人也、富山ヲ父トセヨ、梅北ヲ母トセヨ、三ヶ國  
 ノ御家人ハ忠久ノ家人タルヘシ云々、

又久富狀二通、加一見候了、宇波崎・塩屋事申まい  
 らせ候状者、是ニ可入候之間、留置て候、今一通ハ  
 返進候、又山門院ハ故殿御存生之時より、給分ニ  
 給て候間、殊更〇鹿倉事ハ存知候て候ほと、可委  
 細申候△

御文条々、委細承候了、

150

【執印氏藏】

薩摩郡内寄田村牧事、被致忠節之間、以別儀所預置也、  
可被存其旨之状如件、

貞治七年三月廿七日

師久御判

執印左衛門太夫入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一六八一号文書ノ抄ナルベシ)

十二月十八日

道鑒

(花押)

「外四ヶ条略于此」

思議候、

も、何も牧内立鹿倉にて候、各別と申候覽事、返々不

脇本・宇波崎・塩屋崎・尾嶋、小名者皆替て候へと

之由被仰候て、可被相尋候、瀬浦・賀志浦・黒多尾・

条、勘法次第候、次誠牧内外と申候者、其支證を可出

立鹿倉と申、馬立場与申、無不審候、牧内之外と申候

て候、故殿御狩之時、我々も完餘射て候之所にて候、

一黒多尾為牧内哉否事、牧内をば本田淨觀之時、就同立

候、完おひたゞしく候へく候、黒多尾者为宗馬立

候、道義公ナラン、道鑒公初御兄弟達ナラン、

152

【山田聖菜自記】

一氏久之御代犬追物場始マル、於志布志之犬之馬場氏久

御誘候、「鹿兒嶋 前洲」「市来 大湊」「宮内 大津

川ハタ」六郎房」「飯肥 油濱」狩場「薩州 穎娃之

郡之内 嶽之腰・ケルコ・牧ノ内」「鹿兒嶋 吉野ノ

大セタヲ」ニテ 氏久完アソハシ候、物合平地之所ヨ

リモ猶面目時代之人々モ不思議ニコソ申アワレ候之由

承候へ、餘ニ御執事候ケル哉、元久・豊久・上野守

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五号文書ト同一文書ナルベシ)

卯月二月

氏久御判

執印殿

先日計申候料所事、若相違之時者、可致別沙汰候、聊

不有等閑之儀候、兼又寄田牧事、以別儀仰申候、恐々

謹言、

151

【全】

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二八九号文書ト同一文書ナルベシ)

殿達者トハ乍申、其後者何『レ』モ彼『ノ』在所『ニ』馬ヲ乗ル、方候ハス、「市来大峯」『福山坂ヨリ上』場馬賦ヒカヘ様ナヲシヒカヘ所、何れも 氏久仰置候、「庄内ニテハ佐野・高原」山門『ノ』瀬崎馬追『ノ』次『ニ』モ候ケル由承傳候、

貞久之御代ニハ「求仁郷之内荒佐」御狩之時ハ鎬モ大ニカラモウスヘウ以ハキ、羽モヲサスシテ完ニ浅立候『柄』スル事ヲ與ニ御好候ケル哉、以後ハ御老躰ニ御成、チ取『新納忠元、庄内陣ノ時ナト老躰ニテ、鷹取ニ乗リテ城攻シタコト旧記ニアリ、此モ 道鑿公ナト御老後鷹取ニ召サレ御狩ノナカヘヲ御打、御コシヲ走レノト御下知候ケル由、中古迄被申候、立ノ遺風ヲ歎慕シテノ事ならん』

文明十四年三月 日

(一) 前ハ朱書ナリ

亨祿二年云々、

四月一日ひのへとら、田うへ始候、ふろにて候、其外無何事候、

「此間略ス」

十六日、丸いさく使僧立候、兵もとり候、さまとの・兵『庫』こ方より書状来候、竹内式部より越前所へ馬追の注進候、十七日、ゑの馬おいニ三上り候、若衆六人・中間八人召烈候、ゑのへ當野『喜入』ヨリ入候を取候て被遣候、暮程ニ帰候、吉永使ニ越候、意趣小牧『右エ門』

十八日、別府よりきれ馬二疋烈候て、太郎多もん来候、やかて取候、指宿へ式部・源さ衛門小牧之時宜ニ使ニ遣候、

「此間略ス」

廿九日、馬おい候、駒三疋・駄八疋とらせ候、大明神江野ささまいらせ候、三郎四郎取候、隼人介ニ引せ中間新兵へそへまいらせ候、馬おいニ木嶋方・幸松方出家たちあまた入御候、さけもたせられ候、父馬入候、甲午にて候、

※『野先トハ、先ニ捕タ馬ヲ進納スル例ニテ、今ノ馬追ニハ野先銀トテ青銅百疋ツ、常法寺ニ進アルト云ヘリ』

(本記事ハ行間ニアリ)



五月一日、木嶋方・幸松方帰候、藤さ衛門尉方越候、  
 二日、かこ嶋へ岩見守弥八ニ駒引せ進上候、同薪四十束  
 舟にて上候、仲子よりもたこ共上候、伊集院又五郎方へ  
 駒遣候、越前守ニ駄預候、岩見守同前候、くろにて候、  
 中間清三郎ニ駄くれ候、伊集院少殿に駄、助十郎にて進  
 候、藤帰候【左之門尉】

154 「島津撰津介忠譽日記」

天文六年丁酉正月云々、三月一日云々、

廿七日、馬追させ候、雨殊外ふり候、馬移候、駒四疋・  
 駄一疋、以上五疋取候、野崎大明神江隼人介ひかせまい  
 らせ候、津曲方より合力人可遣候へ共、雨にて候とて捻  
 被遣候、又山之儀重而可申合之由候、又ちらミへ馬追候  
 由捻遣候、雨にて人ハ不被遣候、留守之番以下までさけ  
 たへさせ候、おあひ殿より使僧候、  
 廿八日も雨ふり候、右馬「ノ」助「ヲ」、西目「ニ」實久御  
 着「ノ」由聞へ候間、進候、座主馬之背ニ被來候、又河  
 上殿よりふんしう使僧候、又本田殿より書状被遣候云々、  
【大明神ノ】、【文周】、【紀伊守重親】

卯月一日云々、

十二日、一番鳥ニあより馬追之左右候、父子之間に證候  
 へとの儀候、刑部右衛門遣候、右衛門「ヲ」以「テ」条々  
 申遣候、座主ちらミより帰候、阿多方ニ河野へにて合候  
 由申候、榮刀來候て、當所之名頭たかミのおとな共申之  
 由申候、山伏留候、牟田雨朝少ふり候、又たて大善郷右  
 衛門ニはかせ候、暮程ニ刑部多の馬追より帰候、  
 十三日、朝より雨ふり候、右衛門昨日を殿ハ牧へ無「ク」  
 上「リ」候間、あへ通候てせうちまて帰候とて帰候云々、  
【頼娃】、【忠譽忠俊】、【登り】、【田代】、【飛彈守】、【邊】、【知寛】、【乙名】、【桶】、【頼娃野】、【降】、【頼娃兼洪】、【義虎也】、【實明公御】、【嫡女御平様】

155 「上井覺兼日記」

天正貳年甲戌八月一日云々、

一九月一日、如常出仕申候、從和泉瀬崎之馬追被成候、  
 無「ク」尔々候へとも駒一疋進上之由御申候、同奥よ  
 り、先度人して御懇之儀候、態御禮被成候すれとも、  
 先々午次御礼御申之由候、使者ハ松岡民部左衛門尉と  
 申人にて候、頓而御返事ハ、瀬崎駒御進上候、殊一段  
 之駒にて候、涯分御秘藏候て、いかさま御参上之御可

「上井覺兼日記」

被御覽①之由候、同奥江御返事ハ、先日御小者衆御遣候、其御禮被成候、御懇懃ニ被思召候、殊ニいづれも御堅固之由候、是又御祝着之由候、夫より使者御暇被申候を、御老中御用与候て此日ハ御留候、

天正三年乙亥正月云々、

一 卯月一日、如常出仕申候云々、

一 十一日、如常出仕申候、川上殿御存分、上長・拙者、御前ニ精ク申上候、南林寺などにて御吳見可有之上

意候也、此日、太守様為御馬追、市来江御光儀候也、

被 仰置候間、南林寺・本田紀伊守・上長州・拙者、

被 四人川上殿御宿へ参候、東堂色々御吳見共被成候

間、川上殿御納得候而、御暇之事者御申有間敷ニ相定候云々、

一 廿二日、如常出仕申候、此晚より、吉野関屋まで伊右

衛門兵衛尉・拙者まかり候而、明朝牟禮迄馬籠候得と

候儘、酉之時分打立候也云々、

一 廿三日、吉野御馬追ニ而候、早朝より打立候而、馬を※牟禮迄こめ候而、御前より之御左右を相待候、夫より貝次②次第二牟禮を落候て、笠へ籠候也、諸所之分限被

参候而、馬乗数多候、當所衆三番替ニ馬被執候、諸所之

人衆者十番替計ニ而候、御棧敷之座配、「義久公」上座 御座

候、客居右馬頭殿、次左衛門督殿、次佐多殿、次撰津

守、次伊右衛門大夫殿、主居川上殿、次樺山殿、次吉

利殿、此御人数衆ニ而候、諸人被上候食籠・瓶・樽・

瓶子不知数候、諸所地頭衆中勿論、一所衆召出候て御

酒被給候、琉球人茂見物申候、早晚之 御前棧敷より

一重下之棧敷うたせられ候、馬執せられ候なかはニ、

連珠之瓶二對・食籠二、琉球客より御棧敷江進上申候、

ちく持参候、御前より御酒被下、退出申候、将又執

駒廿三疋候、此日六七疋、御一家衆又者人によりて被下候、

※（願注）

『吉野御馬追ノ事、 義久公御直登リ、是程ノ明驗ハ無キ

ニ、享保四年・寶曆九年・明和二年・四年ノ御糺シ調ラヘ

ニ、代々ノ史官ヨリ一度モ引証セザルハ不審ノ至リ、旧キ書留ニモ無之ト申出ラレントアレトモ、此日記程古来何ノ證據ニ引用セル舊記外ニ多クハ有ルマシ、尤史館ニ無キ筈ニモ無之、是許ハ不審晴レザル事ニ御座候」

『忠堅』

一廿四日、如常出仕申候、從 忠平様、川上左京亮・古川伊賀守にて御申候、上原長州・拙者承候、趣者、去年瀬崎野之式歳、吉野へ御入候、定而此度御取らせ候らん、御禮御申之由候云々、

『上井覺兼日記』

天正十二年正月云々、二月十五日云々、拙者春山野之鶴毛、先日参上之刻御所望之由候つる間、牽せ候て進上申候也、

四月

一晦日、野村備中守・同名加賀守、忠棟八城へ御座候<sup>(④ナシ)</sup>ニ暇之事申候得者、早々可罷帰之由云々、八城者、拙者罷居候する迄ハ留被成候へと申候て留申候、野備者来月八日吉野御馬追たるへく候間、従夫内ニ参着候之

様ニ帰帆之由、忠棟より承由被申候云々、

五月

一十二日、早旦打立候、衆中皆々隨身候云々、申之刻計宮崎へ着候云々、

一十四日、如常、寺家衆其外下々まで帰宅候とて来候、

酒肴共持来候、此日、御崎野馬追之ため海江田江越也、<sup>(④候)</sup>

一十五日、早朝内山より紫波洲崎之城江参候云々、此日、

明日馬追之儀申付候而、<sup>(④間)</sup>苙之普請させ候而見申候刻、

今町より御酒到来候間、普請衆江吞せ候云々、

一廿日、丙申吉日にて候間馬追也、早朝より野ニ登候、

諸人或馬上、或陸立之衆茂有、矢旗・笠驗などおもひ

くも也、取駒一疋候也、▽<sup>(④)</sup>棧敷ニ而者酒宴也△寺

家・社家之衆、其外各酒肴持来候也、棧敷之後にハ網

を曳せ候、魚など多見へ、<sup>(④多く見え候)</sup>終日之慰共也、此晚駒懐させ候て見申候也、すはら一疋候つる間、はおも取せ候

間、乗せ候て見候也、

一廿二日、折宇迫湊、口之普請申付候也、

此日、宮崎へ<sup>(④之)</sup>罷歸候云々、從鹿兒嶋吉野駒被下候、

『御歴別当』『綱秀』大山肥前守書状

被相添候、今年吉野牧一番之駒にて候、拜領候間能、秘藏可申之由也云々、

一廿三日、今晚月待たるへく候間、別而讀經等仕候、駒

懷させ候て見申候云々、被下候吉野駒、同名右衛門〔兼成〕

江預候、然者鞍付なとさせ候云々、〔實兼叔父〕

一廿九日、和田江左衛門尉、御頭殿就御佐之儀鹿兒嶋へ

被参候、乍次吉野駒拜領之御禮鎌刑まで申入候云々、〔田部左五門政廣〕

陸月云々、

一十四日、早朝殿中江罷出候、御虫氣出合候、笑止之由、

白濱次郎左衛門尉殿にて申候、并吉野之駒被下候御禮

申上候なり云々、

『全』

天正十三年卯月

一廿七日、早朝出仕如常云々、此日、向嶋御馬追ニ御渡

海候、御供之由被仰候間御分〔ニ〕候、先於御棧敷御

三献如恒、御盃、川上源五郎殿地頭ニ而候間、祝言ニ

頂戴候、従夫廳而御牧立江籠候、當野狼類〔ニ〕出候

間中絶候て、去年以来又々被召立候間、馬数漸十六疋

而被出候、御忝覽共也、其後網曳せられ候、萬之鱗色

々入候、上覽とも也、御食参候、御座躰、上座 太

守様、客居川上殿・町田出羽殿・拙者也、主居本田紀

伊殿〔河〕・川上源五郎殿也、種々御會尺共也、御酒一二

篇参候時、前之網ニ入候鯛一懸、同包丁召仕之由候

間、瀬戸口安房介御前ニ而包丁也、大草殿直弟与申功

者之手から一入之由〔候〕、御一笑之候、聽而只今之

魚御着ニ参候間御酒参候也、嶋中役人衆杯御酒多進

上申候也、御供衆皆々被召出、御酒被給候、従夫御

鷹野へ御登被成、我々茂御供仕候、御鷹雉〔子〕三取

候、小鷹二・隼一居させられ候也、拙者食籠着ニ而御

酒進上申候、於中途御賞翫共也、川上殿・本田〔紀〕

伊介△殿此外御供〔之〕衆・鷹衆などへ振舞候也、従

夫やかて御帰帆候、未暮内ニ御着也、

五月

一四日、出仕不申云々、此日、大山肥前守殿御使〔綱秀〕被来

候、趣者、市来野栗毛駒被下候、少肩を痛候、若く  
此肩平腹申候ハ、紫波洲崎江牧仕立申候なる、彼  
父馬などに可然被思召之由〔候〕也、即辱之由申上、  
拜領申置候也、又青山野母駒被下、是又此日、如日  
州曳せ申候也、

六月

一七日、早朝紫波洲崎へ参候云々、此春馬追之時分鹿兒  
嶋へ長々逗留申候間、馬追不事成候て于今遅引候、然  
間明日馬追之由申付、苙之普請等彼是申調候、  
一八日、薬師へ別而看經等仕候、雨不絶降候間、今日馬  
追留候也云々、

一十二日、早朝より馬追ニ罷登候、様子如例年、取駒  
一疋候、宮崎衆など馬取被成候、網曳せ候、魚など棧  
敷へ持来候、各参相賞翫申候、諸人御樽など持来候て  
終日之慰也、此晚、取駒乗〔ら〕せ候て見申候、彼馬  
蘇山寺預度由候間、即預申候也、

159 「全」

天正十四年四月

一十八日、早旦觀音へ別而讀經等申候云々、明日御崎  
野へ馬追可仕ため、此日海江田江越候、衆中なと少々  
同心仕候也、觀千代茂越候する由頻申候間、召烈候、  
此晚、恭安にて種々御会尺也云々、

一十九日、馬追見物申候、折苙追天神之松原ニ苙構させ  
候て籠候、柴屋如例、各酒肴等持来、寺社衆など同前、  
網引候而、魚など多々来候、彼是見物無〔比〕類候、  
終日慰候也、取駒二疋候、尅疋御崎觀音江拜進仕候、

五月

一十一日、平田新四郎殿より、吉野御馬追来十四日之由  
候、それに乘せられ候する、拙者吉野之栗毛借用之由  
承候間、鞍・具足等仕合、牽せ進之候云々、

※「増宗ノ嫡子宗次新四郎、母上并覺兼ノ女トアレトモ、慶長  
七年ニ十七ニテ横死トアレハ、逆ニ計ヘ天正十四年ノ生レ  
ニ當リ、即此年ノ馬追ニ合ハス、左アレハ増宗カ幼字ヲ譜  
ニ新三郎ト載セシハ誤ニテ、此ニ云フ新四郎乃チ太郎左エ

門増宗ノ幼字ナルコト疑ナシ、左アレハ此年二十一歳ニテ

覺兼ノ嫡女舞ナレハ晴レ成馬追故、一人丁寧ニ借シタルト

見ヘタリ」

(本記事ハ行間ニアリ)

160 『本田六左衛門藏』

就御馬追三町衆迄祇候可申之被仰付候、今年之事者、

乍早晚御晴可罷成<sup>(出)</sup>支度一人も無所持候、悉所領<sup>(持)</sup>申候人

衆者火事之時吉惡燒捨候之条、不及是非候、即刻申者付

候帷・肩衣等も晴着可被申ハ有間敷候、大概之火事<sup>(考)</sup>与思

召候哉、況拾草袴之儀不覃沙汰候、勿論緩疎之非申事候、

為御存知候、菟角自是可申展候、可得貴意候、恐惶謹言、

「天正十二年以後」  
三月廿七日

忠元判

圖書頭殿  
『忠長』

新納武藏守

伊集院右衛門大夫殿  
『忠棟』

忠元判

本田下野守殿  
『親貞』  
貴報人々御中

(本文書ハ「旧記雜錄附録」一八三号文書ト同一文書ナルベシ)

161 『史官雜抄』

一慶長四年三月十四日、上井神五郎・桂太郎兵衛より川

上四郎兵衛殿・嶋津圖書頭殿宛之書中ニ有之由、

一瀬さき野御牧三十疋餘在之由ニ候、前より御馬見廻

申候者申付、猶以改申候事、

一帖佐より二階堂傳右衛門尉・野添善兵衛尉兩人召寄、

様子見せ申候事、并在々江瀬崎野之は、駄<sup>(母)</sup>なと在之分、

いづれも念を入尋求申候、先代物を百姓ニくれ申候て

後、馬を請取申候、爰許此通ニ仕申候事、

一いつミ野・阿久祢野・網津野・長嶋野牧之内、いまに

少々在之所も御座候由申候、急度相改可申上候、手ひ

ろく御座候条、馬数所々見究申候事、急ニ難成候条追

々可申上事、

(本文書ハ「旧記雜錄後編三」六八八号文書ト同一文書ナルベシ)

162 『史官雜抄』

一同十年比五月朔日、從 惟新様 奥州様江被為進候御

書中、一馬追之事、所ニより貴所下向之砌まで残置

『新納内藏家藏』

猶々平吉参候へかし、あまり無人衆ニ候、寺沢殿参  
 會候するまゝ如此候、与七兵衛尉もまいり候へと可  
 被申付候、万忝御意申難尽候、此等之趣、内々御心  
 得有へく候、  
 急度令啓入候、仍今度寺澤殿御會尺御馬追兵部少輔殿  
 はれたるへく候間、某かめくり野之大月毛御借被成候、

『伊勢』『貞昌』

『史官雜抄』

義久公年間不知、三月廿六日御状  
 一駒追御見物有度由承候間、被成御越候へかし、寺沢志  
 摩守殿へ宛書、  
 『政成』

『唐津侯』

候へと被仰置候つれとも、時分過候へハ悪敷候間、先  
 々諸所馬追我等前より可申付由、河田大膳亮を以承候、  
 『島津圖書忠長入道』  
 則其通紹益申渡候、駒之事一ニ程残置候得と承候へと  
 も、後日御遺物などの為候条、我等鹿兒嶋へ罷越、駒  
 共見申候而、依馬形六七ツも召置可申と存候、為御存  
 知候、「餘条略ス」

『國鏡』

※

四月廿九日

岩城吉左衛門殿

『新納武藏忠元入道』  
 為舟判

〔本文書ハ「旧記雜録後編四」三五一号文書ト同一文書ナルベシ〕

※ 『此寺澤侯等鹿兒島ニ来聘ノ時キ従士踊シテ 公覽ニ備ヘケ  
 レハ、此ヨリハ御舊式ノ開狩ヲ櫻島ニ催サセ與セラレ、且  
 今ノ士踊モ此時ヨリ始リタルトノ口碑ハ享保四年史官ノ調  
 ニモ見ユレトモ、其年間何レノ年ナル事ヲ詳ニセス、先年  
 季安忠元ノ傳ヲ著撰スル砌、此寺澤殿御會積御馬追ノ事ニ  
 付キ、為舟ヨリ手當申付ラレシ状ノ四月ノ肩ニ閏ノ字アル  
 ニ心注キ、古曆便覽ヲ稽ヘルニ、慶長五年閏ケ原乱後同十  
 五年為舟卒スル迄ノ間ニ、四月ノ閏アルハ惟此十二年丁未

許ニ限レハ、疑モ無ク其年ナルコトヲ決シ知レリ、且伊勢貞昌ハ為舟娘ノ子ニテ外孫ナレハ、晴レ成用ノ馬借故、能ク世話セラレシト見エタリ」

(本記事ハ行間ニアリ)

165 慶長十三戊申二月、春山御馬狩之事

三

御殿

野上上三川

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

重 四三層白

川上武藏守

九伊勢大内記『貞朝』

八上井甚六『經兼』

七川上左京亮『久林』

六川上式部太輔『久國』

五桂太郎兵衛『忠詮』

四三原次郎四郎『重庸』

三村田刑部少輔『經永』

二相良新右衛門『長信』

『普請』五ノ号掛札一 一町田少兵衛『久幸』

久公 在 多 又 大 聖  
織 次 聖  
『經 永』

166 『慶長十九年御留守中日記』

十二月

一廿七日、此朝御分國中ノ馬、他國へ被遣事堅可為停止之由、一所衆・諸外城江廻文を以被仰渡候、

167 『元和五年卯月廿三日、從 惟新公 薩摩守様エ被進御書抄』

一福山野馬追之儀、去十一日被申付候、駒數百八十七疋在之由候、當年者駒も一段見事ニ御座候由候、我等茂其内青毛・鹿毛・糟毛・黒栗毛四疋取申候、涯分致秘藏<sup>◎魚</sup>申事候、次ニ春山野之駒廿三疋在之候間、其内三疋召置、餘者かけ馬ニさせ申候、何茂貴所御下向之時分可懸御目与存、連<sup>◎</sup>乗入させ候事、

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一五八六号文書ノ抄ナルベシ)



【寛永十二年七月廿七日、伊勢貞昌・島津久元贈川上久國・島津久慶書抄】

一 福山之母駄御取せ候而、穎娃之牧ニ可◎被召加之由被

仰出候云々、

(本文書ハ「旧記雜錄後編五」八四五号文書ノ抄ナルベシ)

一九尾野

右者、渋谷河内守良重祢答院居城の比賞翫せし牧にて、九之峯宇治か迫あたり曠野に為有之由、金吾歳久領の時、堀苙、桜を植られしとて、壽木近古の大風におれしと也、嶋津圖書入道紹益の移て、宮城を采邑とせられし慶長の比は御牧に立られ、野州久元の領と為りて、宮城・山崎・大村・霧田・佐司五ヶ所より牧堀外墻等の普請して、毎年の馬追にも五ヶ所の士民立登り、賑く敷壯觀の牧なりしに、嶋津将監久富の時き、右の宇治迫ハ佐司の内にて圖書久通恩借せられし地なれハ、取返して墾開せんと圖書久方に相談せられしより、互に争詔と成り、つゝ享保四己亥の年、右の牧は疊れし

【盛香集】

との事、土持仙岩か祢答院記に見へたり、

一 御馬追は御帰陣之御嘉例とかや、【慶長九年甲辰御年七十也】惟新様七拾の御年

是迄の御名残りに吉野御馬追に御登せ可被遊由仰出さ

れけれハ、帖佐・加治木・鹿兒嶋より吳様の支度した

る馬乗多登せける、その内に後醍醐院内藏介野袴を着、

馬を引かせ、其身は歩ちにて登せける、馬乗り列たる

人く是を見、あの上方衆の様子を見よと笑ける、扱

峯の岡より馬を落しくらへの時、袂より食を取り出し馬

ニくわせ、ひたと乗り、かくを打込とひとしく真先に

落しすましてけり、始め誇りし人も、さすか【後醍醐宗重】淡齋か子

程あり、能落したり、馬をいとひしは賢しと却て後は

讀しとそ、惟新様にも峯御落し被遊候、古来稀成御

齡にてかよふの御達者ハさ、誠ニ珍敷御事也、ケ様成

舊例にて、御馬追毎に必ず吳様の支度為仕馬乗り多く

登りけり、寛陽院様御代に、吉野の市助といふもの

あり、實は藤田なれとも、吉野村居住ゆへ、斯くハい

ひし、身上乏けれハ、常は山野の稼を業とし日を送るといへとも、武士道に心かけあるもの也、然共つねく吳様成事を好ミしゆへか、此御馬追に日丸の八徳に生過たり、藤田市助生年十八歳、喧嘩買人あらは賣へし、賣人あらは買へしと大文字に書て是を着し、長き刀をさして瘦たる馬に古き馬具を仕掛て、飼に飼たる馬共の中に乗て出しかハ、佐野の源左衛門常世か古し語りに吳ならずと、みる人且驚き且此人のいかりに觸ん事を恐れて、高く笑へるはなけれ共、目引鼻引聞めきあへり、夫より吉野の市助とたにいへハ、大打童まで能しりて斯名高くハ成しと、我等若輩の頃まで無中絶、御馬(追之)乗毎に馬乗り多く登りしに、一年此中間に鬭争出来して人死ありしより被止て、今はなき事也、

一伊地知(重政)右衛門并其養子伊地知主膳(重徳)兩代、加久藤移地頭ニ而、其比之古帳ニ澤原野御牧并御馬追(前カ)之次第委敷書留数冊家蔵仕居候間類抄之、

171 寛永廿年加久藤噺所案文并萬留帳

171の1 一書令啓入候、仍沢原野犬墻御方御受取之内、けとの隔子戸古候て、明立然々無之候、今分ニ候ハ、狼も潛可

申由吉松より注進候間、早々隔子戸新敷可被仰付儀肝要候、右之旨、伊地頭左地知右衛門尉前より可被申候得共、當分鹿

児嶋へ參上被申、依留主、我々として如此候、御油断有

ましく候、恐惶、

二月十四日

「加久藤噺」坂  
白大「炊左エ門」

「地知」  
伊弥「右エ門」

湯之尾

御噺衆中

171の2  
「全」

猶々明日天氣悪候ハ、明後日たるへく候、以上、

急度令啓入候、仍沢原野牧墻之内へ狼相籠候由、從馬関田注進候、就夫犬狩可仕候間、其地之人數明日被罷立候様可被仰付候、集者牧神之本たるへく候、御油断有ましく候、恐惶、

【同廿年】

二月廿七日

馬関田 吉田 吉松

御暖衆中

白 大炊左【篤豊】

伊 弥右 【重延】

171の3

態令啓上候、仍澤原野牧墻之内へ狼相見得候ニ付、馬関田・吉田・吉松・加久藤、右四ヶ所衆中致談合、牧内之端山之狩仕候得者、奇特ニ狼尅疋但女犬、加久藤衆坂本郷右衛門射被申候間、持せ進上申候、尤自身持参可申候得共、ちと指合申儀御座候条、不参申候、可然様御披露所仰候、尚期後音候、恐惶、

白 大炊左

伊 弥右

【同廿年】

二月廿九日

【山奉行】  
和田讃岐守殿

【忠清】  
黒葛原周右衛門尉殿

【久親】  
新納二右衛門尉殿

川上五兵衛尉殿

参

171の4

【全】

猶之右之狼持候夫二人之日用ちん、山奉行衆より手形御取候て、殿役奉行衆へ御申被成被下候様御入魂所仰候、将又射手へも早晚御礼銀被下候、於是儀者御受取、彼者へ持せ可被遣事頼存候、以上、

一書令啓入候、仍沢原野牧墻之内へ狼相見得候ニ付、馬関田・吉田・吉松・加久藤、右四ヶ所之衆中致談合、牧内之端山之狩仕候得者、奇特ニ狼尅疋、加久藤衆坂本郷右衛門射被申候間、持せ進上申候、御両所御談合を以、彼狼山奉行衆へ御披露所仰候、尤伊左右衛門殿迄可申入候へ共、はや御扁宅之由候条、御両所へ令申候、我々前よりも山奉行衆へ書中進入申候、可然様御取合頼存候、恐惶、

【寛永廿年】

二月廿九日

【重政付衆中御雇足輕ニテ  
地頭所取次】  
池上与三兵衛殿

【地知】  
伊 筑後守殿

参

【加久藤暖】  
白 大炊左【篤豊】

【地知】  
伊 弥右【重延】

【全】

澤原野御馬追ニ付次飛脚

かこしま 吉野 脇もと 帖佐 十日町 加治木

有川 横川状一通 栗野同一通 吉松 吉田同一通

馬関田 飯野同一通 小林 高原之状可被相届候、

加久藤一通 野尻一通

右、所次を以七通ノ状銘々可相届候、緩せ有ましく候、

【山田】 【有榮】

【島津】 民部少輔

【寛永廿年】 未三月七日 下野守 【久元】

【全】

急度令啓入候、仍沢原野篤普請、来ル十六日可仕覺悟候、

各之御喫所も同日ニ被仰渡候而可然存候、又御棧敷普請

も同日ニ可仕候之条、同前ニ庄屋へ可被仰付候、早晚御

談合申、同日ニ相調申儀ニ候条如此候、尚期後音候、恐

惶謹言、

白 大炊左

伊 弥右

【寛永廿年】 未三月十四日

【全】

馬関田 吉田 吉松

御喫衆中

まいる

飯野も同前ニ遣候、

尚以令申候、集者未明ニ御揃候様ニ尤ニ候、若遅々候者、可致其沙汰候、我々談合可申由、從鹿兒嶋被仰付候間如此候、已上、

来廿一日二日天氣次第、沢原野御馬追從鹿兒嶋被仰越候、

定其地へも御承ニ而御座候ハんと存申候、如早晚衆中町

在郷一人も不殘罷立候様可被仰渡候、人数之差出、前稜

此方へ可承候、集ニ而改可有之候、毎年不人数ニ而御牧

され候之間、其御心得を以可被入御念候、串目之事、此

方見合次第可申渡候条、例年之串目相連可申事茂可有之

候、集者可為早晚之所候、為御存知候、恐惶謹言、

【寛永廿年癸未】 三月十二日

【加久藤地頭】 【地知】

伊 本右 【衛門尉重政】

【吉田地頭】 【丸】 弟子 播 【摩守宗盈】

吉松 栗野 飯野 須木 小林

踊 横川 高原 野尻

171の8

【全】

御暖衆  
 馬越 湯尾 本城  
 曾木 羽月 大口  
 山野  
 御暖衆

猶々令申候、乍重言明日者功者衆五六人被成御同心、早々加久藤と吉松取合之所へ御出被成へく候、就中吉松・馬関田・加久藤、右三ヶ所之内へ牧立相籠たる儀ニ候間、御談合不申候て不叶儀ニ候由被申候、右之木立可申事も三ヶ所談合可申之由候、以上、一書令啓入候、仍沢原野御馬追ニ付、十九ヶ所之串目之取合之堺ニ木を立、其木ニ何百間者何之外城之受取と書付被召置候者、串目之次第引立候時、口能有ましく候、又中程ニ押寄候而たゞへ可申所も、右之木ヲ立、書付可召置候、それより馬籠近く罷成候而も右之通ニなされ、以上三所程ニ木を御立候ハ、串目も揃可申候、毎年御馬

171の9

覚

- 一引立之かひ七ツ、
- 一くしめ取合候時之かひ五ツ、
- 一寄せかひ四ツ、

和田三左衛門尉殿  
まいる

追ハ有之儀候条、為後日土持平左衛門尉殿御越被成御滞留候間、明日大原迄平左衛門尉殿伊左右衛門尉同道申罷上、左様之大躰をも見定申度由御談合被申候間、御方よりも御暖衆又者功者衆五六人も被成同心、吉松と加久藤と取合之大原之山のかたまで可被成御上せ候、左候ハ、於彼地御談合申見合召置、近日中ニ木を立させ申度由候、右之通至右衛門尉前より新納仲次郎殿へも被申入候、必吉松御暖衆へ可被仰置候間、相談可被申由御返事候条、為御心得如此候、尤至右前より可被申越候へ共、今日ハ追せニ被罷上候条、為拙者申入候、尚期後首候、恐惶、  
 【寛永廿年】三月廿五日  
 【吉松地頭】忠彰  
 【地頭】  
 【加久藤暖】  
 白【坂】大炊左【衛門】

一たゝゑかひ七ツ、

一かひ始、西より可有之候事、

一西ニ寄せかひ壹度吹候とも、東ハ寄せられ間敷候、

二度め之よせかひの時、東も可被寄せ候事、

一かひ三ツ吹候時、馬取衆被相迎候事、

右之かひかず、諸所之人数無御油断能之被聞合へく候、

少も緩ニ候ハ、可致披露候間、先以我々として如此

候、以上、

【寛永廿年】  
三月廿日

伊地知左右衛門殿

参

土持平左衛門

【綱辰】

171の10

【全案文留】

受取留

母駄七拾壹疋

右者、今度福山野より澤原野江入由候而御引せ被成候、

踊衆中手嶋清左衛門殿・山口志广助殿兩人被相付、槌

被引届候、則我々参合、沢原野へゆるし申候、外壹疋

ハ頸痛候由候而、爰元へ不参届候、参次第受取可上

候、以上、

【寛永廿年】

未

五月二日

【加久藤行司】

竹内權左衛門

【同慶】

河野与右衛門

【全】

白坂大炊左衛門

踊

御慶衆中

右踊衆津曲孝右衛門殿・松下孫右衛門尉殿書物有之、

但右之寫卷ツ仕候而、竹内權左殿へ渡置候、

171の11

右馬引ノ名之覚

一母駄十八疋 加治木

一同十八疋 横川

一同十八疋 溝邊

一同十八疋 栗野

メ七十二疋

172

【加久藤案文留】

寛永廿一年

172の1

猶々令申候、右狼墻修理之儀、加久藤より諸所へ可申渡之由、連々かこしま任御下知如此候、

急度令啓入候、仍沢原野狼墻木朽候て、狼潜申、御牧ニ

あて申候、殊更當歳時分ニ罷成候条、墻木惣別新敷被成、

御替普請可被仰付候、作時分ニ罷成、墻ころひ候ハ、

其砌普請可難成候間、急度御調可被成候、御油断有まし

く候、右之趣、鹿兒嶋駒奉行衆へも申入候、為御存知候、

恐惶、

〔寛永廿一年〕

正月十八日

三人  
〔白坂  
河野  
伊地知〕

馬関田 曾木 吉松 栗野 横川

吉田 羽月 踊

湯之尾 山野

馬越 大口 高原 野尻 須木

本城

172の2

〔全〕

猶々令申候、狼墻被仕候諸所書立、別紙ニ進上申候、

一書令啓上候、仍沢原野狼墻木朽申候故、狼くゞり申候、

172の3

〔全〕

はや當才時分ニ罷成候間、墻之木新敷被相替、普請可被

調之由、我々前より拾九ヶ所之外城へ申渡候、乍去各様

御前より御廻文を以被仰渡候者、弥々首尾可仕与存候、

〔作時分ニ罷成候而者、普請可難成義ニ候間、為御存知令

申候、恐惶謹言、

〔寛永廿一年〕

正月十九日

三人

〔御厩別當〕〔蓋秀〕  
財部淡路守殿

伊地知越後守殿  
〔重張〕

大山六右衛門尉殿  
〔秀綱〕

横川 踊 栗野 湯之尾 馬越 本城 曾木 羽月

山野 大口 吉松 吉田 馬関田 加久藤 飯野

須木 小林 高原 野尻

合十九ヶ所

猶々惣奉行 嶋津中務少輔殿へ諸事下知をゑられ尤  
〔久茂〕  
候、御談合入儀ニ候間、三日前ニ噺衆其外老名衆同  
心候而吉松へ被相揃、中務少輔殿江可被懸御目候、

以上、

四月六日七日天氣次第澤原御馬追たるへく候間、如例年衆中に郷町人被召列、申目無緩様ニ可被相調候、恐々謹言、

【寛永廿一年】

【御家老】 山【田】民部少輔 【有榮】

申 三月廿九日

川【上】因幡守 【久國】

頼娃左馬頭 【久政】

北【郷】佐渡守 【久加】

横川 栗野 吉松 吉田 馬関田 加久藤

飯野 須木 小林 高原 野尻 暖衆中

172の4

去廿九日之御状具令拜見候、

一澤原野御馬追、今月六日七日天氣次第被仰付之由從

御老中様御廻文一昨晚夜半時分ニ參候、薦普請・棧敷

普請之儀、如例年隣外城ニ相談可申候、

一御馬追申目并たへ所之御條書被遣候、

右之趣、御奉行衆御着被成候者、具ニ可申上候、

172の5

【此外ケ条略ス】

【寛永廿一年】 卯月二日

【地頭】伊【地知】李右様

三人

【白坂大炊左衛門篤豊  
川野與右衛門通昌  
西田和泉守時通】

【加久藤暖】

猶々令申候、棧敷ハ名より調申儀ニ候間、同日ニ仕候ハて不叶儀ニ候条、必四日たるへく候、自然天氣悪候者五日たるへく候、為御存候候、

一書令啓入候、仍来六日七日天氣次第御馬追之由、御方

御同前ニ御廻文參候、就夫馬籠普請并御棧敷普請必来四

日ニ可仕覚悟候、御方も同日ニ被仰付候而可然存候、乍

去馬籠ハ一人見せニ遣申候、少もそこね不申候、嫌はら

い迄ニ而も能候ハんかと申候間、衆中ニ而仕儀ニ候条、

明日ニも可被仰付候哉、各御分別次第ニ候、恐惶、

【寛永廿一年】 申卯月二日

三人

馬関田 吉田 吉松

御暖衆中

まいる



172の6

【全】

如例年御馬追ニ付、御棧敷之御振舞ノ檢者可申付之由承候、得其意候、忝人可申付候、恐惶、

【同廿一年】

卯月四日

白大炊左

川与右衛門

西和泉

池田治部右衛門尉殿

172の7

【全】

猶々前之如御廻文、惣之御奉行之儀者、中務少輔殿にて御座候、以上、

急度申越候、仍澤原御馬追之儀、今月十六日必定之儀候、就其御奉行衆もはや今日此元江曾木源七殿御着被成候

条、早々此方へ如御廻文御越可被成候、御下知衆として

伊地知主膳正殿・本田六左衛門殿・國分左京亮殿・土持

半三郎殿・比志嶋左京亮殿・佐多又四郎殿・児玉四郎兵

衛尉殿、右之御人衆諸所可為御下知之由相聞得候、為御

心得候、

【寛永廿一年】  
卯月四日

黒木弥右衛門

和田三左衛門

吉田諸所

御囃衆中

まいる

172の8

【全】

猶々申目之賦相替共候ハ、あつまりにて可申渡候、

鹿兒嶋より御下知衆餘多可有御越候間、参合諸事可

申渡候、人数不足無之やうに追立可被罷上候、如例

年札之まゝ之人数たるへく候、此状不嫌夜白可被相

廻候、指出之儀前以可被出候、是又為御心得候、以

上、

急度申越候、明後日六日ニ澤原御馬追有之候、人数如早

晩、衆中在郷追立ニ未明ニ可被相揃候、若時節於相違ハ、

其沙汰可申候、我等前より可申渡之通、於鹿兒嶋被 仰

出候条如此候、自然六日ニ天氣悪候者、七日八日晴次第

たるへく候、其御心得尤候、恐々謹言、

「寛永廿一」四月四日  
敷根筑前守【久頼】

吉田 馬関田 加久藤 飯野 須木

小林 高原 野尻 噯衆中

【全】

昨日者致参上得御意、本望之至候、

一 今朝より天氣もはれ申候へ共、菱刈之衆今より被打立候てハとても筈ニ逢申ましくと存、此方も打立不申候、

一 昨日申後候人数改之儀ハ、早晚隣所致談合、飯野より

ハ加久藤を改、加久藤よりハ飯野ヲ改申、又小林と高

原、須木と野尻、如此相談申候てハいかゞ可有御座候

哉、雨之事も隣方御相談候而可然存候、乍去御奉行様

へ被得御意、御報ニ示給へく候事、

一 先日 御老中様御廻文ニ、踊老所ハ當書ニ無之候、自

然筆者書落ニ而哉御座候ハん哉、御奉行衆御前より以

飛札被仰越候而欵よく候ハん、乍推参存察之通令申候、

定而御廻文之留、御方へも可有之候、何も御報可得御

意候、恐惶謹言、

「寛永廿一」  
卯月六日  
三人

和田三左衛門尉殿

黒木弥右衛門殿

【全】

急度申越候、仍菱刈衆今日爰元へ皆々滞留ニて候間、明

日之卯之刻ニ被打立候、其御心得尤候、不申ながら御油断あるましく候、若於延引者、後日其沙汰可申候、恐惶

謹言、

「寛永廿一」  
卯月六日

敷根筑前守【久頼】

吉田 馬関田 加久藤 飯野 須木

小林 高原 野尻 諸所 御噯衆中

まいる

【全】

猶々申上候、何比此方へ御越可被成候哉、其砌可奉

得尊意候、以上、

一書令啓上候、仍沢原野御馬追、去ル七日ニ無事相調申

候、取駒十二疋御座候、毛付之内も籠不申候、竹内權左

衛門尉如例年諸所引せ參上被申候、於様子者、口上ニ可

被申上候、猶奉期後音候、恐惶、

〔寛永廿一〕

卯月九日

〔噯〕

三人

〔地頭〕

伊左右様

参人々

173  
〔加久藤案文留〕

正保二年

173の1

〔企〕

一書令啓入候、仍沢原野牧墻、御方花堂与之墻修理大方

ニ候間、狼潜候而御牧ニ以之外あて申候、立木惣別新敷

替可被成候、御油断有ましく候、前々より度々申渡候得

共、立木新敷無御替候故、古木ヲかミ切墻内ニ入申候、

何共咲止之至候、然々被仰付尤候、於無御合点者、鹿兎

嶋へ可致披露候、為御存知候、恐惶、

〔正保二年〕

三月十四日

〔伊地知重延・西田周通・川野通昌・白坂篤豊ナラン〕

四人

高原  
御噯衆中  
まいる

173の2

〔企〕

御札之旨、具令披見候、仍沢原野御牧當取駒毛付申付、

進上可申之由被仰越候条、則申付別紙ニ書付進上申候、

為御存知候、尚期後音之時候、恐惶、

〔正保二年〕

三月廿四日

〔噯〕

白「坂」大炊左

川「野」与右衛門尉

〔御厩別當〕

大山伊与守殿

財部淡路守殿

御報

173の3

〔企〕

澤原野御牧取駒毛付之事 鹿へ参留也、

合取駒拾八疋者

内二栗毛十疋疋

四鶴毛三疋

一青毛二疋

三鹿毛二疋

正保二年

三月廿四日

〔牧司〕

竹内權左衛門尉

〔暖衆〕

白坂大炊左衛門尉

〔同〕

川野与右衛門尉

〔御厩別當〕〔廣綱〕

大山伊与守殿

〔盛秀〕

財部淡路守殿

〔全〕

馬追日記付衆御狩ニ付追立ニ改候而、十五より六十迄

付立申候、

四月四日

中福良

四位久右衛門尉殿

黒田三丞殿

児玉清兵殿

長江浦

池田与介殿

井上六右衛門尉殿

庄屋一人

衆中西田七左衛門殿

栗下

伊地知諸右衛門殿

上野半兵へ殿

宮竹越右衛門殿にれ殿  
庄屋一人

173の5

〔全〕

猶々此状被見届、即刻可被次渡候、少も延引有まし

く候、以上、

今月十五日ニ沢原野御馬追被仰付候、例年之様ニ罷出、

申目其外之儀無緩可被相調候、若右日限天氣悪候ハ、

晴次第たるへく候、毎年取駒籠かね候ニ付、為惣奉行敷

根筑前守殿五日前より吉松迄可被差越候間、其所之暖衆

一人ツ、被罷出、様子被承、可被任御下知候、聊油断有

間敷候、恐々謹言、

〔正保二年〕

酉 卯月五日

頭「桂」左馬頭「久政」

川「上」因幡守「久國」

鳴「津」圖書頭「久通」

踊 栗野 吉松 吉田 馬関田

加久藤 須木 小林 高原 野尻

暖衆中

まいる

173の6

〔全〕

一書令啓入候、仍来ル十五日御馬追ニ付、馬籠普請并御

173の7

棧敷普請明日可仕候間、各御暖中も同前ニ可被仰付候、  
天氣悪候者、明後日たるへく候、将又吉松へ申候、御奉  
行被成御着候ハ、御注進待入候、暖衆一人ツ、可罷出之  
由候間如此候、為御心得一書恐入候、恐惶、  
〔正保二年〕  
卯月十一日 四人

馬関田 吉田 吉松

御暖衆中

まいる

飯野へも同前ニ申遣候、

〔全〕

急度申越候、仍御家老衆御下知ニ而候、前ニ澤原御馬追  
来ル十五日ニ被仰付之由候、弥日限相替間敷候、就其惣  
奉行として敷根筑前守殿〔久頼〕可被差越由被仰渡候へ共、嶋津  
左近将監殿〔久重〕被指越候間、先日被仰渡候様、両日前ニ暖衆  
一人ツ、吉松江被差越、左近将監殿へ可被取合候、恐々  
謹言、

〔正保二年〕

四月十一日

〔御使役〕

新納刑部太輔

忠有

173の8

踊 栗野 吉松 吉田 馬関田 加久藤  
飯野 須木 小林 高原 野尻

暖衆中  
まいる

〔全〕

態一書令申候、仍御方之内多ない口ノ瀬戸、取駒通道ニ  
而御座候、乍不申御作せ可被成候、自然道悪候而駒あや  
まりとも仕候得者、所之御油断ニ罷成儀候条令申候、為

御存知候、恐惶、

〔正保二年〕

卯月十三日

四人

馬関田

御暖衆中

まいる

173の9

〔全〕

一 沢原野御牧ニ當リ候焼印かね式ツ、牧土所へ可召置候  
之由、財部淡路守殿〔盛秀〕より被仰候ニ付、竹内權左衛門尉  
所へ持せ遣置候、

『全』

尚以此状不移時刻可被相廻候、右普請ニ付、加久

藤・馬関田・吉田・吉松へ奉行之儀申渡候間、相談

可被成候、

急度申越候、仍各々御請取之澤原野犬墻之修理、急度相

調可被成候、殊之外狼馬ニ當候由申来候間、無油断可被

仰付候、油断候而請取之墻を破、馬ニ當候ハ、其所之越

度たるへく候間、其御心得可被成候、堅相届候、恐惶謹

言、

『正保二年』

西 十月四日

『御厩別當』 『廣綱』  
大山伊与守

『盛秀』  
財部淡路守

一踊 一栗野 一吉松

一吉田 一馬関田 一加久藤 一小林 一須木

一高原 一野尻 御噯衆中

『全』

猶々山野へ申入候、御受取之墻之手修理も不被成、

其上かり野ほたても未被仰付候、無御心元存候、枯

野ニ罷成、火用心心遣存候、無御油断可被仰付候、

將又向後墻之修理之儀うけなとに被仰付ましく候、

以上、

急度令啓入候、仍澤原野狼墻、此中者加久藤ヶ所へ見

廻被仰付候、自今以後者吉松・吉田・馬関田・加久藤四

ヶ所より見廻可申之由、御廻文を以被仰聞せ候、就夫右

四ヶ所より出合申、惣別墻之様子見届申候、各様御請取

之墻之手修理大方ニ候、はや立木も朽損申候間、来ル十

日より内ニ人数被指越、惣別立木新敷替被成、念を入普

請可被仰付候、今分ニ候ハ、狼墻を潜り申候間、以之外

御牧ニ當り可申候条、無御油断可被仰付候、普請衆さし

越之砌、吉松・吉田江点合可承候、右四ヶ所相談を以奉

行相付可申候、為御存知候、

『正保二年』

十一月二日

加久藤噯

馬関田噯

吉田噯

吉松噯

栗野 横川 湯之尾 本城

馬越 曾木 羽月 大口 山野

御暖衆中

まいる

174  
【加久藤案文留】

正保三年

174の1  
急度令啓入候、仍澤原野狼墻各々御暖所之墻之手、昨日之野火ニ焼損申候、連々ほたてのかり目せはく被成候故、火吹こし如此之様子、咲止千萬ニ候、追付普請衆被指越、早々墻普請可被仰付候、於御延引者、狼之事ハ不申及、御牧も逃散可申候間、少も御油断有ましく候、

一八拾間程 大口 一八間程 羽月 一貳百間程 栗野

一廿間程 本城 一十八間程 馬越

右之通ニ焼損申候、為御存知候、恐惶、

加久藤

白 大炊左

同

西 和泉守

同

伊 弥右衛門尉

馬関田

【正保三年】  
戊正月七日

174の2  
【全】

狼墻見廻衆

野田讃岐

同

高牟禮少左衛門尉

吉田

宮田慶左衛門尉

同

堺田藤右衛門尉

同

曲田志賀右衛門尉

吉松

和田三左衛門尉

同

黒木弥右衛門尉

栗野 本城 馬越 羽月

大口 御暖衆中 まいる

此状右之暖衆連判にて、吉松より所次ニ持せ有へく候、由申候て馬関田へ持せ候、

一番 竹内權左衛門尉殿 二番 税所与兵衛尉殿

三番 坂本郷右衛門尉殿 四番 萩原甚介殿

五番 西田治部左衛門尉

右人数ニ而、四日廻ニ毎月朔日より廿日迄見廻有へく候、

末之十日ハ馬関田より見廻有へく候、談合仕候、

但吉松境ニ如此中被罷登候砌、柴木ヲ被立置へく見廻

候而被罷帰候刻、噯所へ理り可承候、此番帳次第ニ可

被次渡候、已上、

【正保三年】  
戊正月十一日

噯所判

174の3

【全】

一昨日被仰越候澤原野牧内へ狼入留候様ニ被聞召付候

間、御談合を以狩を可被仰付之由承候、就夫此方よりも

見せ申、何程与可申入由御報申候、為其首尾昨日若キ衆

餘多申付差上せ、墻内細く見せ申候得共、頃者狼も出入

申たる跡も無之由被申来候、併如御存知之野方手廣ク候

条、自然籠居ル事も可有御座候、狩をも可被仰付候する

哉、御談合次第ニ候、於其儀者廻文被成御認候者、主膳

正茂連判可被仕候、為御存知候、恐惶、

【正保三年】

卯月二日

【吉田地頭】

【宗盛】

弟子丸播摩守様  
人々御中

【噯】  
【伊地知彌右衛門】

重延

174の4

【全】

急度令申候、仍澤原野御馬追、来ル十五日たるへく候由

鹿兒嶋より被仰越候、就夫馬籠普請来ル十二日仕度存候

間、各々御噯諸所江御談合被成、如早晚同日ニ調申度

候、自然天氣悪候者、十三日ニ者ふるてる可仕候条、其

御心得を以可被仰付候、勿論棧敷普請も同日ニ諸名へ被

仰渡尤ニ候、

【正保三年】

卯月八日

四人

馬関田 吉田 吉松

御噯衆中

まいる

右之案文ニ而飯野へも遣候、但毛付之事、  
當年者飯野より可被成之由申候云々、

174の5

【全】

今月十五日ニ澤原野之御馬追被仰付候、例年之様ニ罷出、

申目其外之儀無緩可被相調候、若右日限ニ天氣悪候ハ、

可為晴次第候、毎年取駒籠かね候ニ付、為惣奉行嶋津左

【久重】

近将監殿被為差越候間、其所之噯衆老人ツ、被罷出、様

子被承可被任下知候、聊油断有間敷候、恐々謹言、

【正保三丙戌】

卯月七日

山「田」民部少輔「有榮」



174の6

踊 栗野 吉松 吉田 馬関田  
 加久藤 飯野 須木 小林 高原 野尻  
 嘍衆中  
 額「桂」左馬頭「久政」  
 北「郷」佐渡守「久加」

「全」

猶々令申候、栗下村ノ殿役夫持せ申候、日用ちん被  
 下候様、殿役御奉行衆へ被仰理所仰候、已上、  
 態令啓上候、仍澤原野御牧之尾切せ差上可申之由、從御  
 奉行衆被仰付候条切せ進上申候、御引付を以上納相濟申  
 候様ニ御入魂所仰候、馬之尾斤目別紙ニ書立持せ申候、  
 為御存知候、恐惶謹言、

「正保三年」

卯月廿一日

「御厩別當」「廣綱」

大山伊豫守殿

人々御中

四人

174の7

指出  
 一馬之尾六斤者

加久藤

174の8

右者、澤原野御牧之尾、今度御馬追ニ付切せ申候、慥  
 御請取可被成候、以上、  
 (正保三年)  
 戊卯月廿一日  
 四人  
 大山伊豫守殿  
 まいる

差出

一夫老人ハ

栗下村之  
正右衛門

右者、澤原野御牧之尾持せ申候、往來之日用ちん可被  
 下候、以上、

戊卯月廿一日

四人

大山伊豫守殿

174の9

「加久藤嘍格護」  
 書物

一加久藤 惟新様御座被成候時分、親竹内志摩丞行司被  
 仰付候、其後飯野へ 惟新様御座被成候、其内茂我等  
 親不相替、それかし迄も仕候事、

一北山行司郡山傳内左衛門尉、其後今村与左衛門尉・岩崎彈丞當年迄相勤申候事、

一惟新様飯野へ御移之後、加久藤地頭川上公新、其後南郷若狹守殿、五代勝左衛門殿、諏訪仲右衛門殿、伊地知左右衛門殿、右衆御替合被成候、馬関田地頭川上上

野守殿、上井二郎左衛門尉殿、中野越前殿、五代右京亮殿、入来院又六様、伊地知四郎兵衛殿、川上上野守殿、土持平左衛門殿、右衆御替合候得共、終ニ山界牧

殿、〔此書物ニテ考レハ、澤原野牧ハ、惟新公御代ヨリノ牧ト見エタリ、其内之沙汰無御座候、當年繪圖ニ付、馬関田ノ内と堺之始リテ詳ニセス、其處セラレシ年鑑モ詳ナラス〕

者ヲ申請、六度之御符申事、其隠無御座候事、

一前々求广と堺沙汰之時分、有川与左衛門殿、山奉行和田讚岐守殿御越之時、吉田行司・馬関田行司・飯野行司相揃、山之沙汰有之候へ共、其時分加久藤と馬関田

之堺之沙汰無御座候、何も御存知之前ニ候事、

一惟新様彼方へ御座被成候、前之儀者不存候、其後之事ハ何方へも山之沙汰無御座候、後日堺可相濟由繪圖奉

行衆ヨリ承候へ共、別ニ申分無之候、

右之通御沙汰之上ヲ以御濟可被下事奉頼候、以上、

正保三年 三月廿六日

行司 岩崎彈之丞

右同 竹内權左衛門尉

噺 西田和泉

175 一承應三年甲午日記

卯月廿五日 疊

一吉野御馬追有之候事、

176 一元禄三年庚午岩山金左衛門直道老号散木日記

證文

先月十六日、吉野御馬追ニ若キ衆面ニ墨ヲ塗、吳様之

支度仕被罷登候ニ付、被仰渡候趣奉得其意候、私世粹

萬次郎當十二才ニ罷成候、御馬追為見物罷登申候、支

度ハ白キ帷子ニ日之丸卷ツ後ニ付申候、其外別而吳様

177

一元祿四年辛未右同日記

四月廿六日

吉野御馬追、伊集院噯衆稅所半右衛門串目下知被仰付

176の2

之躰為仕儀無御座候、列立申候須田仲左衛門(綱清)證文取候

而差出申候、以上、

『元祿三年』

五月十六日

『岩山金左衛門』  
名印

五番

御与所

證文

岩山万次郎儀、先月十六日吉野御馬追ニ被罷登候、支度者白キ帷子ニ日之丸卷ツ後ニ付被申候、其外別ニ何そ吳様之支度無御座候、私列立申候間能存候、為證據

如此御座候、以上、

『元祿三年』

五月十六日

須田仲左衛門印  
(綱清)

五番

御与所

178

口上覚

候、集者関屋也、金指迄相勤之、  
閏八月十五日  
福山御馬追、百引串目奉行相勤、噯衆愛甲本右衛門・松田七郎左衛門、取駒八ツ半ニ相濟、出口之番相勤之、福山ニ十三日宿ル、わたりニ十四日宿ル、同船鎌田了右衛門殿、同道日高九太夫殿、

(冊子繰込)

『如此正月ノ御式ニカ、リタルコト追々イカ程モアリ』

一四首頭之規式於大唐百丈禪師被遂 勅許、勅謁百丈籤規与題号有之、則藏經之内増部ニ有之候、其外日本道元派之籤規、近代若州小濱之僧新板僧堂籤規、是皆四班四ツ被位ニ而四首頭執行仕候、右四首頭之儀、於禪家第一重立候規式ニ而御座候、尤曹洞宗大本寺於惣持寺茂重立候節專相行申事ニ御座候故、年頭ニ不限、何そ重立候節ハ相行申事ニ御座候、尤上古上方五山之

寺院江 勅使等之節、專四首頭規式被相行儀与申傳候、

一 正月二日當寺江 御直參、又者 御名代之節、四首頭

規式 御開基之砌より茂雖為被行、仲翁様當寺御

任職被遊御座候故、為 御家御繁榮御武運御長久御國

※ 家安全、御代々様ニ茂當寺參學之間江御入參禪為被

遊訳を以、正月二日 御直參又者 御名代之節者先禪

家第一、真之四首頭御規式ニ御入、夫より書院江 御

通被遊、御三献之御規式有之、大般若御頂戴被遊來ル

古例ニ御座候、尤四首頭御規式之儀無断絶、仲翁様

御式禮ニ相替不申候、

※ 『元文五申正月廿八日吉野御馬追かね指之義申出候、

一 福昌寺正月二日 御參四首柱御寄合、住持入院開堂八首

柱之御寄合、御相伴相動來候氏族より相動候覺無御座

候、近年私家差支候節者、御家老衆より被成御勤事ニ御

座候由、川上一学より被申出候事』

(本記事ハ行間ニアリ)

一 右御規式之節、古來 仲翁様より末廣御進物ニ而、御

家老衆江茂扇子拜領有之、其外元日より三日迄諸士江

茂扇子拜領為有之与申訳を以、只今ニ茂其通御座候、

一 當寺浴室之儀、以前者上段之間ニ有之、御規式之節ハ

先 御入浴被遊、四首頭御規式ニ 御入為被遊由候ニ

付、青銅百疋ツ、拜領被仰付來候得共、當分ハ百疋代

拾疋充拜領被仰付儀ニ御座候、

右者、正月二日 御直參又者 御名代之節、四首頭御

規式且又御末廣進上并浴室江青銅拜領之儀相札可申出

旨被仰渡候ニ付、右之通御座候、此以前回祿之節、諸

帳諸書付等燒失仕、申傳候古例右之通御座候、尤燒失

以後三拾年來右通相違無御座候、此旨丈室被承申上候、

以上、

福昌寺副司印

「明和四年」

「亥」正月廿日

丹嶺  
月潭

御記録所

179 「延享四卯十二月」

一年頭椀飯御飾之内兎有之候処、吉貴公御代猪完ニ御

(朱)

飾為被召替由候、本式ハ兎ニ而候、明年頭腕御飾何様ニ可被仰付哉之旨、御包丁人頭申出候由、御納戸奉行申出調、鎌倉流腕飯飾古書付之内ニ、兎被相用候与相見得候、【吉書】總州様御代猪ニ為被召替訳、當座江相知不申候、

『本田新右エ門親良入道玄賀覺書』「兼親女ノ所生ニテ外孫也」

『本田因幡守兼親也』

『兼親之代帖佐』と此方ハ大父以來弓矢ニ而候つるを、さ

ま／＼被仰分候而、無為ニ御なし候て、税所殿・本田

殿ふるまひ的者、修理介殿めされ候而もたしかたく、

帖佐へ御的ニ被參候を、兩人ともに召籠候而、清水、

曾於郡を被渡候へと堅承候、曾於郡ハ心よわく被渡

候、清水椿立なおし城戸をさし、兼親ハ帖佐にてはら

をきらられ候へ、清水之事ハ千代なへとのをとりたて、

よきなく御屋形様の御奉公させ可申由老若若衆一同ニ

被申遣候者、さ様候ハ、本田殿ハ被帰候而我くにした

かい奉公肝要のよし、吉田殿を御使者にて堅承候間【和談】罷

ニテ腕飯【忠廉領】帰、わうはんを五年帖佐ニかゝせ申候、六年めに帖佐よりおひに御移候間、如元かこしまへ御奉公被申候、兼親廿之とし也、

『右ハ豊州家二代修理亮忠廉帖佐平山城ニ居城ノ此、清水城主本田因幡守兼親ト曾於郡城主税所氏ヲ弓ノ事ト名ツケ、謀計ニテ帖佐ニ招寄セ、直ニ兩人ヲ取圍ンテ各ノ領地ヲ渡セトノ事ナリシニ、税所氏ハ禦クニ力足ラス、屈腹シテ曾於郡ヲ忠廉ニ差上タレトモ、兼親ハ竊ニ其事ヲ清水ニ注進シタレハ、老臣トモ相議シ、貴方ハ是非ナシ、腹ヲ召ストモ行キナリニナサレヨ、清水ニ於テハ御息千代鍋ドノヲ取立、城ヲ堅固ニ取構へ、拒ギ戦テモ、御屋形ニ奉公ノ格護ト返答知レケレハ、忠廉ヨリ其レナラバ我等ニ随ヒ奉公セラルベシ、其義ニ於テハ兼親モ清水ニ帰スベシトノ和談、吉田氏ノ取成ニテ相調ヒ、文明十三年、兼親二十歳ノ時ニテ、忠廉ニ隨身ノ契約ニテ清水ニ帰ラレ、其ヨリ文明十八年、忠廉ニ帖佐ヨリ飢肥ニ移ラセラル迄五ヶ年ハ帖佐ニ随從シ居テ、二十五歳ノ年ヨリ本ノ如ク、忠昌公ニ奉公シ、后御家老迄勤ラレタ人也、然ルヲ兼親ノ外孫本田玄賀入道カ筆ニハ、兼親五年帖佐ニ奉公

トモ隨身トモ書ズシテ、碗飯ヲ五年帖佐ニ昇セ申トカキタル

ニテ考レハ、碗飯ヲ進上スルハ臣腹シテ表裏ナキ丹悞ヲ年々

ノ年頭ニ表スル御規式ニハ非スヤ、其故カ小身ヨリハ無キコ

トニテ、尤豪族大家ヨリ進上スルト見ヘタリ、尤本田ハ其以

前ヨリ正月十五日 御屋形ニ進上仕来ノ家ナレトモ、五ヶ年

ハ帖佐ニ奉公シテ、碗飯モ忠廉ニ上ケタルト見エタリ」

181 『吉松士和田佐左エ門藏』

吉書

一可修理神社佛閣専祭奠之夏、

一神者依人之敬増威、人者依神之德添運之事、

一可専勸農調納國々年貢之事、

天福皆来 地福圓滿 天地和合樂 武(◎秀)富長久樂、噫々如

律令、

天文八年己正月十一日

島津相模藤原日新御判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三四〇号文書ト同一文書ナルベシ)

(中表紙)

「御舊式類抄 追補」

『市来野牧

澤原野牧

吉野御馬追

福山御馬追

正月六日初狩』

182 『喜入氏藏』

尚々此方之事、菖蒲之比者、加世田へ可存立覚悟に

社候へ、

先日伊地知より来候市来野之粟毛之事、此間以秘藏雖立

置候、『薩山』『善久』今度藝州凡物語之趣者、從其御望間數被思通候之

間、只今引せ進之候、為父馬被差置候者、可為祝着候、

将亦此程堺目細々敵相働候、雖然於串木野、敵十人計討

取て社候へ、事々期来信候之条、閣筆候、恐々謹言、

「享祿二年比力」  
五月二日

貴久御花押

〔墨引〕  
〔忠俊〕  
撰津介殿

貴久

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二四八号文書・「同附録一」八六五号文書ト同一  
文書ナルベシ〕

183

猶々真幸澤原野之父馬、爰許より可差下之由申つ  
れとも、然々馬不有合候、然者祢占重虎よりあつか  
り候月毛、栗野江召置候、是を内小野寺江被仰付候  
而、澤原野江父ニ可被入候、時分相應ニ而候間、不  
可有御油断候、以上、

好便之条令啓候、京都無矣儀候、奥州之書者伊達逆意ニ  
付て、未静謐之由風聞候、遠園之▽儀候△条、邪心難  
知候、乍去治少様見廻、年内より大寺大炊助差下候、比  
罷上候、彼表之儀何共不被見分躰ニ候、とかく伊達上洛  
之儀者可難成欵与取沙汰之由申候、然者 関白様為 御  
鷹野、日比尾州江被成御働座候云々、  
〔天正十九年〕  
後正月廿日  
〔島津久保〕  
又一郎殿  
義弘御判

〔本文書ハ「旧記雜錄後編二」七三〇号文書ノ抄ナルベシ〕

184

「本田助之丞家藏」

態可致見物之由、先日約束申候へとも、当时者長坐難成  
候、其上當所之馬追前にて候間、旁以見物成ましく  
候、此旨為可申談如斯候、将又其元御馬追ニ付、自當地  
馬乘五六人申付候、是又為御心得候、恐々謹言、

猶以福山之馬追、其方御二所なから御見物候ハてハ  
と申候へ共、御斟酌之様きこえ候、然共是非御覽候  
へかしと存事ニ候、又能見物候ハぬ事残多候へ共、

無了簡仕合候、  
〔慶長十二年〕未ナルベシ  
三月廿六日  
〔春日公〕  
又八郎殿  
〔慶長十一年七月、家久公伏見ヲ御立御下国、翌十二年六月廿七  
日、鷹城御発駕ニテ御上洛ト承レハ、此三四ハ專御在國ノ時ニ  
當レリ〕

〔本文書ハ「旧記雜錄後編四」三三〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

185の1

「義久公年間不知三月廿六日御状」

※ 一駒追御見物有度由承候間、被成御越候へかし云々、寺沢志摩守殿へ宛書、

(本文書ハ一六三号文書ト同文ナリ)

185の2

※ 『此ヨリ以下ハ先日上ケタル御馬追ノ冊ニカキ置ケリ、此件ハ舊典抜書ト題シテ史官ノ雜抄ニアリ、定メテ此ハ 義久公カ 家久公カノ御譜ニ載セ置レ、三月廿六日ノ肩ニ年間不知ト朱カキアルヲ抜カキタルナラント存ルコト也、愚按ニハ決シテ慶長十二年比ニ拾集セシ前後ノ 御書ヤ捻ト同時ノ事ナラント、全文山ノ拜見シタキコト存シ、恐ナカラモ如此ナリ』

(本記事ハ前号文書ノ行間ニテリ)

186

尚々平吉參候へかし、あまり無人衆ニ候、寺沢殿參會候するまゝ如此候云々、  
急度令啓入候、仍今度寺澤殿御會尺、御馬追兵部少輔殿はれたるへく候間、某かめくり野之大月毛御借被成候云々、

【伊勢】貞昌

【福山ナラン】

【福山】

【吉野御馬追ナラン】  
一御馬今年ノ取駒結構馬被下候、外聞不過之候、

一寺澤・五島ノ兩侯ナラン

一御客之御會尺(ニ)付而、從國分可參由 龍伯様御意

(御候之間) (御客之間)

ニ御さ候、直ニ祇候申候、謹言、

【慶長十二年】

【丁未】閏四月廿九日

【此間ノ一字ニテ十二年丁未ニ決定セシ考ハ先日ノ冊ニ申上タルトオボヘ略仕候】

岩城吉左衛門殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」三五一号文書ノ抄ナルベシ、尚一六四号文書トホボ同文ナリ)

187

【川上久國上使附日記】

一寛永十年癸酉諸國江上使被召下候、九州江者小出對馬殿、城織部殿、能勢小十郎殿御下り候、

一御三人被仰候者、比志嶋宮内少家老ニ而候を於種子嶋

切腹させ、其子者當嶋ニ流罪ニ而居候、為何儀ニ而候

哉と御尋候、因幡申上候者、宮内少下地氣任者ニ而云

々、飢肥と庄内之境論ニ付、宮内少諸所へ廻文を遣し、

從庄内狼烟見得候ハ、道具を持牛之峠江續キ可申由

被申渡候処、正月六日飢肥山江初狩仕候を見候而、庄

内狼烟立候を見、野尻・高原・小林などの人数高城ま



【案文留】

て走来候、八木民部左衛門為使上洛仕候、正月三日鹿  
児嶋を立、高城まで参候処、人数を見候而右之人数早  
く返し候へ、於江戸委く可申上ト被申候ニ付、人数罷  
帰候云々、

(本記事ハ「旧記雜錄後編五」六七六号ト同一記事ナルベシ)

好便之条令啓上候、仍正月廿五日書状進上申候ニ申後  
候、正ノ六日朝之九ツ時分ニ、八日町竹内孫左衛門所よ  
り火事出来申候云々、御存知之様【此詞ニテ六日ノ定例知ラル、也】正月六日者初狩にて、  
衆中皆々留守にて候、町之者共ハ七日ノ節句前ニ而薪山  
ニ罷登り、女童迄罷居候故、消申事も不罷成、大火事と  
罷成、何共残多事ニ候、為御存知御注進申上候、恐惶、

【正保二年】

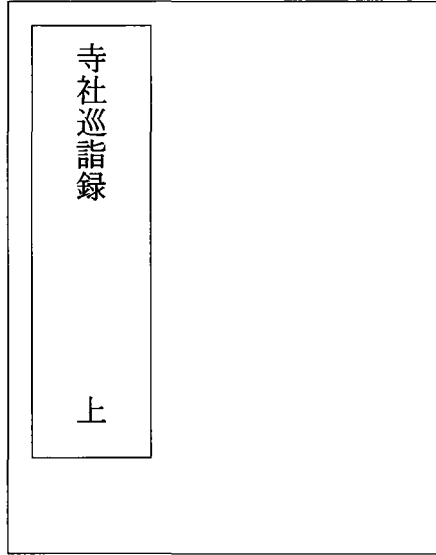
二月六日

四人

伊本右様

寺社巡詣録

(表紙)



(中表紙)

「智賀尾神社在伊集院

○志奈尾神社在隈城

○白羽神社在平佐

下可愛山陵在水引

○紫尾神社在高尾野

○感應寺由来在野田

○加紫久利神社在水出

○箱崎八幡宮在水出

○紫美神社在田籾

寺社巡詣録 上

智賀尾神社、在三府城西五里許、薩州日置郡伊集院郷千

加尾峯名勝考作、餅川上嶺、而其峯見下于

高倉帝承安二年辰壬十二月八日滿家院領主入道西念傳シノブ地

於其子大藏義平書上、東限ニ由須乃木乃中尾大路、北

限ニ加尾峯頂ニ云、即先史白尾氏所レ謂、古之地名而

尾當レ丘云、是也、峯亦同レ丘、奉レ祀ニ神世七代於此峯、

因號ニ千賀尾神、其所レ謂七世、則國之常立神一、豐雲

野神ニ此二柱神、獨神成坐而レ隱レ身也、宇比地迹神、

須比智迹神三、角杵神四、活杵神四、意富斗能地神、大斗

乃弁神五、游母陀琉神、阿夜訶志古泥神六、伊邪那岐

神、伊邪那美神七、此十柱神、各合ニ二柱ニ云一代一也、

而併ニ十二柱神、稱ニ神世七代、見ニ帝皇略譜、故併ニ獨

神、其二柱亦猶二代、崇六所權現、以祀誓尾、其神號見于

四條帝延應二年庚子八月法橋榮尊比志島母尼菩薩房滿家孫太

平女、嫁村上顯重生榮尊、等祈願狀上、如左、

1 正文在比志島氏

滿家院西俣名内八世井浦田島間事、

在三四至限東郡山堺、限南門木山、限北川井山邊多、限西河一

右件田島、石谷阿闍梨曳渡、元者比丘尼菩薩房・同生

阿彌陀佛、阿闍梨之出舉物雖巨多罷負、不致教年

其并(◎号)云々、依之、於彼所者、限永年、於所當米

并萬雜公事・臨時課役等者、自本名主之許留處也、

至于御加地子・地頭米者、令言上於子細、可被

蒙御免欵、然而於彼水田者、早令奉寄(◎ナシ)

誓尾六所權現、令御節供勤仕、奉祈領家地頭御寶

壽年久、兼可被祈郡司名主悉地者也、然則於後

代无他妨、以阿闍梨隆慶、致方々御祈禱、可令

領掌之狀一如件、故以辭、

延應二年庚子八月廿二日

比丘尼生阿弥陀佛判

比丘尼菩薩房判

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一四〇三号文書ト同一文書ナルベシ)

前此、既載三代實錄、其文曰、貞觀二年三月廿日庚

午、薩摩國從五位下智賀尾神、授從五位上井上宮内神社考作三月

月二十一日、事見

清和帝紀、其叙從五位下、莫詳溯乎何歲世、自時

降年三百、千加尾峯見承安二年、其後可七十年、

誓尾六所權現、見延應二年、由神如是久坐中此峯

隣近村亦得神殿名上下、上神殿十八町、下神殿十六

町、見建久八年圖田帳、又社在嶽、故稱嶽村、不

知剋乎何時也、自延應年降百八十一、新建于應

永卅年卯癸九月廿日、見古棟木、檀主名闕、自厥又降

八十年、燬乎野火、於是大宮司姓名不記乃新刻神像十

二長九寸至一尺、竝木立像也、又名勝考云、男鉢六座、女鉢

六座、應觀二世為陰神也、又神社考祀熊野本宮新宮云、不與神鉢合且、有二粗誌背、亦三鉢存、竝書曰

永正三年實丙四月吉日、而棟札亦曰下永正五年辰戌春新中造  
智賀尾六所權現社一字、但此棟札據二名勝考、今則亡  
矣、蓋遷レ自レ嶽、建二於レ麓一今地應レ在此時、其所二燼  
餘一鬼面十頭尚存二寶殿、今觀二其裏、有二字可レ讀、僅  
二面存、乃拾二其字一以寫二于左、

大宮司一面  
如此

伊集院之内神之川一之宮御社

天正 月十九日茂惠

作者泉識房

大宮司一面  
如此安藤左近助

據レ右、天正中猶此末社建於神之川一曰二一之宮、而川  
發二源乎此神嶽、因得二村名、可二併知一焉、蓋追二宮廢、  
藏二面於此、故此社亦有二昔稱一一宮之說、然搜二古証、  
未レ覩明文、疑是二面、由レ在二寶殿誤傳一此說、今不  
取也、又有二古額二枚、其一、長二險一壹尺陸寸、廣玖寸  
捌分、題二智賀尾六所權現、但六闕レ畫、無二他有レ字、

又一、長險二壹尺六寸、廣壹尺、緣二飾四方、以レ銅製、  
字、題二智賀尾六所權現、但六所現三字多闕、今不レ可  
讀、而記二其陰、曰二永正十六年己卯二月廿一日大願主敬  
白、平山與三左衛門尉武紹・柏木源左衛門尉道重・同  
孫六道弘・大宮仕次郎左衛門尉・同八郎左衛門尉・木  
場次郎左衛門尉安重云、自レ時歷二歲一三十五、至二天文  
廿二年癸丑、

貴久公為二國家一有所二祈誓一親為二檀主一新二此社、二  
月廿四日、慶二落成法一、座主法印俊盛撰二上梁文一、時右  
衛門太夫孝久為二地頭、安藤八郎左衛門茂秀為二大宮  
仕、其他大工臼井和泉守家茂、鍛冶有馬次郎五郎澄明  
等與レ焉、自レ厥又歷二百卅年、降二貞享元年一甲、  
光久公為二大檀主、復新二造此社及籠家一字、四月廿四  
日一畫六上梁功成、島津甲斐為二地頭、北郷惣次郎忠  
秋為二願主、長尾主馬景次為二社人、其他嘜及大宮司宮  
苗村太兵衛等與レ焉、後十六年、至二元禄十二年己卯六月、  
久保園門伊右衛門天明八年上疏為此社格  
護人、疑應此子孫也、為二願主一復新二  
籠家一字、二十四日竣レ功、永尾次郎右衛門景次為二社

人、其他大宮司太兵衛等與焉、後四十年、降元文五年<sup>庚申</sup>、

繼豐公為大檀主、新建此社、三月廿一日一字功成、

島津彌一郎為地頭、其他社人永尾式部景珍、大宮司南門彌之介、井上門神介云、自厭險五十年、降寛政二年<sup>庚戌</sup>、社人長尾彌兵衛及苗代川人金李德等、俱造唐猫二疋、敬薦寶前、自其五十八年、至弘化四年<sup>丁未</sup>十二月、庄屋阿蘇半助及村農民等戮力、新造舞殿一字、即今四敷三間茅屋、腰壁舞殿<sup>無天</sup>是也、據此觀之、今寶殿應必元文五年所造宮也、今距其年百廿三年、殆將朽廢、凡高貳間、橫三敷、豎壹間壹尺、構椽於前、四尺五寸、以板葺之、設扉於前、用唐戶於其開闔、而覆其外以茅葺屋、皆無天井、橫五敷二尺五寸、豎二間半、置土間於其四方、而前架<sup>イシハシ</sup>、以通舞殿、懸樋於軒、無用廊下、舞殿亦無拜殿若向拜石階、於戲此社、昔被褒崇乎清和帝之時、由從五位下既叙其上、爾來歷歲一千有三年于今茲<sup>壬戌</sup>矣、凡物之逢時、實其難哉、神猶如

是、況於人間乎、永尾氏世為社人、例祭九月十九日云、粗叙<sup>ソコナリ</sup>所觀、聊為此記爾、

志奈尾神社、今在府城西十二里、薩摩郡隈城鄉宮里村筆坂之上<sup>或稱立山</sup>、華表樹<sup>ツツ</sup>、不懸神額、言傳、舊社距今華表西在五町許、猶稱志奈尾田、按昔非村、建宮里鄉、有田七十町、見于

後鳥羽帝建久八年圖田帳、乃藩

太祖得佛公之時也、而鄉內鎮守崇志奈男社、割時吉田、為此神領、供修理料、<sup>時吉六十九町見于同郡圖田帳、在廳道友為之名主云</sup>自建久後十七八年、迨其地荒蕪、散位紀正家、比地頭於宮里鄉、有所祈願、割私田畠、薦<sup>ス</sup>修理田、事見于

土御門帝建仁四年正家寄進狀、又其呼志那遠田、見于後百廿三年

後醍醐帝正中三年新田宮權執印妙慶割所領地傳其二男滿熊丸書、皆載于左、

3 正本在權執印文書  
卷二卅六通之中、

宮里郷地頭散位紀正家

奉寄進志奈男社修理料田二字井口

參段并長島壹處事

右、件社本給田者、有時吉名田之内、雖然、依下為

件料田荒野之地、已令破懷<sup>(破)</sup>畢、且郷内坐鎮守、何郷

内名頭等不崇奉<sup>(崇)</sup>哉、依之為息災祈禱、奉寄進私<sup>(私)</sup>

田島畢、件田島等令耕作、彼社破懷顛倒令修造、

可被祈願一家息災延命之由、仍奉寄進之狀如

件、

建仁四年二月十日

散位紀

(正家)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二号文書ト同一文書ナルベシ)

4 讓与満熊丸所

一薩摩國宮里郷しなを田耆段、此田者万徳大学殿引状・

性仙房状在之副渡矣、

「外捨餘行不寫于此」

一此外又讓状耆通在之、自筆也、

右兄ともをハ親と思宛憐愍可罷過、兄ともハ又子と  
思て可有哀憐心、是妙慶本意也、聊兄等も不可違  
之、仍讓状如件、

正中參年卯月廿二日

權執印妙慶

前此上右、既被載乎三代實錄、見

清和帝紀、則其文曰、貞觀二年三月廿日庚午、薩摩國從

五位下志奈毛神授從五位上、初叙下位、莫詳其

年、況於垂跡年哉、按白尾國柱名勝考、方刻實

錄、蓋脫戸冠、應訛作毛、如土民不知其然、

尚唱志奈尾、以傳地名、則足為證焉、奉祀住吉

大明神、一説熊野本宮云、本田親胤神社考、祭神不

詳云、井上宮内神社考、載志繩大明神不言祭神、

繩與奈尾因訓近訛云、但其在山田郷云亦誤也、

郷土藤田主膳世襲社司、今問社司、曰寶殿祭神、

或時隱見、神變難測、三鉢四鉢、每祭多異云、季

安開扉而拜神鉢、則銅像二座、其一立像、長壹寸五

分、座幅六分、又一座像、長九分、座幅六分弱、其二

三縣、蓋應<sup>ト</sup>住吉而即底筒男命・中筒男命・表筒男命之三座也、其云<sup>ニ</sup>四縣、莫<sup>ク</sup>詳<sup>ク</sup>崇<sup>ニ</sup>孰神<sup>ノ</sup>增<sup>ニ</sup>之一座、

據高江郷所祭亦云志那尾三社此三縣云足併託焉而自<sup>ニ</sup>正中<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>元祿十五年<sup>ニ</sup>凡<sup>ニ</sup>三百年、其間社傳靡<sup>ナシ</sup>事可<sup>レ</sup>記、十六年<sup>未</sup>七月十八日、

大風拔<sup>レ</sup>樹、民屋悉倒、社亦遭<sup>レ</sup>難、寶永元年<sup>申</sup>八月十八日、大風復<sup>レ</sup>烈、二年秋<sup>乙</sup>蝗荐民飢、雖<sup>レ</sup>欲<sup>レ</sup>建<sup>レ</sup>社不<sup>レ</sup>暇<sup>レ</sup>募緣、至<sup>ニ</sup>三年<sup>丙</sup>戊秋、有<sup>ニ</sup>野田仲兵衛<sup>ノ</sup>・西苑萬兵衛者、<sup>ニ</sup>土戮<sup>レ</sup>力、遂能建<sup>レ</sup>社、頗倍<sup>ニ</sup>舊社<sup>ノ</sup>、八月竣<sup>レ</sup>功、

而上梁文載<sup>ニ</sup>大檀那藤原綱吉公<sup>ノ</sup>、按是時將軍也、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>輕書<sup>ニ</sup>于此棟札、據<sup>レ</sup>云<sup>ニ</sup>藤原、誤<sup>ニ</sup>。

吉貴公可<sup>レ</sup>推知<sup>ニ</sup>焉、其後亦有<sup>ニ</sup>洪水難<sup>ノ</sup>、村民皆患、相俱陳<sup>レ</sup>實、以請<sup>レ</sup>移<sup>レ</sup>社於筆坂上、乃得<sup>ニ</sup>神籤<sup>ノ</sup>、四年<sup>亥</sup>移造<sup>ニ</sup>寶殿於其<sup>ト</sup>地、十一月、遂奉<sup>レ</sup>遷<sup>レ</sup>焉、而舊社址開

墾<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>島、廣輪凡壹段四畦廿步<sup>二十間</sup>、字曰<sup>ニ</sup>日吉<sup>ノ</sup>、又開<sup>ニ</sup>墾志那尾田<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>田、凡壹段壹畦拾三步<sup>二十間</sup>、字仍<sup>ニ</sup>舊名、併稱<sup>ニ</sup>志那尾免<sup>ノ</sup>、永以供<sup>ニ</sup>此神領<sup>ノ</sup>、正徳二年<sup>辰</sup>仲陽、始建<sup>ニ</sup>華表於筆坂下<sup>ノ</sup>、六年<sup>申</sup>三月、大源寺航海追

為<sup>ニ</sup>遷宮記<sup>ノ</sup>、古垣源五左衛門久武、以<sup>ニ</sup>庄屋<sup>ノ</sup>與<sup>レ</sup>焉、

自<sup>ニ</sup>寶永移<sup>レ</sup>社、至<sup>ニ</sup>文政四年<sup>巳</sup>百十五年、

宰相公有<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>祈願、此歲三月、命<sup>ニ</sup>寺社奉行<sup>ノ</sup>、頒<sup>ニ</sup>普聞品<sup>ノ</sup>奉<sup>レ</sup>納于大社名藍、乃廿六日、此社亦預<sup>レ</sup>焉、時奉行傳<sup>レ</sup>旨、與<sup>ニ</sup>社司書<sup>ノ</sup>、曰<sup>ニ</sup>志奈毛神社司<sup>ノ</sup>、故今寶

藏焉、後卅八年至<sup>ニ</sup>安政五歲<sup>午</sup>、舊社既壞、村民募<sup>レ</sup>緣、各戮<sup>ニ</sup>其力<sup>ノ</sup>新<sup>ニ</sup>建社宇<sup>ノ</sup>、九月竣<sup>レ</sup>功、道岡傳兵衛以<sup>ニ</sup>庄屋<sup>ノ</sup>與<sup>レ</sup>焉、上梁文載<sup>レ</sup>改<sup>ニ</sup>神號<sup>ノ</sup>曰<sup>ニ</sup>志奈毛社<sup>ノ</sup>、按非<sup>レ</sup>改、從<sup>ニ</sup>印本<sup>ノ</sup>耳、而今社則建<sup>ニ</sup>四敷三間腰壁茅屋<sup>ノ</sup>一宇、

造<sup>ニ</sup>寶殿於其正面<sup>ノ</sup>、凡高六尺、入貳尺四寸五分、橫三尺、上葺用<sup>レ</sup>板、實<sup>ニ</sup>厨子於其中<sup>ノ</sup>、高九寸五分、橫亦同<sup>レ</sup>之、皆無<sup>ニ</sup>天井及廊下<sup>ノ</sup>、舞殿<sup>ノ</sup>向拜、前入口惟置<sup>ニ</sup>一階石<sup>ノ</sup>、例祭二月三日、謂<sup>ニ</sup>之土開打植祭<sup>ノ</sup>、十二月三日、謂<sup>ニ</sup>之土堅祭<sup>ノ</sup>、此社亦昔被<sup>レ</sup>褒<sup>ニ</sup>崇乎

清和帝之時、一千有三年于今茲矣、有<sup>ニ</sup>宮里名<sup>ノ</sup>、由<sup>ニ</sup>神有<sup>レ</sup>宮可<sup>レ</sup>以知<sup>ニ</sup>焉、今地頭猶不<sup>レ</sup>與<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>宮、惟為<sup>ニ</sup>土民<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>崇敬<sup>ノ</sup>、茅屋蕭然、豈熟<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>憾乎、

白羽火雷神社、在<sup>ニ</sup>府城西十三里、薩摩郡平佐郷白羽村



鄉人避神號作、本田親盈・井上宮内所編輯神社考、白和或白波云、竝祭火雷神云、白尾國柱名勝考、奉祀大山咋命云、而上古既被褒崇於

清和帝之時、事載三代實錄、其文亦貞觀二年三月廿日

庚午、薩摩國從五位下白羽火雷神授從五位上云、先

史國柱質諸古事記和銅五年太朝臣安萬侶著撰曰、大山咋神、一名山

末大神、坐于葛野山城郡名之松尾、用鳴鑄神也、因

稱松尾神社、其云白羽、取諸鑄矢、又曰火雷神、

事見于山城風土記、曰建角身命、扈從

神武帝天降于日向襲峯、將如大和留滯播磨、故祠

室津曰松尾大明神、後適山城坐于岡田之賀茂

祠賀茂大神、娶神野神伊可古夜姬於丹波國、生二

柱神、曰玉依彥、曰玉依姬、玉依姬嘗遊小川、取丹

塗矢流自川上、還置床側、乃孕生男、稍迨其長、

外祖建角身命造八尋屋、豎八戸扉、釀八腹酒、招

集諸神宴飲為樂、凡七晝夜、至其最酣告其子

曰、可進此酒令飲汝父、乃舉酒杯祭以薦天、忽穿屋鸞カ、升騰于天、因象外祖、稱賀茂別雷命、

神名帳作愛宕郡廿一社之一也、而其父丹塗矢祀乙訓郡、

社、即火雷神社云、據此參考、則大山咋神、化丹塗矢

通玉依姬、故或名鳴鑄、而崇其靈、則稱火雷命、

又坐室津建角身命、方自天降將適大和、由覽

有留祠室津云、則平佐亦在所過道、祭神於此、

名其村里亦曰白羽、猶宇治郡有宇治神社、大鳥

郡有大鳥神社之例、應必有謂焉、自貞觀二年

迄天正十五年凡七百廿年、其間社傳無採可觀、

季安意、若搜聞淡谷五家文書、有事是歲丁四月、豐太閤

可取、未可知也、註族他日訂正、來寇吾藩、二十五日進師陣于泰平寺、此地兵燹、

社亦罹難、相傳舊社距今社宇在申方位三町五拾三

間棟札作四町云、白和町千臺川澗、燼後無社十四五年、

至今慶長六年辛丑二月、邑主北鄉三久稱加移于今地、而

新建焉、更造茅堂於其社址今堂四敷二間、址地、縱七間、橫四間半強、安置

木佛阿彌陀佛工無傳、高壹尺七寸、橫五寸五分、蓮臺高八寸、厨子高三尺四寸、橫一尺九寸、寬政七年六月、前田

金之進所造薦云、其後十年、文化元年十二月、白和町役人柳田五

左衛門及年行司小牧清八・渡辺十左衛門等募市人九十二人力、新建此堂云、後四十八年至慶安二年己丑、白羽市人妹尾清

左衛門・田中作右衛門等誠願情、稟于邑主北鄉久

加稱佐及息久盛為大檀主、遂復新建白波神社、九月落成、十一日遷宮焉、後十八年、寬文六年丙午七月修造、見天保二年四月上後又歷三年二十五、至元祿三年庚午、白波寶殿殆復廢壞、於是十一月、新建寶殿、時邑主北鄉久嘉作左衛門為大檀主、而長學坊為座主焉、自元祿後五十五年、至延享元年甲子、社宇又壞、白和市人咸莫不患、由是、募緣廣聚衆力、遂復一新、三月竣功、乃請邑主北鄉久達及息久馮為大檀主、時座主平等寺有壽撰上梁文焉、延享以後至安政二年乙卯踰三十年、神社廢頽、白和市人咸復憂患、借議募建、遍聚衆力、竟能成功、實倍舊社、先是神社皆以茅葺、不用天井、至此特築石壇高二尺、寶殿三數間、高一丈四尺八寸、舞殿數間、高及其廊下、竪竝外葺、瓦、內設天井、實內外厨子內高六尺、橫三尺五寸、外高六尺、橫三尺五寸、向拜高三尺八寸、橫三尺、入一尺九寸、於其正面左右廂、獅子駒、而向西、又附之向拜高壹丈壹尺、入三尺及三級石階、盡階上垂罽口、前距二八間、樹其華表高壹丈壹尺、橫七尺五寸、懸額、懸額高二尺二寸、廣一尺四寸、題白和大明神、開厨子扉、祭神一座、舊

鉢云木座像長六寸見文政七年所呈疏、今座像云長八寸橫五寸、冠服裝束、腰帶太刀長六寸、手持笏二分、服以金箔飾梅鉢紋、似菅丞相像、傍納金幣表書文化甲戌年正月吉日、裏書小牧八郎右、衛門兼置云、社地竪拾壹間、橫五間、例祭十一月三日、平佐臣野崎內藏世為社司、同祈願所平等寺為座主焉、邑主北鄉氏、歲薦米壹斗供祭事云、此社亦一千年前被褒崇於清和帝、今惟為其氏子所尊敬、雖遁茅屋卑、若使能敬神者聞之、曷其無憾焉乎、

紫尾神社、在府城西距廿三里五町餘、薩州出水郡高尾野鄉柴引村、祭神同鶴田鄉紫尾社、奉祀熊野大神、崇一鄉之惣廟云、熊野音唱、同湯谷訓、故自古俗稱湯谷權現祭大己貴命、或熊野三所、而井上宮內神社考、在出水郡紫尾山云、先史親乎規之曰、紫尾山非出水郡、而其山在伊佐郡鶴田鄉紫尾村與出水郡接界之處、故應誤也、而不載祭高尾野紫尾社、本田親盈神社考、雖載紫尾社於高尾

野、亦不言祭神、然鶴田郷、則載古紫尾三所權現、祭神同熊野權現云、詳載鶴田、今窺寶殿、無銘可觀、木面五存、書其一裡、恭薦紫尾三所權現、所祈願意、為丸田掃部介息災延命、光永二年庚辰二月願主敬白、奈島作之云、今按年契、無此年號、上知識村箱崎社亦有奈島軍兵衛尉所薦面、書弘治三年丁巳三月、與此奈島若一人、則誤弘治二丙辰亦未可知也、自弘治後五十八年、至慶長十八年癸丑、新建寶殿、十一月竣功遷宮、仁禮左近將監景頼以地頭與焉、事見棟札云、今寶殿無此棟札、但此年月有書三面裏、奉寄進有馬與八左衛門云、應是同時也、別有四面、慶安元年戊子九月、宮原伊右衛門・内善右衛門為立願云、又有獅子駒觀其腹、寛文十一年七月、作者正左衛門、座主福性院快意云、懸額正面、題紫尾權現宮、寶永孟秋、施主淵上良幸恭薦云、又書別獅子、元文五年庚申閏八月、苗代川朱傳南作及其同族四名恭薦云、後六十五年、至文化二年乙丑舊社廢壞、請寺社廳受其合

力、新造寶殿上屋、四月落成、時三州府君齊宣公為大檀主、地頭島津波門及郷土年寄出水惣右衛門・稅所越右衛門・岩永善助・白男川郷左衛門、社司鬼塚・岩尾等、各以職與焉、即今社宮此云、入仁仁門行貳町五拾六間而通華表、過拾六間敬陞拜殿、皆以茅葺、内無天井及向拜、而盡石階詣拜殿、舞殿一座、進通廊下三尺敬陞寶殿、外陣五敷三間、内陣四敷二間、用板葺宮、覆用茅屋三間、安置木佛彌陀・藥師觀音立像長二尺一寸為之本地、今無神領、然千年前被褒崇于清和帝之時、見帝實錄、其文曰、貞觀十年戊子三月八日壬寅、授薩摩國正六位上紫美神從五位下、可下觀此以知時之威德也、按方其時稱紫美神、有兩社於薩摩國、本田親盈神社考、以下貞觀八年授從五位下神、為此社事、今季安按、據祭鶴田一神曰古紫尾、而其村名紫尾、則八年授位、應必係鶴田社也、郷土白川氏昔為神戶、今鬼塚多門世移社地、補其社司、隣有寺地、曰紫尾山宮司寺福性院、掌

座主職、立彌陀木佛、為寺本尊、座像長壹尺、作者無傳云、寺領僅

食壹斛陸斗、產乏廢久、寬永十五年募緣新建、僧順

正董席、其後又廢、至天和中、快慶中興、寂于貞享

元年六月二、舊雖大乘枝院、迨享保六年

吉貴公建幸善寺、由修法務有、所不<sub>レ</sub>足命、屬

其末寺、帶祈願所、雖仍其舊、以屢廢絕、竟罷社

事、今無所預云、然今尚世住此社地、山號紫尾、

寺名宮司、則為座主寺、明證孰大焉、而不預社

事、可謂背名義矣、速復舊式、以掌座主不亦

宜乎、例祭九月廿八日神社考作廿九日、神社撰集作廿九日、官粟歲給米

三斗五升、供其祭事、鄉人亦薦三斗五升、以助之為

例云、至文政四年<sub>巳</sub>三月廿六日、

宰相公有祈願、頒普門品、奉納于大社名刹、此

社亦充其列寶藏焉、

賀紫久利神社、在下府城西距廿五里、薩州出水鄉下鯖淵

村之平松、昔

文德帝之時、既預於官、見帝實錄、其文曰、仁壽元年

未六月戊午、以薩摩國賀紫久利神預於官、後十年、  
至

清和帝又被褒崇、見三代實錄、其文曰、貞觀二年庚三

月廿日庚午、薩摩國從五位下賀紫久利神授從五位上、

後又六年、同七年<sub>酉</sub>五月廿五日、授薩摩國從五位上

賀紫久利神正五位下、翌八年<sub>丙</sub>四月七日辛巳、授薩

摩國正五位下賀紫久利神正五位上、亦見實錄、其後

歷三十二年、迨

醍醐帝延長五年勅左大臣藤忠平等撰延喜式、載神

名帳、其文曰、薩摩國出水郡一座小加紫久利神社云、

是也、延長以後至慶長四年<sub>己</sub>、

惟新公忠恒公還自朝鮮、復封出水郡、凡六百七

十年、其間社傳無採可記、迨同八年與

神祖和成、

兩公就封、始謁此社及箱崎宮、時池上次郎右衛門者

世為社司、

惟新公乃割田祿三拾斛、薦為神領、雖池上世充神

戶、以材不<sub>レ</sub>堪罷其任職、更命帖佐土野村兵部移

補正祝子、又移眞幸士黒木佐傳太夫、為二權祝子、轉二帖佐山田正田院快譽二任、其座主、各皆奉三祀焉、時命快譽撰地於出水建祈願寺、慶長五年八月、快譽乃新建成願寺、為祈願所、賜祿八十石、資寺座、後至元和五年收三分二、減食二十六石、而追下

忠恒公在京師、與吉田氏語、得審聞、加紫久利神即載于式、薩摩國二座内、為出水郡一座小、特起二敬心、益念二微祿、薦三拾斛、復加二神領、併前為二六拾石、其後至元和五年、相國用不足、遍命三諸士、四三分其祿、令各收之其一、亦薦此社、神領如故、社地周廻凡拾八町三拾間、廣輪廿三町五段、今尚無退轉云、而追寛永元年甲、

公狩二田布施、有患中喉氣、社司黒木傳太夫等覩蛇纏、神像頸死乎寶殿、驚以告地頭樺山美濃守久高、乃使黒木傳太夫等馳程以報其實、

公聽益感其神德、乃有誓願、忽得靈驗、病全平癒、是翌二年丑、

公命有司新造神殿、前此小社、以茅葺屋、至此公親為二施主、頗倍二舊社、九月廿六日落成遷宮、樺山

美濃守久高・同采女正久貞為二地頭、吉利下總守忠張・阿多加賀守忠榮為二作事奉行、以上四人皆書島津、衛門尉寫貞・伊尻和泉守祐永・河野伊與介通榮等各任職預焉、時成願寺快盛為二之導師、事見三棟札云、今則亡矣、然二面尚存二内陣、有墨書、曰寛永二白乙丑九月廿六日云、即遷宮日、則應刻其時者也、自時歷歲凡二十二、至正保三年丙、

光久公之時、命地頭山田民部少輔有榮新建寶殿、七月廿三日竣功遷宮、

公及世子久平公時年十九歲後改綱久公、為二大禮主、地頭山田有榮及地頭代山田主計助有真有榮弟也、再興奉行伊藤壹岐守祐昌・八重尾休兵衛重良・愛甲文殊坊等預事、成願寺主僧快壽為二遷宮導師焉、自是歷歲又二十一、至

寛文六年丙、四男修補寶殿、三月廿八日竣功遷宮、

光久公命地頭山田民部有盛有榮、補寶殿、三月廿八日竣功遷宮、

公及世子綱久公為二大禮主、府士今井與三左衛門為二再興奉行、郷土石塚彌一右衛門祐尚為二檢者、二階堂

右衛門行盛・二宮次郎右衛門宗恒・是枝林兵衛良昌竝為嘜、成願寺主僧快傳為導師焉、自是經年又二十一、至貞享三年丙寅、

光久公命地頭肝屬主殿久兼等修造社殿、八月十九日功成遷宮、

公及世嫡孫綱貴公世曾孫忠竹公時年十二歲後改吉貴公為三大

檀主、地頭肝屬久兼、地頭代本田次郎左衛門苞親・相良與左衛門長種、再與檢者大野正右衛門久種等、及嘜

山田吉左衛門有相・是枝七兵衛忠清・関屋千左衛門重治・伊藤與右衛門祐壽・二宮次郎右衛門宗賀、社司黒

木左京進屋親、大宮司河上清右衛門久貴與焉、後十二年、迨元禄十年丁丑官徵譜課、六月祠官黒木左京有

所呈疏、其略曰、昔年神社罹火、宮殿以下末社及本地堂悉蕩燼、而古縁紀皆為有、惟所燼餘神躰及

稱本地毘沙門今僅存焉耳、第一宮祭大神宮、第二宮祭宇佐明神田霧姫命・住吉三神・神功皇后、而毘沙門為本地云、其後歷歲廿四、至享保五年庚子、初貞享中

光久公加修補時、

吉貴公僅十二歲既預其事、今也

公年四十六、以為、此社薩州宗社而所世尊崇也、然未可謂竭誠以極中巧麗焉、乃有所念、秋起其

功、擇材鳩工、以盡善美、新建社殿、翌六年辛丑告竣、大倍舊社、七年壬寅三月、命三府下抱眞院主僧盛養為導師、率許多僧侶來行遷宮法、時

公為三大檀主、而地頭種子島彈正久基、寺社奉行新納左京久敦、普請奉行尾上甚五左衛門・西俣五納右衛門

等各預焉、後十七年壬子二月、幸善寺二世主僧有敬追撰上梁文、是歲五月、

公命先史島津六十郎季明敏之・町田權兵衛俊懿等查議此社縁起及本地、因俊懿等採元禄中祠官所呈疏、質諸府下大宮司本田甚次・井上宮内、皆曰、本社祭應

神天皇・神功皇后二神及住吉大明神即底筒男命・中筒男命・表筒男命也・日輪太神宮或云姫太神即天照太神・宇佐明神是瑞津姫命・田霧姫命、而

因三山名號加志久利大明神、其山或名加世久利山、世與志、以三五音通自昔唱來云、時抱眞院盛養還自

遷宮、陳其所觀、乃對問曰、加志久利大明神在彼地聞、崇住吉大明神、而寶殿中尊今祭男躰女躰

彼地聞、崇住吉大明神、而寶殿中尊今祭男躰女躰

二神、左脇小寶殿祭女躰三神、右脇祭本地昆沙門、其他朽廢木像數躰散在內陣、莫詳孰神、而加志久利神號亦聞為山名云、據此、盛養所謂中尊二神、應是應神天皇・神功皇后也、又末社女躰、應是湍津姫命・田霧姫命・市杵姫命三女神也、然則與宮內等說能符合焉、但太神宮及底筒男命・中筒男命・表筒男命併崇住吉者、今皆亡乎寶殿、若昔併太神宮及住吉三神崇加志久利神社、則其神像既亡乎朽廢、亦未可知也、又按神社考、撰州住吉祭神四座、第一天照太神、第二字佐明神、第三住吉三神、第四神功皇后云、又云、天慶三年十一月、撰州住吉人士師某修昆沙門法於住吉神官院、祈降藤純友、明年五月、純友伏誅、此社祭住吉及昆沙門、亦疑據此等所追附乎、其云本地難遽決云、二十五日、俊懿等拜呈焉、其後本田親盈・井上宮內所編集神社考、竝此祭神本社應神天皇・神功皇后、第一宮天照太神、第二宮三女神、第三宮住吉三神云、國柱名勝考、亦奉祀住吉大神、相殿天照大神・三女神・應神天皇・神功皇后

云、昔神后之征三韓也、假住吉威稜、或其乎熊襲也、至山門懸誅油津姫等、則其崇社此、亦疑應在其時云、而今上鯖淵村有地名曰加紫久利山、或加世久利山、鄉人俗曰箭筈嶽、距今社一里餘、在薩肥界、陰陽對峙、分為二岳、而其陰岳屬肥後國、嶽稍卑、而陽岳屬薩摩國、頂建小社、曰矢筈權現、從肥後膽恰似箭筈、檜垣集作箭越山、其云聞諸鄉吏、祭須佐男命・猿田彥命・水分命、崇銅像三座、曰矢筈嶽大權現、貞享二年乙丑六月、飯隈山修驗徒春日尊壽院為願主手彫刻云、其後追享保九年初夏、旱久不雨、修驗徒全明院讀經于神社、以祈雨凡一七日、至滿願日大雨沛然民咸歡喜、七月記板納社、元文二年九月、新造社殿、祈繼農公及世子又三郎公延命、地頭島津支著貴備、地頭代平田庄藏憲正、金藏院有惠為導師焉、寛政元年九月、又新建社宇、祈齊宣公及中將老公武運、地頭島津伊賀久金、地頭代柏原彌太右衛門、社司黒木右近、各以職預事、社人自昔有所言傳、往古皇倭分三十六國之時、加紫久利山在薩肥境、故崇此神、為薩摩宗社云、今季安按書記、則成務帝四年始定國造、六年始分國境云、參採考之、應在此六年分國境之時也、而鄉人古來尊此神社曰薩摩國宗廟、至此八年卯正月、國老種子島彈正久基承

吉貴公旨、命<sub>レ</sub>寺社奉行<sub>ニ</sub>罷<sub>ニ</sub>宗廟號<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>唱<sub>ニ</sub>宗社<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>享保六年<sub>辛丑</sub>、

公造營盡<sub>レ</sub>美能成<sub>ニ</sub>其功<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>明和九年<sub>一</sub>五十二年、社殿<sub>ヲ</sub>復<sub>ス</sub>又<sub>レ</sub>朽廢、且<sub>ニ</sub>自<sub>レ</sub>往<sub>ニ</sub>古<sub>一</sub>寶殿內陣無<sub>ニ</sub>鑰可<sub>レ</sub>鎖<sub>一</sub>、士庶暢<sub>ニ</sub>拜<sub>一</sub>、動<sub>ニ</sub>恣<sub>一</sub>出入<sub>ニ</sub>至<sub>レ</sub>瑕<sub>一</sub>乎<sub>ニ</sub>功麗彩飾<sub>一</sub>或<sub>レ</sub>傷<sub>ニ</sub>獅子駒等<sub>一</sub>、

以<sub>レ</sub>故<sub>ニ</sub>別當幸善寺九世主僧快嚴就<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>司<sub>一</sub>、請<sub>ニ</sub>新<sub>一</sub>建社殿<sub>一</sub>設<sub>ニ</sub>組戶<sub>一</sub>於<sub>ニ</sub>內陣<sub>一</sub>禁<sub>ニ</sub>漫<sub>一</sub>出入<sub>一</sub>、

官命許<sub>レ</sub>之、遂<sub>レ</sub>復<sub>ニ</sub>新建<sub>一</sub>、悉<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>請<sub>一</sub>、八月起<sub>レ</sub>功<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>冬落成、時<sub>ニ</sub>三州<sub>一</sub>

太守重豪公為<sub>ニ</sub>大檀主<sub>一</sub>、國老兼地頭島津左中久金、國老二階堂主計行且、寺社奉行町田監物・高橋縫殿、普請奉行岸良彌右衛門等預<sub>レ</sub>事焉、今宮殿此云、其詣<sub>ニ</sub>社也<sub>一</sub>、入<sub>レ</sub>自<sub>ニ</sub>仁王<sub>一</sub>、名<sub>ニ</sub>宮園衛<sub>一</sub>行<sub>ニ</sub>四町卅間<sub>一</sub>通<sub>ニ</sub>華表中<sub>一</sub>

高竈丈七尺朱塗柱、無額、過<sub>ニ</sub>壹町卅九間<sub>一</sub>、左右建<sub>ニ</sub>隨神祠<sub>一</sub>、進入<sub>ニ</sub>圍

垣<sub>一</sub>、而盡<sub>ニ</sub>石階<sub>一</sub>、進入<sub>ニ</sub>向拜<sub>一</sub>向<sub>ニ</sub>西<sub>一</sub>、敬<sub>ニ</sub>陞<sub>一</sub>拜殿<sub>六鋪</sub>及<sub>ニ</sub>舞殿<sub>一</sub>

六敷、又通<sub>ニ</sub>廊下<sub>一</sub>、三敷外陣椽、恭開<sub>ニ</sub>組戶<sub>一</sub>而窺<sub>ニ</sub>內

陣<sub>一</sub>、設<sub>ニ</sub>閣<sub>一</sub>於<sub>ニ</sub>寶殿<sub>一</sub>、三間正面分<sub>ニ</sub>宮<sub>一</sub>、中尊<sub>ニ</sub>二神<sub>一</sub>、則應

神天皇・神功皇后崇<sub>ニ</sub>于一座<sub>一</sub>、左脇<sub>ニ</sub>三神<sub>一</sub>、則湍津姬

命・田霧姬命・市杵姬命竝崇<sub>ニ</sub>一座<sub>一</sub>、其右脇稱<sub>ニ</sub>本地<sub>一</sub>安<sub>ニ</sub>置昆沙門<sub>一</sub>、而他二座所<sub>レ</sub>崇<sub>ニ</sub>天照太神<sub>一</sub>・住<sub>ニ</sub>吉三神<sub>一</sub>四軀

尊像、今全不<sub>レ</sub>座<sub>ニ</sub>寶殿<sub>一</sub>、昔享保中遷<sub>ニ</sub>宮時<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>異<sub>ニ</sub>乎<sub>一</sub>抱眞

盛養所<sub>レ</sub>觀<sub>ニ</sub>而言<sub>一</sub>者、實<sub>ニ</sub>一百四十年<sub>一</sub>于茲<sub>一</sub>矣、今訪<sub>ニ</sub>社人<sub>一</sub>及<sub>ニ</sub>別當等<sub>一</sub>、皆<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>其三女神<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>住<sub>ニ</sub>吉三神<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>昔祭來、

無<sub>レ</sub>獨辨<sub>ニ</sub>其軀異<sub>一</sub>于<sub>ニ</sub>男女<sub>一</sub>者<sub>一</sub>云、今季安恭拜<sub>ニ</sub>神像<sub>一</sub>、皆女軀、而其一背有<sub>ニ</sub>墨書銘<sub>一</sub>、文龜二年五月三日、大願

主安部貞作云、又有<sub>ニ</sub>牛面<sub>一</sub>、今觀<sub>ニ</sub>其裡<sub>一</sub>、如<sub>ニ</sub>燼餘<sub>一</sub>然、但於<sub>ニ</sub>其中<sub>一</sub>僅可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>長祿若六月字<sub>一</sub>焉、併採推<sub>レ</sub>時、

概係<sub>ニ</sub>薩州家二世國久<sub>一</sub>・三世重久之時、而自<sub>ニ</sub>長祿<sub>一</sub>至<sub>ニ</sub>文龜二年<sub>一</sub>、踰<sub>ニ</sub>四十年<sub>一</sub>、則昔權<sub>ニ</sub>火云應<sub>一</sub>在<sub>ニ</sub>其間<sub>一</sub>、而舊

社址距<sub>ニ</sub>今社地<sub>一</sub>在<sub>ニ</sub>山方五町廿間<sub>一</sub>許建<sub>ニ</sub>山神<sub>一</sub>處<sub>一</sub>云、今名<sub>ニ</sub>狩樂<sub>一</sub>、據<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>、文龜二年、蓋應<sub>ニ</sub>移<sub>一</sub>今地<sub>一</sub>新建、刻<sub>ニ</sub>三

女神<sub>一</sub>之年<sub>一</sub>也、然則當時社人、應<sub>ニ</sub>陳<sub>一</sub>其實<sub>ニ</sub>新崇<sub>一</sub>四軀<sub>一</sub>以行<sub>ニ</sub>祭祀<sub>一</sub>當然理<sub>一</sub>也、而徒歷<sub>ニ</sub>歲<sub>一</sub>、踰<sub>ニ</sub>三三百<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>曾

及<sub>ニ</sub>陳<sub>一</sub>其實<sub>ニ</sub>稟<sub>一</sub>白<sub>ニ</sub>官府<sub>一</sub>、故迄<sub>ニ</sub>今<sub>一</sub>尚<sub>ニ</sub>因循<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>違<sub>一</sub>名實<sub>一</sub>行<sub>ニ</sub>其祭祀<sub>一</sub>、豈孰無<sub>レ</sub>憾<sub>ニ</sub>焉<sub>一</sub>乎、故正<sub>ニ</sub>座主成願寺<sub>一</sub>、自<sub>ニ</sub>義虎時<sub>一</sub>兼<sub>ニ</sub>帶<sub>一</sub>此社及箱崎八幡、而金藏院為<sub>ニ</sub>權座



主、至下慶長五年

惟新公移三正田院快譽、相<sub>ト</sub>攸<sub>ト</sub>於多寶・成願兩寺間一建<sub>中</sub>祈願所、新建<sub>二</sub>成願寺、此社別當雖<sub>レ</sub>仍其舊、迨<sub>下</sub>享保六年、

吉貴公新<sub>二</sub>建此社、移<sub>三</sub>幸善寺<sub>一</sub>為<sub>中</sub>別當寺<sub>上</sub>、舉<sub>三</sub>金藏院<sub>一</sub>為<sub>二</sub>座主寺、幸善寺乃大乘枝院而在<sub>二</sub>隅州栗野、寺既廢久、

吉貴公移<sub>三</sub>之出水<sub>一</sub>新<sub>二</sub>建社側、其年十月、請<sub>三</sub>京師智積院僧正快存<sub>一</sub>為<sub>二</sub>中興開山、未<sub>レ</sub>幾退<sub>三</sub>栖於京、故翌七年、遷<sub>二</sub>安養院卅四世有<sub>敬力</sub>、暫帶<sub>三</sub>原住<sub>一</sub>董<sub>二</sub>二世席、因號<sub>三</sub>

加紫久利山惣持院幸善寺、補<sub>二</sub>社別當<sub>一</sub>永隸<sub>三</sub>智積院末寺、列<sub>二</sub>門首法流地、以<sub>レ</sub>故嵯峨大覺寺宮、特降<sub>三</sub>恩命<sub>一</sub>

兼帶其院家莊嚴院、故是年十一月、僧正知興、授<sub>三</sub>有<sub>敬力</sub>敕書<sub>一</sub>以傳<sub>レ</sub>旨焉、權祝子黒木氏、迨<sub>下</sub>寛永中移<sub>中</sub>野村兵部於府下、命<sub>二</sub>黒木<sub>一</sub>為<sub>三</sub>正祝子、今社司黒木佐渡其後

云、例祭二月三日・八月朔日・十一月三日、謂<sub>三</sub>之大祭、薦<sub>二</sub>御供酒、奏<sub>三</sub>神樂、凡每<sub>二</sub>大祭、輒<sub>レ</sub>地頭代必撰<sub>三</sub>公位一代<sub>一</sub>謁于社、竣<sub>二</sub>小憩于社司宅<sub>一</sub>為<sub>三</sub>舊式<sub>一</sub>云、其他

為<sub>二</sub>小祭、正月元日<sub>一</sub> 薦御、同二十日 行司一名。山見舞

等預<sub>三</sub>、二月朔日<sub>一</sub> 注連、三月三日 餅酒、五月五日 粽、七

月廿八日<sub>一</sub> 亦注、九月九日 薦御、十月廿日 亦繫符、薦<sub>二</sub>亥日餅、十一月朔日<sub>一</sub> 亦注、十二月廿九日夜祝<sub>二</sub>御戶<sub>一</sub>、薦年

重餅、皆資<sub>三</sub>神領租入<sub>一</sub>云、為<sub>二</sub>其齊<sub>一</sub>建<sub>二</sub>御供所<sub>一</sub> 四敷、其造料出<sub>三</sub>

左之側、其費亦出<sub>二</sub>官庫、次有<sub>三</sub>籠所<sub>一</sub> 四敷、其造料出<sub>三</sub>寺社廳云、今窺<sub>二</sub>內陣、諸所<sub>一</sub>寶藏<sub>二</sub>有<sub>三</sub>御太刀等<sub>一</sub>、寶

永二年、吉貴公御太刀一振 上村阿波守・藤原家、網於<sub>二</sub>櫻州大坂<sub>一</sub>作<sub>レ</sub>之、三年國老新納市

正久珍祈<sub>二</sub>公及世子御武運<sub>一</sub> 薦<sub>二</sub>太刀一口<sub>一</sub> 波平、四年

公又薦<sub>二</sub>一口 忠和泉守、及御幡二流・金幣一振、又及<sub>三</sub>

世子鍋三郎君 繼公薦<sub>二</sub>金幣、皆年月闕、享保六年 公告<sub>レ</sub>老、

繼豊公襲<sub>レ</sub>封、十四年十二月、納<sub>二</sub>徳川氏<sub>一</sub>行<sub>二</sub>婚禮於芝守宮、是為<sub>二</sub>竹姫君、竹姫君有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>祈願、薦<sub>三</sub>此社<sub>一</sub> 葵紋小幡二流、亦闕<sub>三</sub>其年月、其他 國母月桂君<sub>一</sub> 於須、磨君等所<sub>レ</sub>薦有<sub>三</sub>御簾・鯛口・金

燈爐・御幕之類、皆無、年月、寛延二年

重年公立襲封、薦ス此社十字章白幡二流、亦年月朔、

寶曆十三年未、

竹姫君既寡居、號淨岸院君、是年五月、復薦御幡二

流、葵紋如前、文化五年二月、

齊宣公手書所詠歌、納大社名寺、此社亦命寺社奉

行、授三首於幸善寺、以充寶什、乃花久盛神垣に咲ふ花ハ外よりわきて盛や

久しかるらん、花春友色に香にめつる心の幾春か、寄花祝毎

やかとせの末かけて見む、之三首也、十四年丑、

公既告老、四月朔日、復撰

夫人蓮亭君丹羽侯女遺詠三首、秋風に峯のむら雲吹はれて 露に染めしき

くの梢もこのころハお、この宿に猶すみ初てことしよ、亦授幸

善寺、同傳社寶、而每其授給金各三星云、文政

元年寅九月、國母寶鏡君稱於八百君、有祈願、薦額

懸于社壁、四年辛巳三月廿六日、

齊興公頒普聞品納大社名寺、命寺社奉行、授幸

善寺亦藏社寶焉、

箱崎八幡宮、在府城西距廿四里、薩州山門院出水郡出水

郷上知識村之宮内、奉祀饗田別尊亦名大柄和氣尊、追尊

神功皇后、應神天皇、應神天皇一説祭神三座

武内臣云、註備考、一郡崇敬、為出水・野田・高尾

野・長島・阿久根五郷之惣社云、抑此本社在筑前國

那珂郡或博多郡、地近博多、諸社、緣記云、昔有赤白幡

各四流降自虚空、故建此社、祈伏異國、埋其箱

於社之東側、栽松為標、因號箱崎八幡、而其末社

祈平位殿・櫻位殿・住吉現王云、又一説、延喜廿一

年辛巳六月廿一日、

醍醐帝勅建宮桂於箱崎松原、祈新羅降伏、書旨于石、

永置座下、或書戒不知孰是、而其建社于此、則自昔

傳稱、迨

太祖得佛公就封三州、過博多洋上、遽遭暴風、舟楫

將摧、公抽丹悃、有祈願、乃得奇驗、竟得

能着山門院、繇是創建此社於野田新御堂、薦田八

町、為其神領、既而又移于出水名護浦、或今和泉、

皆方祭事、每其三騎行、鑿流馬、輒有不便、故移

今宮内云、自太祖就封至

道鑑公時、世居木群城若屋地村、而

道鑑公使、其次弟實忠分家族、以領出水、因氏和泉、

改忠氏稱三郎兵衛尉、建武中仕于幕府、與高師

泰等為侍所奉行、生男忠直、稱右衛門兵衛尉、方

道鑑公陣于波平、伐谷山郡司、郡司亦及弟祐玄等

陣于牛落、却絶後路、時忠直在出水聞公危、

馳自出水、伏兵松林、單騎呼出接戰、祐玄、竟斬

其首、救公陣營、振名乎世、而五世相繼、至應

永中又四郎直久戰死川邊、和泉氏滅、其後九代大

岳公亦使次弟持久分族領出水地、享德二年西移居

出水、改名用久稱薩摩守、是為薩州家別祖、二世

國久新建此社、事見棟札、文字磨滅、莫詳年月、

然據國久逝于明應七年、自時大抵六十年至弘治三

年、丁、奈島軍兵衛者新刻二面、三月記事懸于寶殿、

其後五年為永祿四年辛酉、座主愛染院勢春、有感

夢想、囑吉永主馬允包和、新彩飾藥師像、二月廿

八日告竣、勢春誌事乎背、翌五年壬戌、六世陽久後改

先、是嘉吉二年感應寺勸進帳亦陽久見卷首、則元祖用久時也、  
自其逝至永祿五年得百四年、据此皆應各一人也、新

建寶殿一字、九月十五日落成遷宮、陽久為大檀主、

猿渡伯者守信元・市來民部大輔家諸・竹田越中守良純

為時奉行、田野出雲守祐之為地頭、築瀨右衛門太輔宗

直・遠矢下總守賢通為木屋奉行、狩野縫殿助永吉彩

飾其扉、今泉寺淨藏院照圓為導師焉、又翌六年癸

陽久復為檀主、造建神庫於此寶殿、奉行三名如前年、

九月廿日告竣、原田紀伊助經一為地頭、市來美作守

家弘為木屋奉行、皆與焉、後六年為十二年己巳、九

月薦二面一頭、施主名闕、又後三年元龜三年壬申、陽久

及其女為檀主、新彩飾本地阿彌陀像、九月告竣、此

月又薦刻面懸于寶殿、願主次郎九郎云、姓氏無

考、後除廿年至天正廿年辰壬、大前道良薦鏡一面、

有佛座像、八月納社刻事于裏、其後八年慶長四年

己亥、薦佛座像鏡一面、九月廿五日納于寶殿、願主

藤原信豐云、莫詳為誰、後十三年同十六年辛亥、刻

面二頭、二月懸社、願主無考、翌十七年壬子、

家久公為大檀主、修造寶殿上葺、九月落成、後卅三

年至正保元年甲申、

光久公及 世子久平公為<sub>二</sub>檀主<sub>一</sub>新<sub>二</sub>建寶殿<sub>一</sub>、四月告<sub>レ</sub>竣遷宮、時地頭山田民部有榮、再興奉行愛甲眞蓮坊久通・壹岐舍人秀晴・池袋九左衛門宗弘、噯伊藤壹岐祐昌・指宿内藏助忠易・阿多加賀忠榮等皆以<sub>レ</sub>任預<sub>レ</sub>事、

成願寺快壽為<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>焉、後廿六年為<sub>二</sub>寛文九年<sub>一</sub>己酉、

光久公復<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>世子綱久公<sub>一</sub>修<sub>二</sub>造此社<sub>一</sub>、九月告<sub>レ</sub>竣行<sub>二</sub>

遷宮法<sub>一</sub>、兩公為<sub>二</sub>大檀主<sub>一</sub>、地頭町田勘解由忠代、再興奉行知識五左衛門兼定・宮内彦左衛門吉定、噯是枝林兵衛良昌・二階堂右衛門行盛・面高主馬俊昌等各以<sub>レ</sub>

職預<sub>レ</sub>事、成願寺快傳為<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>焉、其後廿年至<sub>二</sub>貞享五

年<sub>一</sub>戊辰即元禄元年、修<sub>二</sub>造此社<sub>一</sub>、三月告<sub>レ</sub>竣二日遷宮、

綱貴公及 世子忠竹公<sub>吉貴公也</sub>為<sub>二</sub>大檀主<sub>一</sub>、時地頭肝付主

殿久兼、地頭代本田次郎左衛門包親・相良與左衛門長

種、噯山田吉左衛門有相・二宮次郎右衛門宗賀・伊藤

與右衛門祐嘉・是枝七兵衛忠清・関屋千左衛門重長、

各以<sub>レ</sub>職與<sub>レ</sub>焉、其後歷<sub>レ</sub>歲五十二、至<sub>二</sub>元文四年<sub>一</sub>己未、

繼豊公及 世子宗信公為<sub>二</sub>檀主<sub>一</sub>新<sub>二</sub>建寶殿及兩隨神宮<sub>一</sub>、

二月竣<sub>レ</sub>功、地頭島津玄蕃貴備、寺社奉行肝付典膳兼

達、地頭代平田正藏憲正、寺社方取次愛甲源太夫季平、檢者佐伯善之丞惟貞・伊集院次太夫俊長、噯八重尾三左衛門良泰、皆以<sub>レ</sub>職與<sub>レ</sub>焉、自<sub>二</sub>時卅四年<sub>一</sub>為<sub>二</sub>明和九年<sub>一</sub>壬辰、

重豪公為<sub>二</sub>檀主<sub>一</sub>新<sub>二</sub>修寶殿<sub>一</sub>一字、十二月告<sub>レ</sub>竣、二十五

日遷宮、地頭島津左中久金、地頭代土持新八、檢者葛

西伊右衛門・山内熊次郎、噯町田金左衛門・荒田伊左

衛門・武宮與八左衛門・税所庄太左衛門・野村市郎右

衛門・二宮治右衛門・関屋喜左衛門皆預<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、成願

寺快譽為<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>焉、後又歷<sub>レ</sub>歲四十四、至<sub>二</sub>文化十二年<sub>一</sub>

亥乙、

大檀主齊興公及 老大君重豪公 老君齊宣公 世子邦

丸公<sub>後齊公</sub>修<sub>二</sub>造寶殿<sub>一</sub>、九月落成、社司黒木大膳等與<sub>レ</sub>

焉、後十八年為<sub>二</sub>天保三年<sub>一</sub>壬辰、

大檀主齊興公及<sub>二</sub>老大君重豪公 老君齊宣公 世子

齊彬公<sub>一</sub>命新<sub>二</sub>葺寶殿<sub>一</sub>及新<sub>二</sub>彩飾<sub>一</sub>、九月告<sub>レ</sub>竣、地頭川田

信濃佐摸、地頭代黒葛原源左衛門兼記、社司黒木近江

實正各以<sub>レ</sub>任與<sub>レ</sub>焉、後<sub>二</sub>年<sub>一</sub>同年 齊興公復<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>老

君齊宣公 世子齊彬公 新建此社及舞殿四足東西橫張四字、(一、二、三、四)月告竣、地頭川田佐撲、地頭代黒葛原兼記、

郷土年寄原休右衛門俊長・関屋清右衛門孝置・河野織右衛門通典・樺山與左衛門資雪・森田平右衛門清流・

伊藤四郎左衛門祐輝・町田善之丞實蕃、別當成願寺覺仁、社司黒木實正等、任事與焉、其後十年為嘉

永四年辛亥、前比華表以石製刻、間歲損危、至是九月、齊彬公及世子虎壽公 老君齊與公命寺社廳、出所

貯金以資工料、撤石易木新建華表朱塗其柱、一貳丈三尺、地頭島津豊後久寶、地頭代三原源五左衛門、社司黒木隱

岐頭等、任事與焉、今其詣社也、通濱殿五數傍右折向社、行凡可壹町五拾三間、至華表所、而通華

表、進又可壹町廿間、詣于社殿、庭左右有随神堂、皆祠木像、社地廣輪整卅一間凡壹段七畦、而其山堅橫各

壹段七畦云、盡階敬陞拜殿三方各、左右橫張四數、而入舞殿五數、進通廊下三數則詣寶殿三方各、恭開

扉而雖窺內陣、社司有謝曰、譽田別尊應神自古堅禁人窺神躰、息長足姫尊神功皇后鏡為神躰云、今觀

夫信豐・道良等所各薦鏡、皆有座像佛、竝載于前、其他家重等所懸之面類、從其年月多見上章、凡自寶殿至随神祠・華表等、修補料皆寺社廳所合力、而若他御供所四數・籠所四鋪三・濱殿見一郷所辨云、自昔相傳、

忠久公因有誓願、剋建此社、於野田新御堂薦田八町為神領、然世稍換、至和泉忠辰得罪失邑、

地係他藩、各離舊領、雖然、前此惟新公之軍于朝鮮也、祈誓此社、

忠恒公亦同告禱、欲新華表、伐松於濱殿之東傍、有樹懷鋒、感喜威社今在天、乃赴其軍、竟父子顯

功、復封出水・高城二郡、故此社亦薦田祿為其神領、今按古高帳、載箱崎八幡領及成願寺領於慶長十

七年、曰、四拾五石壹斗貳升壹合為此神領、八拾石八斗壹升為其寺領、而慶長六年帳皆未全載、元和六

年則減右寺領載廿六石、若夫神領全不復載云、據此、其薦神領應在六年後至元和之間也、而

方元和五年國用不足四分田祿以收其應被取

公也、其有神領、則每歲例祭凡十四次、正月朔日・

十五日、三月三日、五月五日、八月朔日・十五日、九

月十八日・廿一日・廿二日・廿三日・廿四日・廿五

日・廿六日、十一月十五日、通計如右、事見慶長十

九年地頭樺山久高古籍、而九月廿五日為大祭、行三

騎鎗流馬、雖為舊例、至無神領請官姑停、射者

宅地既被收公、歲入租於官廩云、而別當成願寺・

座主愛染院・社司黒木隱岐等猶充神戶、宅地皆給宮

内、而今例祭九月十八日・廿三日・廿四日・廿五日・

廿六日、而正祭為廿五日、

官廩薦米伍斗貳升伍合、供其祭事、社人等奉神輿、

出臨濱殿、此地地頭代撰公位曰御名代、修驗家撰地

頭、各代調、為例云、今内陣諸所寶藏、有下樺山美濃

久高方居地頭所薦鎧一領小櫻威大袖、又有下水土

小田原氏祖所薦鎧一領及同郷土吉永源左衛門所薦長

光太刀一腰上、竝闕二年月、近至文化五年戊辰、

齊宣公手書所詠歌納于大社名寺、此社亦列其撰、

閏六月使寺社奉行授社司、則首夏雛の羽のうすき衣のひにもはるをへたて

いなつや 見恋海士のかるみるめはかりハ有なか 二首之御短  
立らん見恋らかわくまもなき袖のうらなみ

冊也、自其十四年為文政四年辛巳、

齊興公頒普聞品於名社大寺、三月廿六日寺社奉行承

旨、授一折於此社司、因有祈願云、

紫尾山三所權現、在下府城北距三十三里、薩州伊佐郡鶴田

郷紫尾村之湯本上、本田親盈神社考題古紫尾三所權

現、所祭同熊野權現、例祭十一月朔日、三代實錄貞

觀十年授從五位下紫美神、即為此社云、然今季安

訪邑人、其曰古紫尾非此社事、自此距午在壹

里拾九町拾三步許柏原村之種子田、自昔相傳、始自

上宮、垂瑞氣乎此、雖始立祠、後移今地、因其

為址加古字云、白尾國柱名勝考、奉祀熊野大神、

例祭十一月三日、而此山頂曰上宮嶽、同祀熊野大

神、地係出水郡武本村、自嶽午方屬山崎郷、祠此

社二字於二渡村一字於白男川村、祭神皆伊弉冉尊・事

解男神・速玉男神三座、例祭十一月六日・七日・十八

日、皆易日云、又卯方屬宮城郷、竝隸伊佐郡、每

歲上宮三月四日遠近群詣、為<sub>レ</sub>例云、而祀<sub>二</sub>其麓<sub>一</sub>則此社也、地係<sub>二</sub>鶴田<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>之下宮<sub>一</sub>、三代實錄所<sub>レ</sub>載貞觀八年四月七日辛巳、授<sub>二</sub>薩摩國正六位上紫美神從五位下<sub>一</sub>云、亦為<sub>二</sub>此社事<sub>一</sub>、井上宮內神社考、在<sub>二</sub>出水郡紫尾山<sub>一</sub>云、誤也、先史既規、說在<sub>二</sub>高尾野下<sub>一</sub>、季安今詣<sub>二</sub>社殿<sub>一</sub>、搜<sub>二</sub>寺古編<sub>一</sub>、溯<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>今踰<sub>二</sub>四百八十年<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>康曆三年<sub>亥</sub>正月座主良春修<sub>二</sub>造藥師堂<sub>一</sub>募緣帳上、又其翌年有<sub>レ</sub>至德二年<sub>乙丑</sub>十一月座主叡源著<sub>二</sub>昔物語<sub>一</sub>言<sub>二</sub>此山來由<sub>一</sub>、其他有<sub>レ</sub>元和三年典意所<sub>二</sub>寫集<sub>一</sub>、或元祿中快善所<sub>レ</sub>著山略記・見聞集及山緣記等上、併採參考、熊野權現、按<sub>二</sub>物語<sub>一</sub>、來自<sub>二</sub>異國<sub>一</sub>暫措<sub>二</sub>足於此紫尾山<sub>一</sub>云、緣記則本生<sub>二</sub>乎西天摩訶陀國王<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>避<sub>二</sub>其國<sub>一</sub>慈<sub>レ</sub>濟東土、投<sub>二</sub>東五劍<sub>一</sub>試<sub>二</sub>緣有無<sub>一</sub>、然而

皇朝十世崇神帝元年秋八月叡源說云三八、世孝元帝時、其劍為<sub>二</sub>八角水精<sub>一</sub>三尺、天<sub>レ</sub>降於紀伊・出羽其他下野日光山・豊前彦山六寸、大願<sub>二</sub>靈驗<sub>一</sub>、竟鎮<sub>二</sub>座紀州<sub>一</sub>、時有<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>岩田川<sub>一</sub>、猊師曰<sub>二</sub>阿乃千世<sub>一</sub>者上、率<sub>レ</sub>狗狩<sub>レ</sub>山、發<sub>レ</sub>箭射<sub>レ</sub>熊、熊不<sub>レ</sub>死遁、覩<sub>レ</sub>血進<sub>レ</sub>狗、覓<sub>二</sub>其所<sub>レ</sub>去<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>樟樹下<sub>一</sub>、狗仰<sub>二</sub>其梢<sub>一</sub>

頗有<sub>二</sub>吠聲<sub>一</sub>、乃千世亦往而觀<sub>レ</sub>之、三月輪懸、千世怪曰、月輪何故離<sub>レ</sub>天懸<sub>レ</sub>梢、且竝<sub>二</sub>三躰<sub>一</sub>實是天變、若其否則光物乎、權現對曰、非<sub>二</sub>是天變<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>亦光物<sub>一</sub>、遙來<sub>二</sub>本朝<sub>一</sub>為<sub>二</sub>普救<sub>一</sub>東土衆生也、汝宜<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>社<sub>一</sub>以崇<sub>二</sub>吾於熊野<sub>一</sub>三所權現上、千世忽感<sub>二</sub>神德<sub>一</sub>、欽崇營<sub>二</sub>之假殿<sub>一</sub>如<sub>二</sub>託宣<sub>一</sub>云、今紀州熊野、聞<sub>二</sub>其祭神<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>祀<sub>二</sub>伊弉冉尊<sub>一</sub>・事解男神・速玉男神三柱<sub>一</sub>云、而建<sub>二</sub>熊野本宮<sub>一</sub>見<sub>二</sub>

帝十六年<sub>年</sub>契<sub>二</sub>諸本紀<sub>一</sub>、十一年、四道將軍能平<sub>二</sub>戎夷<sub>一</sub>、異俗多歸<sub>二</sub>國內<sub>一</sub>安寧云、又十二年詔、敦禮<sub>二</sub>神祇<sub>一</sub>教化流行、衆庶樂<sub>レ</sub>業、異俗重<sub>レ</sub>譯來、海外既歸化云之類、非<sub>レ</sub>不全符、然緣紀說、雖<sub>レ</sub>巨<sub>レ</sub>怪異<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>遽取<sub>レ</sub>信、白石所謂、南島有<sub>二</sub>神<sub>一</sub>、降為<sub>二</sub>威福<sub>一</sub>、教<sub>二</sub>民敬<sub>レ</sub>神<sub>一</sub>、故神頭<sub>レ</sub>靈、南島今猶神降託<sub>レ</sub>女、往々為<sub>レ</sub>常云、巨<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>理論<sub>二</sub>乎<sub>一</sub>、若<sub>二</sub>夫權現<sub>一</sub>憩<sub>二</sub>乎此峯<sub>一</sub>、叡源所<sub>レ</sub>述專傳<sub>二</sub>佛說<sub>一</sub>、曰彌陀・藥師・觀音各去<sub>二</sub>其境<sub>一</sub>來垂<sub>二</sub>跡乎此靈山<sub>一</sub>、埃<sub>二</sub>時機<sub>一</sub>至、人間無<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>焉、至<sub>二</sub>

人王廿七世繼躰帝善記元年壬寅之歲、三所和光有<sub>レ</sub>夢<sub>二</sub>空覺<sub>一</sub>、乃覺而覩<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>上宮<sub>一</sub>垂<sub>二</sub>紫雲<sub>一</sub>瑞氣引<sub>レ</sub>尾至<sub>二</sub>下宮<sub>一</sub>

前池、其他靈瑞、多所感通、因名此山號紫尾山、乃造社壇、建立僧坊、自時歷世凡七十二、積年八百六十二、至

人皇百一世後小松帝至德二年<sub>乙丑</sub>、叡源住此寺、述山來由、今藏原本<sub>叡源書、年三十八、云、知貞和四年生</sub>、按、善記年號僅止四年、而其壬寅當

帝十六年、後卅一年為

欽明帝十三年<sub>甲壬</sub>、是歲十月、百濟獻佛像・佛器及經

卷、民間大疫、詔棄佛像于江、焚伽藍、翌十四年、

又詔造佛像二軀、二十三年、帝遣大伴狹手彦、

率數萬師伐高麗破之、獲儒釋・方書・佛像・樂

器等以歸、事見本紀、自善記後四十年、則空覺

名紫尾山造之社壇、雖如暨其時、建僧房云、

應必

欽明帝十四年後之事也、但其曰紫尾山神興寺、見<sub>下</sub>康

曆三年<sub>乙丑</sub>正月座主良春覺葺藥師堂勸進帳、而其翌至德

二年叡源所書、未嘗一言及院號寺名、惟曰紫尾山

耳、若夫祇答院、季安嘗按

桓武帝紀、著古郡院說、其略曰、延曆十年<sub>乙未</sub>

帝詔新造倉庫各去其間<sub>險</sub>於十丈上、倉薨比近有失

火憂、隨處寬狹量宜改置、十四年、又詔新建倉

院、每鄉置之、僻遠百姓跋涉山川有受納實、郡

鄉倉院宜互量便建其中央、所謂院字、有垣牆

處而曰官廨、則今置二院於伊佐郡、其一方以牛

山・羽月・山野・平泉・入山等一曰牛屎院、又一方

以佐志・黒木・鶴田・宮之城・山崎・大村・關牟田

曰祇答院、譬諸今制、猶呼藏本曰祇答院組、而

屬管下一曰藏屬鄉之類、皆古之遺制也、自善記元

年空覺開此山、歷二百七十年至

桓武帝詔建倉院、則此時祇答非寺院名可知也、

是歲<sub>乙丑</sub>三月、叡源夢有災難乎社壇坊中、覺省自心、

無禍勝德、乃始<sub>乙丑</sub>廿四日<sub>乙丑</sub>祈除其災、眞讀仁王般

若經、特抽丹精、至六月廿三日、天災民舍延燒罹

數百軒坊中及仁王堂、金剛力士亦為焦土、雖然因

權現威靈、如社壇及其隣坊皆免災難、愚僧讀經亦

似有驗、可不尊信乎、抑此山、自佛法未入



皇國之前、空覺既有、所感建三所社壇、方後益熾、遂建僧房、名其本坊二號神興寺、自為開山、而其寂失年、惟傳七月廿一日耳、自社壇至仁王門、左右置十二坊、竝覺連軒、其十二、則橋本坊・杉本坊・北之坊・中之坊・川上坊・松下坊作下元・川添坊・上之坊・谷口坊作谷或作橋・山本坊作本或作下・尾崎坊・瀧本坊、其他座主所隱栖、有菩提院・瑞雲院曹洞・德壽菴・山中坊・谷之坊・奥之坊等、依本異同不知孰是、相俱山林通氣、澄心幽閑、溫泉湧池、灑煩愆垢、運步社壇、研誠靈神、實為本藩之名山、自右至德、踰六十年、為文安二年乙丑、座主成春命石工、建六地藏於浴湯側、刻施主沙彌道忍、至今年癸亥四百廿年、今尚存焉、自其卅一年至文明七年乙未、社頭稍壞、座主成春尊修社頭、十月七日避遷假殿、十一月十三日己未竣功行遷宮法、宗譽為導師焉時七、間歲、社殿距北二里八町許、建石祠於出水路山、祀花牟禮王子、施主無傳、後五十四年為享祿二年辛丑、社殿距東四町許、建石祠、祀辨財天、亦闕施主、間歲、

結衆合力經塚於種子田與虎居村之際、今呼其原曰經塚云、後廿八年至弘治二年丙辰、社殿距二十五町、建石佛六地藏於阿彌陀堂前、亦失施主、後二年為永祿元年戊午、自社壇至柏原路凡卅七町、募緣建石於每町各一基、至六年癸亥竣功、山懸壹岐守・吉田出雲守息長清長・大井美作守紀實勝・北原安藝守伴兼雄・鶴田長門守平重次字平重・伯耆守平重有・權律師藝幸・權少僧都勢牛・妙慶禪定尼・松尾山法印頼意等、應募者多焉、又社壇東傍有小池、祠辨財天於其中洲、祠側有石、曰龜石、又社南有池、一古松伴石立、曰三世松・鶴石、又社壇側建堂兩宇各三間、為四面、祀藥師・彌陀、東方建石祠、祀山王權現、為鎮守焉、又社壇距東四町許、建石祠、祀住吉神、其左右廢寺址多焉、又距南一町餘、有開山空覺石塔、邑民呼其地稱伽藍所崇敬焉、又距南四町、有古廟所、古墳累々不知幾百千、元龜三年、座主竜春建石六地藏於其廟前、杉本坊快真為施主焉、又社壇距南一町右旁、建鞍懸宮、又距六町路傍、建石祠、

祀二大日一、又距<sub>レ</sub>良五町、建<sub>三</sub>石祠於山中一、祀<sub>三</sub>山王權  
現焉、又自<sub>レ</sub>社距<sub>三</sub>九町<sub>二</sub>路旁、有<sub>三</sub>地名<sub>二</sub>犬塚一、亦古墳  
多、又杜南峯建<sub>三</sub>石祠一、祀<sub>三</sub>虚空藏・十羅刹女一、是山中  
求聞持所云、又杜西峯有<sub>二</sub>巨石一、面貽<sub>三</sub>蹄跡一、自<sub>レ</sub>昔  
傳稱天降<sub>三</sub>龍駒一其址云、又社距<sub>三</sub>北一里餘、有<sub>三</sub>谷名<sub>二</sub>  
鬼原一、險阻難<sub>レ</sub>通、土人傳稱、昔時禪僧入<sub>三</sub>定于此<sub>二</sub>得<sub>三</sub>  
鬼原名一、或曰<sub>三</sub>定壇<sub>二</sub>云、又此社山有<sub>三</sub>一基<sub>二</sub>曰<sub>三</sub>華立石一、  
其一距<sub>三</sub>社<sub>二</sub>可<sub>三</sub>二里半一、建<sub>三</sub>神子曰<sub>三</sub>三字知<sub>二</sub>處一、又一距<sub>三</sub>社  
可<sub>三</sub>四里半一、建<sub>三</sub>東鄉藤川一、又建<sub>三</sub>華表於<sub>三</sub>三處一、其一距<sub>三</sub>  
社建<sub>三</sub>南八町一、又其二距<sub>三</sub>社建<sub>三</sub>一里餘<sub>二</sub>種子田一、又其三  
距<sub>三</sub>社建<sub>三</sub>四里半<sub>二</sub>入來副田一、今其礎址尚存<sub>三</sub>其地一、土人  
相傳曰<sub>三</sub>紫尾山華表原<sub>二</sub>云、由是、神威匪<sub>三</sub>啻<sub>二</sub>方域一、名  
振<sub>三</sub>遠近一、諸國民庶莫<sub>レ</sub>不<sub>三</sub>信仰一、然世亂而戰爭歷<sub>レ</sub>載、  
神社佛寺多廢壞矣、至<sub>三</sub>元龜中一、渋谷五家各獻<sub>三</sub>侵地一、  
多皆滅矣、出水義虎猶據<sub>レ</sub>邑崇<sub>三</sub>敬此社一、薦<sub>三</sub>田八町<sub>二</sub>在<sub>三</sub>地  
神<sub>二</sub>、供<sub>三</sub>堅義祭一、每年十一月廿四日雖<sub>レ</sub>有<sub>三</sub>其祭一、天正  
十三年義虎既逝、至<sub>三</sub>文祿二年<sub>二</sub>子忠辰得<sub>三</sub>罪征韓<sub>一</sub>、遂  
失<sub>レ</sub>邑滅、座主實譽<sub>宗</sub>迄<sub>三</sub>天正季<sub>二</sub>猶催<sub>三</sub>法會一、貴賤多聚<sub>三</sub>

神興寺<sub>二</sub>云、後十五年至<sub>三</sub>慶長十一年<sub>一</sub>、丙午社壇益壞、  
南呂朔日、國老島津圖書長入道紹益・樺山權左衛門  
久高承<sub>レ</sub>旨、檄<sub>三</sub>命座主坊一、令<sub>三</sub>博募<sub>二</sub>緣院內庶  
民<sub>一</sub>以新<sub>三</sub>建權現寶殿<sub>一</sub>、竣<sub>三</sub>功於十四年己酉十月<sub>一</sub>、時  
邦君家久公為<sub>三</sub>大檀主<sub>一</sub>、地頭島津忠長、奉行府土常圓  
坊清堅・猿渡嘉左衛門辰信、大工白井七右衛門常益、  
鍛冶谷口掃部重正、座主盛雄等各以<sub>レ</sub>任與<sub>レ</sub>焉、後除<sub>三</sub>  
卅年一至<sub>三</sub>寬永十七年<sub>一</sub>、庚辰島津圖書久通領內佐志亦係<sub>三</sub>  
院地<sub>一</sub>、是歲、得<sub>三</sub>砂金於其川<sub>一</sub>、知<sub>三</sub>川上有<sub>三</sub>金氣<sub>一</sub>、乃遣<sub>レ</sub>  
人如<sub>三</sub>石州<sub>一</sub>招<sub>三</sub>內山與右衛門等<sub>一</sub>於銀山、使<sub>レ</sub>渠等<sub>三</sub>漸尋<sub>レ</sub>  
源至<sub>三</sub>曾木長野<sub>一</sub>、屬大隅州三月廿二日掘獲<sub>三</sub>砂金<sub>一</sub>、久通  
具報<sub>三</sub>其狀<sub>一</sub>、併<sub>レ</sub>金以呈<sub>三</sub>  
光久公、公以聞<sub>三</sub>大家<sub>一</sub>、其年六月、閤老召<sub>三</sub>伊勢兵  
部貞昌、傳<sub>レ</sub>旨許<sub>三</sub>益掘<sub>レ</sub>之、十八年<sub>辛巳</sub>八月、  
公以<sub>三</sub>其所<sub>二</sub>掘砂金九百八十兩零<sub>一</sub>獻<sub>三</sub>  
大家、十九年正月、大家命賜<sub>二</sub>  
公金山、乃遣<sub>三</sub>北鄉佐渡久加<sub>一</sub>、亞督<sub>二</sub>其事<sub>一</sub>、遠近雲ノ如  
集、餘<sub>三</sub>二萬人<sub>一</sub>、自<sub>三</sub>薩長野<sub>一</sub>至<sub>三</sub>隅山野<sub>一</sub>、地係<sub>二</sub>桑原、<sub>一</sub>郡橫川鄉、除<sub>レ</sub>

山登坂、柵圍<sub>三</sub>其外、周廻凡一里餘、各於<sub>三</sub>其中<sub>二</sub>所<sub>二</sub>掘出<sub>三</sub>金、不暇<sub>三</sub>舉計、二十年、大家念<sub>三</sub>天下萬民苦<sub>三</sub>乎飢饉、命停<sub>三</sub>金山、時松山侯松平定頼主及<sub>三</sub>神尾備前守、聞<sub>下</sub>公有<sub>レ</sub>憂<sub>下</sub>乎償<sub>中</sub>其負債、乃借私<sub>于</sub>閤老<sub>レ</sub>有所<sub>三</sub>稟白、乃至<sub>三</sub>明曆二年<sub>丙申</sub>五月、閤老召<sub>二</sub>島津市正忠廣<sub>一</sub>許<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>掘<sub>レ</sub>之、於是九月、金山再開、島津久通大歡、時方<sub>三</sub>社殿及座主寺皆既廢壞、萬治二年己亥二月、所<sub>三</sub>查丈<sub>二</sub>寺社宅籍、惟載<sub>三</sub>座主屋敷下々<sub>一</sub>壹段五畦拾步<sub>廿三</sub>間<sub>三</sub>・寺地壹町貳段九畦<sub>四十三</sub>間<sub>耳</sub>、久通乃薦<sub>三</sub>銀五百兩<sub>一</sub>新<sub>三</sub>建此社殿<sub>一</sub>、以祈<sub>三</sub>金山永昌<sub>一</sub>・國家快樂、是歲十二月竣<sub>レ</sub>功、事見<sub>三</sub>棟札寫<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>時二十七年至<sub>三</sub>貞享二年<sub>乙丑</sub>、神社及座主寺<sub>復</sub>廢頽、殆其如<sub>レ</sub>亡、是歲四月、宮城虎居村神照寺<sub>立神社</sub>座主<sub>云</sub>快善<sub>善哉</sub>全年既老矣、辭<sub>三</sub>其主席<sub>二</sub>將<sub>下</sub>相<sub>一</sub>攸此山<sub>一</sub>以結<sub>三</sub>小菴<sub>一</sub>為<sub>中</sub>隱栖所<sub>上</sub>、來語<sub>三</sub>邑民、邑民咸喜、乃借<sub>レ</sub>戮<sub>レ</sub>力、修<sub>三</sub>榮神興寺<sub>一</sub>、請<sub>三</sub>必移居<sub>一</sub>、快善乃來、奉<sub>三</sub>座主職<sub>一</sub>、元禄二年己巳、快善深憂<sub>三</sub>社壇朽敗<sub>一</sub>、四月、上疏請<sub>三</sub>寺社廳<sub>一</sub>、乃遣<sub>三</sub>檢使<sub>一</sub>命列<sub>三</sub>修補所<sub>一</sub>、三年九月起<sub>レ</sub>功、告<sub>三</sub>竣乎冬<sub>一</sub>、時

府君綱貴公、老君光久公、世子吉貴公為<sub>三</sub>大檀主<sub>一</sub>、快善略記為<sub>三</sub>三年<sub>一</sub>、棟札寫為<sub>三</sub>祈<sub>三</sub>壽算延齡<sub>一</sub>・國家安全、地頭仁禮覺左衛門景代、寺社奉行島津織部久達、檢者町田權右衛門、座主權律師快善等各<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>任預<sub>レ</sub>焉、既而十年<sub>丁丑</sub>正月、快善著<sub>三</sub>山來由<sub>一</sub>、曰<sub>三</sub>紫尾山略記<sub>一</sub>、先<sub>レ</sub>是歷載樓<sub>レ</sub>山、自撰<sub>三</sub>八景<sub>一</sub>、採<sub>下</sub>三ヶ月山於其東、筆山・光石・綾織山・錦尾之四奇於其南、胎生尾於其乾、陰陽師峯與<sub>三</sub>兩鹿聲<sub>一</sub>於其子丑<sub>上</sub>、以圖<sub>三</sub>八景<sub>一</sub>、遙寄<sub>三</sub>狩野昭信<sub>一</sub>、需<sub>三</sub>其圖画<sub>一</sub>、且乞<sub>三</sub>詩於府下及<sub>三</sub>都名僧<sub>一</sub>、貽<sub>三</sub>寺什寶<sub>一</sub>、又閑暇親巡<sub>三</sub>觀山中<sub>一</sub>、博輯<sub>三</sub>葉語<sub>一</sub>、著<sub>三</sub>見聞集<sub>一</sub>、附<sub>三</sub>略記後<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>其嘗董<sub>中</sub>神照席<sub>上</sub>、宮城臣稱留源左衛門・山内權右衛門等欽<sub>三</sub>快善德<sub>一</sub>、多<sub>レ</sub>從學者、迨<sub>レ</sub>為<sub>三</sub>座主于紫尾社<sub>一</sub>亦俗弟子益衆、恒侍<sub>三</sub>方丈<sub>一</sub>、十四年辛巳、快善臨<sub>レ</sub>將<sub>三</sub>入定<sub>一</sub>、招<sub>三</sub>俗弟子<sub>一</sub>有<sub>三</sub>顧命<sub>一</sub>曰、此寺如<sub>レ</sub>今、動至<sub>三</sub>無住<sub>一</sub>、故吾神主宜<sub>レ</sub>實<sub>三</sub>于宮城眞蓮寺<sub>一</sub>、既而是歲、竣<sub>三</sub>七月廿一日開山諱辰<sub>一</sub>入<sub>三</sub>定于地藏堂<sub>一</sub>、曰<sub>三</sub>權大僧都法印快善<sub>一</sub>、弟子等安<sub>三</sub>主於眞蓮寺<sub>一</sub>、附<sub>三</sub>之香資<sub>一</sub>、如<sub>三</sub>遺命<sub>一</sub>焉、其後九年至<sub>三</sub>寶永六年<sub>己丑</sub>、

淨國公豫請東叡山准后宮、移紫尾廢刹大願寺、更  
新建於府城南、号南泉院、招願王院智周僧正、為  
之開山、帶原任董焉、時公命有司、正德四年午  
新建紫尾社及其座主神興寺、亦命智周屬南泉末  
寺、移其弟子速證坊以董其席、因撰其名、山號  
紫尾、寺曰神興、固雖仍舊、但其院號係古倉院、  
特命史官有以查議、於是、田中五右衛門國明・  
肥後二右衛門盛香・川上平右衛門親史相俱探古、專  
採快全略記載空覺創寺曰紫尾山祁答院神興寺、證  
據聖德太子建寺於播州班鳩、曰班鳩山佛餉院、以  
祁答院為其院號、亦宜無妨、九月朔日、拜呈政  
府、乃島津備前久達以聞、公亦可之、久達以  
傳智周、令上疏請、命許之、於是、智周僧正乃  
授祁答院令條五章、永令遵守勿以違背上焉、其一  
曰、可懇祈國家安泰、佛事祭禮勿怠慢焉、其二曰、  
可守國典及本寺制令、精勵法務矣其三曰、年首賀  
禮、神祖諱辰必趨本寺、勿闕例業矣、其四曰、  
注意修造神社佛寺、勿苟怠焉、其五曰、方今所

賜寺領・寄附銀、宜加省略・專節日用・勿苟私費  
矣、十一月晦日、因新建廢寺、賜寺社地二區於權  
現社及座主祁答院址、如萬治宅籍、十二月十日、由  
祁答院屬南泉末寺有新建命、賜田祿貳拾斛於鶴田  
地、永為寺領、於是十六日、國老島津大藏久明・島  
津內記久貫・種子島彈正久基連署裁書授祁答院、令  
以知行焉、五年乙未二月十四日、速證房既拜座主、  
如鶴田鄉、導暖淵勝孝左衛門・寺用聞林田休左衛門、  
始謁紫尾社、恭窺寶殿、乃寫至德二年座主叡源所  
著物語、寄示其師智周僧正、僧正披閱、知上古為  
天台宗、特感喜云、三月朔日、寺社奉行義岡右京召  
本寺院代、造于松間、授寺領目錄、九日、勘定奉行  
堀甚左衛門・新納左京等承國老旨、裁證書授其  
寺地、令以勤法業、勿懈怠焉、十一月二十九日、  
宮城臣稻留某等前來謁座主、曰、吾儕先住快善之俗  
弟子、其將入定也、有所遺託、既入定則神主置  
此、雖當其理、如今恐復至乎無住、故託汝等、  
吾神主必眞眞蓮寺、故吾儕戮力、附日牌料以托

神主、悉如遺命、既而未幾、至亡其銀、遺憾孰大焉、今也幸聞師補座主修造此寺、因賀入院、併以陳情、薦銀七拾六錢六分、供三月牌料、伏願、實神主於先住列傳、諸後住、每入定日七月廿一日必勤回向、可四以令三永勿レ怠三祭事、惟是拜囑、速證房聞而感服、與善守坊・法泉坊胥議、快善積德、竭レ力紫尾最多勲勞、縱令渠等雖無此舉、不可レ不祭、乃翌晦日、開眼供養、安置佛殿、自時九十年至文化元年甲子正月元日丑剋許、紫尾社殿火、悉蕩燼矣、時寶殿方葺以三小板、左右後壁皆用レ板、廊下二亦葺用三小板、左右腰壁及床皆用レ板、拜殿四間葺以レ茅、腰壁等同廊下、而祭神三座、一柱男束帶木像、長壹尺四寸、一柱女躰、長壹尺許、一柱僧形、長壹尺許、阿彌陀座立數躰、一座長貳尺七寸、一座長九寸、一座長七寸、一座立像壹尺五寸、竝皆大破、一座石印、裏有三空海銘、其他有二大小鏡數十面、其大正面、竝鑄本地藥師・彌陀・觀音於蓮華座、其小裏彫承元三年源兼元、自昔傳稱、幕府所薦云、十一面觀音・日

月二天聖天等各一躰、熊野權現繪像一幅、鬼面十頭、石木獅子各二頭、大錫杖一振長一尺、彫曰山城國高雄山晋海云、大般若經六百卷唐本、歌仙五十二枚之類、不暇悉記、凡座主寺距社拜殿三四十步、火起拜殿、住僧知レ火雖二馳將レ救、時風特烈、夜可レ丑剋、人不急續、遂皆灰燼、三日、年寄園田五兵衛・市來新右衛門等點檢報實、先是、寶殿所藏若夫劍二振長二尺・太刀一腰長二尺八寸、治末行、莫詳誰薦、方享保三年、淨國公如江戶、途謁此社殿觀諸寶器、恐此三品殆將レ洪朽、乃命三研工令二磨納焉、而天保中、寺社廳徵自府下令レ藏三本寺、以故遁レ火、今在三南泉院云、又至德二年叡源所書物語在座主寺、幸免此難、得不燒云、文化五年戊辰、官命三寺社廳新二建紫尾三所權現寶殿六數及其廊下三數一、拜殿四間、起二功乎四月廿二日、告竣於閏六月、寺社奉行小笠原郷左衛門長舊、地頭小林中太兵衛政韶、寺社方取次毛利覺右衛門光敷、檢者松田金左衛門通昆・崎元孝次郎盛苗、書役長崎八郎右衛門義方、大工頭荒田甚左衛門有

起、郷士年寄山下喜右衛門盛正、組頭西川清右衛門用  
猷等與焉、後五十五年至文久二年壬戌、社殿復壞、  
命寺社廳新建社殿、二月廿八日起功、六月九日上  
梁、十二日落成、十三日行遷宮法、時今  
邦君茂久公為大檀主、寺社方御内用掛伊藤六郎右衛  
門、書役兼檢者三木原甚五郎、大工頭添役市来平八、  
郷士年寄西川六太夫、組頭山下次郎太、住僧良遍等以  
任與焉、此即今社殿、而地廣輪凡八哇許、自社殿  
至木華表可卅八步、朱塗柱、高壹丈、又距社殿  
壹町卅步、有仁王門、額曰紫尾山、阿吶竝木像各長  
八尺四寸、而寶殿所傳雷獸爪、今則亡矣、惟藏舍利  
與寶珠耳、神興寺所主崇阿彌陀立像、木古佛玉眼  
作者闕、寺領貳拾斛、別方島津久通嘗祈金山一薦銀  
厨子座、有餘銀六百錢貸鶴田士一歲納息於社  
修社、有所餘銀六百錢貸鶴田士一歲納息於社  
廳以供修補料、今窺寶殿、神像不座、惟崇一大  
鏡、其正面竝鑄本地藥師・彌陀・觀音三鉢於蓮華座  
各一鉢耳、例祭九月廿九日・十一月廿四日、闔鄉薦  
米供祭事云、親盈考十一月朔日、國柱考十一月三日

云、皆不與此合、柏原古紫尾例祭、據享保四年佛  
工千竈良仙所記載祭于二月朔日・九月九日・十一  
月朔日、則應舉其一以言之也、國柱云三日、  
未知其據、姑俟後訂爾、

鎮國山感應禪寺、在府城西距廿二里八町許、薩州出水  
郡山門院野田郷下名村上、緣記曰、京師東福寺支院、  
而方

太祖得佛公就封三州、本田次郎貞親、先

公三年來薩觀變、請千光國師榮西創建此寺云、

按公室由来、亦貞親先

公二年、來薩築木群城、創感應寺云、

公始就封在文治二年、所謂三年、溯元曆元年、然

公時未拜職於島津莊、故其云三知必一誤、據此、

貞親來薩創寺雖當文治元年、時榮西猶未建千佛

閣功、難亦免誤、一說貞親來薩、從建久七年

得佛公年十八始就封云之說、坐承其誤、逆量三年

為五年事、於榮西履歷却如闕涉、今季安詣寺搜

觀古編一

得佛公時未<sub>レ</sub>曾創<sub>レ</sub>此寺一、然據<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>山榮西<sub>レ</sub>祀<sub>レ</sub>其木像  
高壹尺、應<sub>レ</sub>必誤<sub>レ</sub>光明院事<sub>レ</sub>也、而所<sub>レ</sub>謂感應寺、  
作者闕於佛壇、應<sub>レ</sub>必誤<sub>レ</sub>光明院事<sub>レ</sub>也、而所<sub>レ</sub>謂感應寺、  
至<sub>二</sub>

四世道義公 五世道鑑公、請<sub>レ</sub>僧雲山<sub>二</sub>地志要略云<sub>二</sub>世禪師  
的弟而中興開山<sub>一</sub>也

創<sub>レ</sub>建于德治二年丁未之歲、事見<sub>レ</sub>貞享三年主僧利益上  
疏、實<sub>レ</sub>諸他書<sub>レ</sub>皆足<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>證、若<sub>レ</sub>夫榮西事<sub>レ</sub>、季安嘗涉<sub>レ</sub>

和漢、有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>抄輯、千光國師榮西號<sub>レ</sub>明菴、備中州吉

備津宮人、俗姓賀陽氏、曾祖<sub>一</sub>一說  
為<sub>レ</sub>祖諱曰<sub>レ</sub>貞政、刺<sub>レ</sub>史

薩州、父諱不<sub>レ</sub>傳、母田氏、夢<sub>レ</sub>明星<sub>レ</sub>乃感孕、懷胎八

月、不<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>困惱、生<sub>レ</sub>于

崇德帝永治元年辛酉四月二十日明星出之時、隣人曰、產

不<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>期、必禍<sub>レ</sub>父母、不<sub>レ</sub>快<sub>レ</sub>乳、兒亦不<sub>レ</sub>呱、父聞大

嗔曰、兒已夭乎、對曰、三日猶活、則誠<sub>レ</sub>其母、令<sub>レ</sub>洛

鞠育、久安四年<sub>戊辰</sub>、貞政嘗手刻<sub>レ</sub>蛭子<sub>一</sub>以授<sub>レ</sub>榮西、榮

西尊奉常隨<sub>レ</sub>其身、此年八歲、從<sub>レ</sub>家父<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>俱舍頌、聰

敏超<sub>レ</sub>倫、仁平元年<sub>辛未</sub>年十一歲、師<sub>レ</sub>事靜心於安養寺、

與<sub>レ</sub>家父<sub>レ</sub>嘗同<sub>レ</sub>業友也、久壽元年<sub>甲戌</sub>年十四而落髮、始

登睿山戒壇、保元二年<sub>丑</sub>、師靜心寂、時榮西年十七、

臨<sub>レ</sub>終顧命曰、以<sub>レ</sub>汝尚幼未<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>密法、今我歿宜<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>

法兄千命<sub>一</sub>受<sub>レ</sub>其教、故三年<sub>戊寅</sub>年十八歲、師<sub>レ</sub>千命<sub>一</sub>受<sub>レ</sub>

求聞持法、平治元年<sub>己卯</sub>年十九歲、就學<sub>レ</sub>台教於睿山有

辨、應保二年<sub>壬午</sub>年廿二、天下大疫、恐<sub>レ</sub>持怙染、歸<sub>レ</sub>省

自<sub>レ</sub>京、時就<sub>レ</sub>千命<sub>一</sub>又稟<sub>レ</sub>灌頂、途游<sub>レ</sub>伯耆、參<sub>レ</sub>基好<sub>一</sub>

得<sub>レ</sub>密乘蘊、而還<sub>レ</sub>睿山、重受<sub>レ</sub>密灌、仁安三年<sub>戊子</sub>四月、

乘<sub>レ</sub>商舶、航<sub>レ</sub>於宋、著<sub>レ</sub>明州岸、實孝宗乾道四年也、五

月癸<sub>レ</sub>四明、赴<sub>レ</sub>丹丘、遇<sub>レ</sub>俊乘坊重源<sub>一</sub>日本  
僧也、相伴登<sub>レ</sub>

天台山、九月、乃<sub>レ</sub>重源<sub>一</sub>婦<sub>レ</sub>朝本邦、在<sub>レ</sub>宋所<sub>レ</sub>得天台

新章疏三十餘部六十卷、其他台宗諸書、名家往復文

辭、皆呈<sub>レ</sub>座主明雲<sub>一</sub>高倉宮以仁之幼也、與明雲<sub>一</sub>俱學<sub>レ</sub>最雲、故  
迨<sub>レ</sub>明雲補天台座主、以仁王乃<sub>レ</sub>以其莊園傳<sub>レ</sub>

明雲、事見<sub>レ</sub>山槐故採註<sub>レ</sub>此爾、明雲見<sub>レ</sub>疏特嘆稱曰、汝於<sub>レ</sub>支那<sub>一</sub>掄<sub>レ</sub>揚

台教、真我國法華也、由<sub>レ</sub>是又欲<sub>レ</sub>重到<sub>レ</sub>天台<sub>一</sub>二拜<sub>レ</sub>牟尼

八塔、然與<sub>レ</sub>平賴盛<sub>一</sub>善、因<sub>レ</sub>遇<sub>レ</sub>西遊<sub>一</sub>、遷延至<sub>レ</sub>文治元

年、平族皆滅、於是三年<sub>丁未</sub>夏、復入<sub>レ</sub>于宋、徑趨<sub>レ</sub>

知府、奏請<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>竺、朝議報曰、北蕃強大、西域皆隸、

闕塞難<sub>レ</sub>通、舶主促<sub>レ</sub>還、自<sub>レ</sub>臨安府<sub>一</sub>遂乘<sub>レ</sub>舶、泛<sub>レ</sub>洋三

日、將渡天竺、狂鷗鼓船、而檝將碎、乃禱蜚子、獲安反温州、下船、如天台麓、亦書見三萬年寺虛菴懷徹禪師、師黃龍八世之嫡孫、乃問曰、聞日本密教今方熾、宗旨一句如何、對曰、初發心時、即成正覺、不勸生死、而至溫盤、師慰誘曰、如子言與我宗一般、自此益以鑽仰親炙者、有年于茲矣、時會徹禪師自萬年移主天童、榮西亦隨行、居歲餘、聞禪師有改作千佛閣之意、請曰、思報鴻恩、微軀所不憚、況下此者乎吾忝國主近屬薩摩國司、貞政孫也、他日歸國當致良材以為補助、禪師曰唯、既而紹熙二年秋、辭別于師、乃付僧伽梨、以授書曰、日本國千光院大法師、不遠千里唯為此法入我宋國、探頤宋旨、嚮乾道中、遊來天台、焚香石橋、恭禮羅漢、今又再遊、隨侍老僧、宿契不淺、志操之厚、實可貴、故我法旨、不得示、昔年釋迦、方將圓寂、付屬迦葉、以溫槃妙心、其後世々祖師以心傳心、廿八傳而至達磨、又六傳而至曹溪、又六傳而至臨際、又八傳而至黃龍、又八傳而至予、今以

付汝、汝當護持布化汝國、初達磨所傳衣止六祖、故授此衣、嫡々法系五十三世明覈相承、拜辭而趨慶元府、駕楊三綱船、著平戶島茸浦、實建久二年辛亥之秋也、由薩州固為祖貞政任所址、先入擇材其地、登陟危岳、躋攀峻峻、山靜谿深、有自然長岩屹立竝聳自底、長十五尋、圍各方七尺、高皆五尋、相傳、上古崇狗留孫佛觀音大士之右卒都婆也、因為山名、榮西在宋承大士指示於醫王山、故來拜大士於卒都婆、初

神武帝時五穀種子於此山、因其鄉亦名曰飯野地保、日州

祠麓山祇命、榮西乃附熊野權現於其巔、祈五穀豐熟、躬為開山、創梵刹於其傍、以供祭事、山號狗留孫、寺曰端山、院榜多寶、為六十六部納經所、時天台、其後至寬正中尊海上人再與此寺、為真言宗、屬大乘末寺、事見緣記及地志要略、而其所以取材、悉運海水、以致百圍之木、凡若干挺挾大船、泛鯨波而送焉、按山州名迹志、其造建仁寺也、每巨材難運、輒師命夫曰、宜呼吾名戮力以勸、由是、今猶挽重必呼榮西、榮西云、併採考之、應必始乎取、百圍材運海水之時也、註備考爾、千夫咸集、泛江蔽河、輦致山中、徹禪師笑曰、吾事濟矣、於是、鳩工度



材、雲ノ如委山ノ如積、列楹四十、多日本所ノ致、餘

則取ニ於境內之山、始ニ建於紹熙四年癸丑、本作紹熙與ニ不レ合恐誤、季秋之

甲申、才三載告ノ畢云寧宗慶元元年乙卯、事見ニ宋學士樓鑰所ノ撰

太白名山千佛閣記、又宋虞禔所ノ撰千光祠堂記曰、太

白山山甲ニ天下、而千佛閣尤為ニ第一、後世欲ノ過之、

其材無レ及焉、蓋柱植日本國僧千光法師所ノ致也、詳見ニ

大參樓公閣記、又天台釋宗泐亦曰、至ニ宋南渡、千光

禪師榮西者、徠參ニ天童虛菴斂公、得ニ禪學、以歸、日

本之有ニ禪宗、則自ニ西公始云、見ニ建長紹明禪師語錄

序、榮西再航ニ于宋國、得ニ禪學蘊、且因レ致材、輝ニ

千佛光、振ニ名西土、多如レ是類、匪ニ畜西土、於ニ本邦

亦載ニ釋書第一、而歸朝翌三年壬子、建ニ報恩寺、於ニ

築紫香椎社側ニ益振ニ名聲、間歲我

得佛公既封ニ三州、蓋欽ニ師德、受ニ禪教學、觀ニ山田聖

榮謂、公得佛為禪門名、可ニ以知焉、於ニ是五年甲

寅、本田貞親承レ旨、招請榮西、拓ニ寺於山門院之

野田、為ニ開山僧、摘ニ千光字一號ニ光明院、定ニ菩提所、

故 公墳廟今在ニ其址、六年乙卯、榮西又建ニ聖福寺於

筑前博多、建仁元年、遂入ニ京師、二年壬戌、幕府

頼家施ニ地於王城東、榮西乃創ニ建仁寺、始行ニ禪規、

時年六十一矣、建永元年丙寅九月、

勅董ニ東大寺席、乃賜ニ紫衣、時六十六矣、建保元年癸

酉、陞ニ僧正官、時七十三矣、三年乙亥、先レ是、源

義朝宅在ニ鎌倉龜谷、至ニ尼夫人時ニ寄附其地於榮西、

至ニ是如ニ鎌倉、建ニ壽福寺於龜谷、居未レ久辭ニ幕府實

朝、實朝曰、師年老而寺未レ成、何為欲レ行、對曰、我

欲レ取ニ滅於王城地、幕府曰、聖凡生死豈擇レ地乎、對

曰、我稟ニ禪宗、雖レ開ニ都下ニ疑信過半、故吾臨終欲

唱ニ一句、徑馳ニ駕還、六月患痢、晦日告ノ衆曰、吾將

以ニ孟秋五日ニ逝、都下喧傳、

順德帝亦聞、乃遣ニ中使問疾、拜對ニ中使曰、稍已近

矣、姿容自若、坐椅而逝、中使在レ途聞之、仰見ニ瑞

虹亘ニ其寺上、實七月五日也、年七十五東鑑書六月五日、榮西入滅誤也云

初、榮西之拓ニ寺於山門野田也、摘ニ千光字一號ニ光明

院、其後至

得佛公以ニ嘉祿三年丁亥六月十八日ニ薨於鎌倉上、奉ニ

其遺骸歸葬于光明院、法諡得佛大禪定門、而其明年安貞二年戊子六月十八日、建墳廟文書目錄御骨堂或御石塔云於其寺內、八月十八日、

二世忠義公薦三田三町文書目錄供其祭事、

二世道佛公薨于文永九年壬申四月十日、年七十一、初諱忠義、後改忠時、法諡道佛大禪定門、後弘安七年甲申閏四月、方下

道忍公帥兵戌中管崎上、值先考一期諱辰、先是、

得佛公之在鎌倉也、僧法然者建念佛宗、宣阿說誠(誠方)

主淨光明寺、亦信其宗、修專念業、公亦欽德信

念佛宗、觀山田聖榮謂公念佛宗勤于晨昏、可

知焉、既而就封、創寺魔島、亦招宣阿為開山、

然先公十四年、宣阿寂于建保元年、後隲五十年、

僧一遍來于大隅、受十詞歌於正八幡宮、益修念佛

遊來薩摩、

道忍公欽一遍德、使三世覺阿能學其法上、至是、

公值先考道佛公十三年之回諱、建梵刹於魔島、名

曰淨光明寺、命宰府鑄師丹治恒頼鑄新鐘一枚、此

月三日竣功、懸諸其寺、以資冥福、既而廿一日、

公薨於管崎、年六十、諱久經、法諡道忍大禪定門、

自初榮西拓寺野田歷百十四年、至德治二年丁未

四世道義公五十五歲五世道鑑公三十九歲之時、有雲山祖興者、

京師東福寺開祖聖一國師之法孫、而二世圓鑑禪師

之法嗣、名聲轟世、父子聞而偕欽其德、招為開山、

就世先塋、創建伽藍、山號鎮國、寺名感應、如光

明院為其塔頭、而迄元亨三年癸亥凡十七年、七堂

伽藍猶未悉備、於是二月、

道義公及道鑑公擬境勝於京師東福寺、修造佛

殿・社堂、建九社宮、為鎮守堂天照太神宮・新田八幡宮

神・山內三所大權現・北野天滿宮・熊野大權現・八幡大菩薩・寶滿大菩薩九社也

殿曰圓通閣、法堂曰法電堂、方丈書院曰不二軒、僧

堂曰選佛場、其他庫司・茶室・鐘樓、而十境、則開山

堂曰山家村、井曰甘露井、蓮池曰消災池、幡岳山

曰鉢盂峯、餘失名區、本尊崇千手觀音木座像、長貳尺

言傳行、及脇侍四天王持國・增長・多聞・廣長臂木基作云、各貳尺六寸、作同上、大現達磨

竝木座像、於其客殿上、而東佛壇置開山千光國師、

亦木座像也、翌四年甲子二月、本田石州亦創金井軒於境內、而踰二年、

道義公薨于正中二年乙丑十一月十二日、年七十五、

公諱忠宗、法諱道義大禪定門、道鑑公嗣、是為二世

世、建武三年丙子四月朔日、幕府尊氏賜住僧雲山

教書、為祈願所、曆應二年己卯、道鑑公謁尊氏

於京師、尊氏問公曰、卿國有緇林可與言禮

者乎、

公對以下聘雲山事、尊氏乃遣使下問雲山、雲山

賦偈應之曰、休將名字問禪徒、利養紛華與道

疎、只憶祖庭秋已晚、山家村裏送居諸、尊氏感吟、亦

答以歌、

さそなけに都のとをき山の端にくもらぬ月のひとり

すむらむ

由是、尊氏其年十二月十七日、賜諸山教書、雲山

在其列焉、二十三日、又賜雲山教書、令列三十利、

康永三年甲申、雲山年七十一、九月二十日、賦一偈

遂入定焉、歸元一曲、說似虚空、泥牛吼月、木

馬嘶風、後十五年、尊氏年五十四、薨于延文三年

戊戌四月廿九日、法諱等持院殿贈大相國一品仁山義

公大居士、是歲七月、

道鑑公在京師、五日賜二世僧田翁書、乃四年己亥二

月、田翁創建領春齋、澤龍軒於境內、而實相國神主

於其塔頭、參取文書目錄、後塔、自時五年、

公年九十五、薨于貞治二年癸卯七月十三日、法諱道

鑑大禪定門、自

太祖至公、凡五世墓竝葬光明院、迨德治中創

感應寺、雖光明院等皆列塔頭、五世石塔猶仍舊

焉、而後塔頭至悉廢圯、各失其址云、而自昔實

道義公、道鑑公二世靈牌於客殿西佛壇、開山千光像於

東佛壇、見、惟

道鑑公神主加感應寺殿、則足証其為禮主焉、據

此、太祖以來三世墳墓雖在境內、其實神主却在後亦可知也、據貞享四年、住僧利益書、自

道鑑公薨後踰二十年、應安五年壬子九月、幕府義滿賜

住僧祖通書二通、令抽精祈禱、其一禁止軍衆入

寺濫妨狼藉、六年癸丑三月、祖通創<sub>レ</sub>建本會軒・隣竹庵・道交軒於境內<sub>上</sub>、後十五年、

六世氏久公薨<sub>三</sub>于至德四年丁卯閏五月四日、年六十、

法諡齡岳久公大禪定門、自<sub>レ</sub>時歷<sub>レ</sub>年二十四應永十七

年庚寅十二月十一日、總州久世割<sub>レ</sub>田五町於院內西方

簡田及薩郡天辰地、薦為<sub>三</sub>寺領<sub>二</sub>焉、十八年辛卯二月十

五日、久世又割<sub>レ</sub>河邊地、薦<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>寺產、三月五日、復薦<sub>三</sub>

千束野地、為<sub>三</sub>寺領<sub>二</sub>焉、而諭<sub>三</sub>卅年<sub>二</sub>至嘉吉二年壬

戌、本尊木像彩飾彫剝、住僧尚祐<sub>八</sub>憂<sub>三</sub>威相薄<sub>一</sub>、是年

七月、移<sub>レ</sub>疏募<sub>レ</sub>緣、博集<sub>三</sub>衆力<sub>一</sub>、以助<sub>三</sub>工料<sub>二</sub>、時薩州持

久・伊集院熙久・伊作犬安等<sub>ス</sub>薦<sub>レ</sub>馬各一疋、八月十三

日、伊作左京大夫久清薦<sub>三</sub>田於下桑原及落水地<sub>二</sub>、為<sub>三</sub>寺

領<sub>二</sub>焉、後廿七年應仁二年戊子十一月十五日、沙汰人

道仙割<sub>三</sub>私領<sub>二</sub>、薦<sub>三</sub>田壹段三百五十地於院內西方西牟

田、為<sub>三</sub>此寺領<sub>二</sub>、後諭<sub>三</sub>三年<sub>二</sub>

九世忠國公薨<sub>三</sub>于文明二年庚寅正月廿日、年六十八、

法諡大岳譽公居士、薩州國久之於<sub>レ</sub>公也、有<sub>三</sub>叔姪

屬<sub>二</sub>、故其二月、創<sub>三</sub>金龍院於此境內<sub>一</sub>、以建<sub>三</sub>石塔<sub>二</sub>、加<sub>三</sub>

其院號<sub>三</sub>實<sub>二</sub>神主<sub>一</sub>焉、而十五日、又割<sub>三</sub>田三段於多田地<sub>一</sub>、

薦<sub>三</sub>金龍院<sub>二</sub>供<sub>三</sub>公祭事<sub>一</sub>、此月坪久田嘉紹亦割<sub>三</sub>田八町

壹段<sub>代</sub>於院內多田、為<sub>三</sub>金井軒寺產<sub>二</sub>、十年戊戌十月、

國久臣有<sub>三</sub>天辰周坊入道淨慶者<sub>一</sub>、亦割<sub>三</sub>水田三段於院內

西方松本地、欲<sub>レ</sub>薦<sub>三</sub>金井軒<sub>二</sub>以資<sub>冥福</sub>、乃<sub>上</sub>其請、

十五日國久授<sub>レ</sub>書許<sub>レ</sub>之、十五年癸卯十月、住僧聖薰所<sub>三</sub>

總計<sub>二</sub>地、本寺塔頭凡二十町二段云、後十四年至<sub>三</sub>明應

五年丙辰、從龜移<sub>レ</sub>錫于此<sub>二</sub>之時<sub>上</sub>、十月廿九日、細川

政元<sub>右京</sub>授<sub>レ</sub>書任<sub>レ</sub>之<sub>十二</sub>世<sub>住職也</sub>、七年戊午十二月十四日、

後土御門帝勅賜<sub>三</sub>先住聖薰<sub>佛宗</sub>大彌禪師號<sub>一</sub>、後卅一年

享祿元年戊子八月、從龜創<sub>三</sub>建照影齋於境內<sub>一</sub>、自老<sub>三</sub>栖

焉<sub>二</sub>、此寺檀主道鑑公自<sub>三</sub>招<sub>二</sub>雲山<sub>一</sub>、幕府世賜<sub>三</sub>公帖<sub>二</sub>

補<sub>レ</sub>在職、以<sub>レ</sub>故、幕府檀主所賜<sub>三</sub>文書雖若干通有<sub>レ</sub>所<sub>三</sub>

舊藏、多燬<sub>乎</sub>嘉吉火、其後亦燬<sub>三</sub>于天文十年辛丑正月

廿日、悉為<sub>三</sub>焦土<sub>二</sub>矣、而於<sub>三</sub>十二塔頭<sub>二</sub>幸遁<sub>レ</sub>禍、惟<sub>三</sub>開

山堂與<sub>三</sub>光明院<sub>二</sub>耳、故雲山画讚<sub>一</sub>、文書目錄得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>燼云

亦據<sub>三</sub>真享<sub>二</sub>、所謂塔頭、光明院、隣竹庵、金龍院、金井

軒、道交軒、山家村、照影齋、瑞松齋、本會軒、不二

軒・領春齋・澤龍軒之十二坊也、天文火後四十五年、天正十三年乙酉、十八世茂林修造客殿於拾陸敷拾間三尺、頗循舊構、起功乎九月朔日、告竣於十六年戊子九月、方其時也、豐太閤來寇于藩、沒取出水一布、毀破令、伽藍廢壞、惟遺于址佛殿焉、已、至寬永二年乙丑廿世尚乘之時、陳寺來由、請儉乎舊構、細造佛殿豎橫四間、柱椽丸木茅葺四阿上、四月十二日、國老島津下野守久元・比志島宮内少輔國隆承旨、命地頭樺山美濃守久高・特賜材木、以許其請、後廿九年承應二年癸巳、國老島津圖書久通・北郷佐渡久加・町田勘解由久則、憂寺社多廢乎封内、既有所議聞于寬陽公、遍命封内人別募銀壹分供其工料、即今所謂壹分銀是也、而後二年明曆元年乙未、鎌田筑後政昭博訪封内、撰寺社帳、使御使衆權知其事、至寬文中遂置其廳、擢入来院石見重(頼カ)・島津出雲久胤等始行奉行、於是取決於新納久了、著規模帳、時廿一世尚安上疏、請修造客殿及佛殿、奉行乃按、因帳脫漏不許佛殿、其後至貞享四年乙卯、廿三世利益后改尚益之時、祿僅食三二石、不足力以可修造、由是利益繼先住志、疏陳來由、以請修造儉乎客殿舊構四間四面、細建三間四面上、乃六月、廳賜葺料、七月、命許伐材、九月四日、猶有所請、給用夫、十一月、遂起其功、茅葺客殿六敷四間三尺、十二月告竣、凡所用夫九百五十人、其後七年元祿六年癸酉、尚益初名復陳先蹤、請博募緣封内以合衆力、修飾本尊上、八月廿一日、官命許募隣鄉以修飾之上、自時十五年寶永四年丁亥、邦君吉貴公命地頭島津左内忠如・寺社奉行樺山助太郎忠陽等新建佛殿本堂、十一月竣功、寺社方中取平田治左衛門・本田休右衛門、檢者渋谷甚八重長・赤塚仁右衛門重通・土岐次右衛門、惣大工野崎喜左衛門等、各以職與焉、後又九年正德五年乙未、廿六世愚山募緣戮力、禱梵鐘一枚、是歲十月功成懸寺、自初太祖薨于嘉祿三年、至享和三年癸亥凡五百七十七

年、惟有石塔<sub>二</sub>未<sub>レ</sub>覆設<sub>レ</sub>廟、況於<sub>二</sub>五世廟<sub>一</sub>乎、於是、

邦君齊宣公命<sub>下</sub>地頭菱刈下總隆邑、寺社奉行島津矢柄久宅・小笠原郷左衛門長舊等<sub>一</sub>創<sub>中</sub>建廟堂一字於其五世君墓之上、起<sub>二</sub>功乎十二月<sub>一</sub>、告<sub>二</sub>竣於四年甲子正月<sub>一</sub>、作事奉行蕪田新平長歎、寺社方取次安藤左平次則房、作事下目附吉田喜兵衛清廣・町田七郎左衛門實贇、作事書役鎌田伴之進政盛、大工頭添役島山覺右衛門盛容、右筆津留八郎太正純等各以<sub>レ</sub>職與<sub>レ</sub>焉、其他石塔五基竝<sub>二</sub>建乎五世廟堂之後<sub>一</sub>、莫<sub>レ</sub>刻<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>誰、自古以<sub>レ</sub>疑世傳<sub>二</sub>于寺<sub>一</sub>、應<sub>二</sub>是準<sub>レ</sub>前各其夫人<sub>一</sub>也、又其左傍石塔二基、在<sub>二</sub>壇低<sub>一</sub>、亦世傳為<sub>二</sub>本田靜觀父子墓<sub>一</sub>、皆從有<sub>レ</sub>功、繚以<sub>二</sub>石<sub>一</sub>欄、又自<sub>二</sub>五廟<sub>一</sub>距<sub>レ</sub>南有<sub>二</sub>芝空地<sub>一</sub>、傳稱<sub>二</sub>茶毘所<sub>一</sub>、因又是歲二月、建<sub>二</sub>石六地藏<sub>一</sub>、廿六日告<sub>レ</sub>竣、故粗刻<sub>レ</sub>事焉、時、命建<sub>二</sub>下馬碑於本門外<sub>一</sub>、自是五年文化五年戊辰閏六月六日、

齊宣公親書<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>詠和歌<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>納于此<sub>一</sub>、乃冬祝言<sub>國</sub>仰<sub>か</sub>ん白雪のミつきもつも庭早梅<sub>冬</sub>なから春待かほに軒<sub>近</sub>くる千世も八千よも

之短冊也、十一年甲戌十月、

邦君齊興公命<sub>下</sub>寺社奉行町田主馬久謔等<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>造<sub>一</sub>太祖以來五世邦君之神主及其厨子各一座<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>實<sub>佛壇</sub>、二十八日事竣、行<sub>二</sub>点眼法<sub>一</sub>、乃遣<sub>二</sub>島津相馬久<sub>一</sub>詣<sub>二</sub>寺代謁<sub>一</sub>、奉行町田久謔、取次伊集院八郎等侍焉、十四年丁丑四月朔日、

老君齊宣公撰<sub>下</sub>夫人蓮亭君所<sub>レ</sub>詠且書<sub>一</sub>歌<sub>ひ</sub>と<sub>せ</sub>に<sub>ふ</sub>たす<sub>ハ</sub>春にやあらぬなつくさのしけるまかき<sub>に</sub>色<sub>み</sub>へさへまさる月こよろなるらんてさかりことなるやまとなてしこのよろハあし<sub>ろ</sub>木になみみるひ三首之短冊<sub>上</sub>、附<sub>二</sub>金星三星<sub>一</sub>亦奉納焉、

自<sub>レ</sub>其五年文政四年辛巳三月廿六日、

齊興公頒<sub>二</sub>普聞品<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>寶<sub>藏</sub>焉、九年「丙」戌正月、國老新納内藏久命等有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>議、使<sub>二</sub>吉井笑八郎友護<sub>一</sub>徵<sub>下</sub>老公附<sub>二</sub>短冊<sub>一</sub>金<sub>上</sub>藏<sub>地</sub>寺社廳<sub>天</sub>、

(表紙)

寺社巡詣録

下

(中表紙)

〔ハハリ紙〕

白羽神社ノ次ニ入

可愛山陵在水引

寺社巡詣録 下

八幡新田宮、在薩府城距西十三里、薩摩郡水引郷宮内

村龜山之半腹水引地屬薩摩・高城兩郡、而和名鈔言此宮、亦係高城郡新多云、新田昔為村名、見慶長中書、其後因村有宮、本田親盈・井上宮内・白尾國柱神

易今名曰宮内云社考、竝載奉祀

天照大神伊弉諾尊子也、一説左祀天忍穗耳尊、而右祀天照大神云、今從古縁記

瓊瓊許尊天照大神子天忍穗耳尊娶高皇產靈尊女袴

栲幡千千姫瓊々杵尊皇母、三座並東帶座像、例祭歲五十六次、於其中六月廿九日、曰夏越祭、九月十四日十五日

為大祭、今按書記、天照大神之子天忍穗耳尊、娶高

皇產靈尊之女栲幡千千姫、生天津彦々火瓊々杵尊、

因其皇祖高皇產靈尊、勅皇孫瓊々杵尊、代父天忍穗

耳尊、降於葦原中國、可下以王其地、永傳寶祚乎天

壤無窮、時天照大神乃賜皇孫八坂瓊曲玉及八咫鏡、

草薙劍兼雲劍、至日本武尊改此名云、三種寶器、且勅

天兒屋命中臣・太玉命忌部・天鈿女命猿女・石凝姥命鏡作

玉屋命玉作・五部神伊弉諾命、使各供奉焉、於是、皇孫離

天磐座、排披天八重雲、稜威之道別道別而、天降於

日向襲之高千穗峯、自齋完胸副國之頓丘、覓國行去、

到<sup>イリ</sup>於<sup>レ</sup>吾田長屋笠狹之碕<sup>カサヤミサキ</sup>、乃召<sup>ニ</sup>國主鹽土翁<sup>一名事問</sup>、

<sup>勝國勝問</sup>

其神<sup>一</sup>曰、國在耶、對曰、國在、惟其奉<sup>レ</sup>勅<sup>一</sup>、因立<sup>ニ</sup>宮

殿<sup>一</sup>、留息焉<sup>一</sup>、此等神蹤、皆四<sup>十</sup>元正帝養老四年庚申所<sup>ニ</sup>

撰集<sup>一</sup>也、前<sup>レ</sup>此十三年<sup>四十</sup>元明帝和銅元年戊申、割<sup>ニ</sup>

日向國、始置<sup>ニ</sup>薩摩國<sup>一</sup>、見<sup>ニ</sup>此社緣記<sup>一</sup>、<sup>建保二年甲</sup>、後又

其六年癸丑、復割<sup>ニ</sup>日向國肝坏<sup>一</sup>、贈於<sup>レ</sup>大隅、始羅四

郡、始置<sup>ニ</sup>大隅國<sup>一</sup>、事見<sup>ニ</sup>續紀<sup>一</sup>、而其云<sup>ニ</sup>吾田長屋<sup>一</sup>、神

書所<sup>レ</sup>謂薩摩國阿田郡有<sup>ニ</sup>曰<sup>一</sup>竹屋、倭名鈔亦阿田郡阿

多郷有<sup>ニ</sup>鷹屋<sup>一</sup>、蓋神代竹屋云、則就<sup>ニ</sup>無戸室址<sup>一</sup>、崇<sup>ニ</sup>其

所<sup>レ</sup>生火闌降命<sup>一</sup>・彥火々出見尊・火明命、曰<sup>ニ</sup>竹屋大明

神<sup>一</sup>、而今作<sup>ニ</sup>鷹屋<sup>一</sup>、屬<sup>ニ</sup>川邊郡加世田郷宮原村<sup>一</sup>、按、後

迨<sup>ニ</sup>稍墾<sup>一</sup>田於笠狹地、以<sup>ニ</sup>狹與<sup>一</sup>世五音通故、轉<sup>ニ</sup>加世

田<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>其郷名<sup>一</sup>、因<sup>ニ</sup>村有<sup>レ</sup>宮、曰<sup>ニ</sup>宮原<sup>一</sup>、亦可<sup>ニ</sup>併知<sup>一</sup>焉、

又其云<sup>ニ</sup>襲之高茅穗峯<sup>一</sup>、或云<sup>ニ</sup>齋完胸副國<sup>一</sup>、或云<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>

頓丘<sup>一</sup>、覓<sup>ニ</sup>國行去<sup>一</sup>之類、亦續紀所<sup>レ</sup>謂大隅國贈於郡曾<sup>レ</sup>乃

峯<sup>一</sup>、延曆七年、或藤繼繩等修<sup>ニ</sup>國史<sup>一</sup>表、曰<sup>ニ</sup>襲山驛<sup>一</sup>、<sup>基</sup>

後紀延曆十三年八月、或姓氏錄序<sup>弘仁</sup>曰<sup>ニ</sup>天孫降<sup>レ</sup>襲<sup>一</sup>、皆指<sup>ニ</sup>贈於

郡霧島嶽<sup>一</sup>明矣、而今自<sup>ニ</sup>麓<sup>一</sup>、其登<sup>レ</sup>峯途、有<sup>ニ</sup>坂<sup>一</sup>曰<sup>ニ</sup>

胸副<sup>一</sup>、登而遠眺、則笠狹崎<sup>ニ</sup>于眼下、情皆欲<sup>レ</sup>行、豈

惟神乎<sup>一</sup>、嶽祠<sup>下</sup>伊弉諾尊・伊弉冉尊於其東宮、瓊々杵

尊・鹿韋津姬・彥火々出見尊・火闌降命・火明命於其

西宮、曰<sup>ニ</sup>野間權現<sup>一</sup>、後又耐<sup>ニ</sup>娘媽神<sup>一</sup>、<sup>見地、志略</sup>而胸副坂

在<sup>ニ</sup>曾於郡<sup>一</sup>、雖<sup>レ</sup>與<sup>ニ</sup>神代<sup>一</sup>未<sup>レ</sup>曾<sup>レ</sup>替絕<sup>一</sup>、土人莫<sup>レ</sup>獨知<sup>レ</sup>載<sup>ニ</sup>

書紀、天保辛丑年、季安及<sup>ニ</sup>山田清安<sup>一</sup>、登<sup>ニ</sup>襲山<sup>一</sup>時、始

聞<sup>ニ</sup>導夫引<sup>一</sup>於其坂、獲<sup>ニ</sup>以知<sup>一</sup>焉、各歡詠<sup>レ</sup>歌、清安乃

曰、古乃<sup>ニ</sup>胸副坂<sup>一</sup>乃知<sup>ニ</sup>良禮志毛神<sup>一</sup>乃千和比乃外奈良女也

波、季安亦曰、國<sup>レ</sup>覓<sup>ニ</sup>天行去<sup>一</sup>之神乃國也、此胸副坂乃名

爾遺留<sup>一</sup>覽、而風土記亦載<sup>ニ</sup>高茅穗峯在<sup>一</sup>日向國贈於郡、

中古土人略<sup>ニ</sup>高千穗<sup>一</sup>、惟曰<sup>ニ</sup>智尾<sup>一</sup>、竟為<sup>ニ</sup>地名<sup>一</sup>、係<sup>ニ</sup>弟子

丸村<sup>一</sup>、觀<sup>ニ</sup>康曆三年<sup>一</sup>、<sup>五月、廿日</sup>

齡岳公<sup>六</sup>賜<sup>ニ</sup>弟子丸若德<sup>一</sup>書、可<sup>ニ</sup>以知<sup>一</sup>焉、據<sup>ニ</sup>此等事<sup>一</sup>

以觀<sup>ニ</sup>書紀<sup>一</sup>、若<sup>ニ</sup>其地名<sup>一</sup>各循<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>分、以係<sup>ニ</sup>薩隅<sup>一</sup>、雖<sup>ニ</sup>

理當然、方<sup>ニ</sup>其撰集<sup>一</sup>、務採<sup>ニ</sup>古語<sup>一</sup>、故多係<sup>ニ</sup>日向<sup>一</sup>、亦惟無<sup>レ</sup>

他、從<sup>ニ</sup>舊書<sup>一</sup>爾、既而皇妃鹿韋津姬<sup>亦名木花</sup>配<sup>ニ</sup>皇孫<sup>一</sup>、

在<sup>ニ</sup>無戸室<sup>一</sup>所<sup>レ</sup>生兒凡<sup>ニ</sup>三子<sup>一</sup>矣、而皇孫居<sup>ニ</sup>笠狹<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>幾、

撰<sup>ニ</sup>四神相應攸<sup>一</sup>、遷<sup>ニ</sup>宮於龜山峯<sup>一</sup>、諸神記所<sup>レ</sup>謂新田宮



始不營廟殿、鎮座薩摩國龜山云此也、自其構城壁・雉堞、起高城千臺宮、寶治元年文書、遷御云、蓋應言此事也、自時久之、瓊々杵尊崩、因葬筑紫日向可愛、此之山陵、事見書紀、今按璞昌所撰緣紀二年、因天照大神賜皇孫八咫鏡之八字與皇母袴幡千々姫之幡字、併號八幡云、延喜諸陵式亦曰日向埃山陵天津彦々火瓊々杵尊在日向國無陵戸、本居氏釋乎古事記、亦其云日向因地未置下名大隅・薩摩國之前矣故也、自薩隅分、不可言日向云、季安按、養老中書紀成、在薩隅既分十年内外之後一如前所載、而係日向一時輯舊書採古語故也、後至天下定國郡境、田野稍闢、高城乃為郡號、千臺為鄉名後作川内、新田為村名、皆屬薩摩國可推知焉、時所崇祀宮殿、在山半腹或作山麓、而至宇多帝寬平二年庚戌九月十一日、大宰府上表奏慶雲見乎薩摩分野、有司考志、以為政致和之應而德至山陵之感云、見扶桑略記、其云山陵、指可愛之山陵明矣、後驗二百八十年一至

高倉帝嘉應二年庚寅、社司注進寶殿神具、有御輿唐鞍・神王面・駕輿丁・其他神馬千四百四十六匹焉、然而承安三年癸巳、神殿門廊火、悉蕩燼矣、神官等乃上疏、奏請奉移山頂、朝議卜得吉、安元二年丙申、宣旨移造社殿於山上見建久八年四上、疏即今宮地云、原夫、新田宮者天照大神三世皇孫瓊々杵尊神靈、而日域開闢無雙之崇廟也、高城千臺可愛之陵、號新田宮、凡八幡尊號始自此宮、為五所別宮第一云、五所別宮見神祇拾遺、至

柏原帝大永中、以筑紫不便參詣、聚祀於山城國小山莊、筑前為一、肥前為二、肥後為三、薩摩為四、大隅為五、蓋計自近也、今按先後、

欽明帝五年甲子、正八幡宮顯座于大隅國、其後百八拾二年

聖武帝神龜二年乙丑、新田宮建于薩摩國、新田宮建如前所載、後祔八幡三所於其末社應必言之也、又

翌三年丙寅、大分宮建于筑前國、自其三十三年孝謙帝天平寶字二年戊戌、千葉宮建于肥前國、自時百

七十年

朱雀帝承平年中、藤崎宮創于肥後國、通計五所別宮是也、但

朱雀帝前

醍醐帝延喜廿一年辛巳、建宮崎宮於筑前、祈新羅降

伏、其他多建八幡於九州、皆為異賊降伏、事見宮

崎記云、以故新田宮日祭月祀歲數百度、凝精盡

誠、專祈天長地久・國土安穩、於是乎、治承四年、

方相國清盛遷都福原、有中納言雅賴內侍蒙神夢

者、曰、八幡大菩薩<sub>居士</sub>・春日大明神<sub>居士</sub>・敵島明神

<sub>居士</sub>、會於大內神祇官、而敵島將起、有二人傍問、對

曰、清盛方人、八幡乃曰、吾以此太刀、雖預清盛、欲

賜賴朝、時春日亦曰、繼此、則宜賜吾子孫、見

保曆間記、其云八幡亦應言此新田宮也、而至下文

治元年源義經討平族於八島、宣下義經、使渠能奉

三種神器、得以還上京、三月廿四日、義經進鑿平族

於壇浦、二位殿身帶寶劍、腋挾神璽、使按察局懷

先帝<sub>帝年</sub>偕入海中<sub>上七歲</sub>、寶劍沈底、神璽浮浪、故義

經告大納言平時忠、取其浮宮及內侍所、四月鏡璽入

京、二十七日納於溫明殿、乃奏神樂及三夜云、

亦見保曆間記、前所謂、天照大神賜皇孫三種、

亦在此中而亡其一知在此時矣、而今距新田

西四十町許、有地名鏡野、在水引郷小倉村、里人相

傳、稱皇孫昔崇八咫鏡處之址、周廻可一町、草色

異他、形如鏡圓、人咸崇敬、禁芻牧云、今貽奇

異亦可謂神器之餘響矣、建曆三年癸酉十一月十五

日、鎌倉執權拜薦新田宮御幣一本・神馬一匹、十二

月廿五日、鎌倉執權復薦劍一腰・神馬一匹・征矢一

腰・弓一張、承久元年己卯、時吉名名主職<sub>疑是在</sub>

其領內谷口地、拜薦新田宮為燈油田、乃十一月、

使代官呈其證書焉、三年辛巳八月廿一日、國衙廳

宣高城郡・薩摩郡・額娃郡・河邊郡・阿多郡・甍島

郡・谷山郡<sub>以上</sub>、入來院・祇答院・牛屎院・山門院・

英根院・伊集院・揖宿院・智覽院・市來院・滿家院・

給黎院<sub>以上</sub>、日置南郷・北郷<sub>以上</sub>、令遵<sub>シム</sub>先例<sub>辨中</sub>

勤放生會雜事、十月三日、執印康友有疏所請、曰新

田神領自<sub>二</sub>右大將時<sub>二</sub>至<sub>二</sub>世幕府<sub>一</sub>、下<sub>二</sub>文神官等<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止守護地頭狼藉<sub>一</sub>、專抽<sub>レ</sub>懇祈願<sub>上</sub>、如<sub>二</sub>其例<sub>一</sub>、

後嵯峨帝寬元三年乙巳八月、前<sub>レ</sub>此、阿多北方地頭濫<sub>レ</sub>妨

乎新田宮別當五大院寺領、至<sub>レ</sub>是、神官等上疏、訴<sub>二</sub>于

鎌倉、執權武藏守經時、乃下<sub>二</sub>文地頭家高法師<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>

以報<sub>二</sub>實否<sub>一</sub>焉、

後深草帝寶治元年丁未、初皇孫<sub>スレ</sub>之天<sub>ニ</sub>降襲<sub>ル</sub>山<sub>也</sub>、五部神

等有<sub>二</sub>前駟功<sub>一</sub>、故迨皇孫遷<sub>二</sub>宮龜山<sub>一</sub>、曰<sub>レ</sub>新田宮<sub>上</sub>、得<sub>レ</sub>

祔<sub>二</sub>于此<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>是、神官等請<sub>レ</sub>造<sub>二</sub>立正殿及末社門廊<sub>上</sub>、

因<sub>二</sub>火後未<sub>レ</sub>備故也<sub>一</sub>、建久八年四月

龜山帝文永五年戊辰、神官復<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>前訴<sub>一</sub>、九月十日、右中

將報<sub>レ</sub>檢校書、宜達奏聞、二十三日、右中將奉<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>、

復<sub>レ</sub>檢校書、猶宜<sub>レ</sub>詳審告<sub>二</sub>造營事<sub>一</sub>、八年辛未、道路流

言、蒙古將<sub>レ</sub>寇、九月、執權北條時宗命<sub>二</sub>鎮西<sub>一</sub>、城<sub>二</sub>筑

前宮崎<sub>一</sub>置<sub>二</sub>戍兵<sub>一</sub>焉、

後宇多帝建治元年乙亥文永十二年四月改元閏三月十七日、新田宮夜

夢<sub>二</sub>本州御家人武光次郎伴師恒<sub>一</sub>、覺<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>語、曰師恒

及<sub>レ</sub>衆、立<sub>二</sub>江口於千臺川<sub>一</sub>、觀<sub>二</sub>空船七八艘<sub>一</sub>、竝<sub>レ</sub>舳如<sub>レ</sub>

待神駕、又一人指<sub>二</sub>出尺許鋒<sub>一</sub>、將<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>舳、乃問<sub>二</sub>何

事<sub>一</sub>、對曰、八幡宮親發防<sub>二</sub>蒙古<sub>一</sub>、師恒拜伏大感<sub>二</sub>威德<sub>一</sub>、

坐至<sub>二</sub>涕泣<sub>一</sub>、夢忽覺云、見<sub>二</sub>夢想記<sub>一</sub>、其年九月、幕府惟

康命<sub>二</sub>太宰府及縁海郡國<sub>一</sub>、各飭<sub>二</sub>守備<sub>一</sub>、且遣<sub>二</sub>兵衆<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>

戍鎮西<sub>一</sub>、以備<sub>二</sub>蒙古<sub>一</sub>、十四日、幕府下<sub>二</sub>文<sub>一</sub>、命<sub>二</sub>新田宮

神官等<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>以懇<sub>レ</sub>祈蒙古降伏<sub>一</sub>、十二月、神官等上疏、

復<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>前請<sub>一</sub>、因<sub>二</sub>新田宮未<sub>レ</sub>造營<sub>一</sub>也、十六日、院<sub>二</sub>宣神

官等<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>薩摩・鹿島・莫禰<sub>一</sub>之三郡充<sub>二</sub>造營料<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>以

新<sub>レ</sub>建新田宮<sub>一</sub>、曰、宜<sub>レ</sub>限<sub>二</sub>十二年積竣<sub>一</sub>其功<sub>上</sub>焉、弘安

四年辛巳、先<sub>レ</sub>是、院<sub>二</sub>宣<sub>三</sub>郡充<sub>二</sub>造營料<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>然國衙

郡司等自由對捍、惟僅造<sub>二</sub>立本殿<sub>一</sub>、若宮殿、其他兩社

拜殿・中門・廻廊<sub>四十</sub>・鳥居<sub>五</sub>・橋<sub>三</sub>・御供所<sub>三</sub>間・宿

院殿<sub>五</sub>間・濱殿<sub>五</sub>間及其拜殿<sub>三</sub>、武內社・高良社・中王

社・左右善神王<sub>各</sub>一間・諸社凡二十四宇・東西本新四

軒<sub>三</sub>味寺<sub>各</sub>三間・曼陀羅堂<sub>四</sub>間・五大院<sub>五</sub>間・古佛堂

三間・鐘樓堂之類、未<sub>二</sub>悉周備<sub>一</sub>、此時神領僅百貳拾餘町、

而資<sub>二</sub>不斷社務常夜燈油料於其歲租<sub>一</sub>、則大社造營不<sub>レ</sub>

足<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>功、惟感<sub>二</sub>神德<sub>一</sub>皆抽<sub>二</sub>丹精<sub>一</sub>、日夜懇祈以送<sub>二</sub>年

月、至是五月、蒙古賊艦來寇九州、九州軍兵迎戰海上、七月晦夜、大風雨、賊船破壞、莫不漂溺、我軍擊殲之、師恒夢語八幡親防、應言其起風也、七年神官等疏、六年癸未八月、幕府命薩三郡充造營料、以祈新田宮異國降伏、時既神風破舶、夷賊沈海、可謂神明靈護力矣、十二月廿一日、執權相模守時宗致三守護書、聞明年春蒙古來寇、宜傳三國中御家人等俱戍宮崎、以抽軍忠、七年甲申正月廿三日、守護下野守久經公執達御家人等如命、

伏見帝正應元年戊子七月十六日、幕府教書命

忠宗公、催御家人等速戍宮崎、公乃傳命、八月、凡值夏越六月朔日放生會八月十五日、禁斷殺生及取質人事、為每歲例、於是、神官等以實報告焉、二年己丑、前此、公移文雖以傳命、戍兵未會、至是二月三日、公又移文徵發戍兵、須限廿日趨戍宮崎、若於過期、則速其報實、惟命克欽哉、先是、新田宮祭料免田在本州宮里鄉、每年辨饗膳料二月為例久矣、而其免田、係鄉地頭

大隅式部忠光侵地、神官等以故訴之幕府、於是八月二日、幕府惟康使陸奥守義時、相模守時宗致神官等教書、責忠光罪、免田等皆如先例、十一月、宣下神官等、宜勵社務勿怠造營功、國司郡司等、院宣以來自由對捍、濫妨正稅、神官等愁、執大焉、三年庚寅二月、先是、新田宮之造營課薩三郡、造營料雖久為例、至建治三年、院宣僅課三郡、二十辨令積年辨、匪啻造立未成其功、又課薩國造宮崎宮在筑前國、且三郡亦抑留正稅、今千五百三拾貳斛零、而況於他州宮乎、有陳事實以所愁訴、朝議乃命三國司等徵其院宣、併問正稅、至是、執印沙彌道教、權執印妙慶等連署拜呈焉、四年辛卯二月三日、幕府久明致忠宗公教書、命神官等抽丹精、懇祈異國降伏於本州一宮、每月令獻其卷數、三月六日達三守護所、公乃傳執印氏如命、四月廿五日、幕府遣教書、令以修造鎮西宗社、六月十六日、達六波羅、乃十七日、探題前因幡守致執印氏書、執達如命、五年壬辰

五月、新田宮一命婦草部氏使僧榮尊代陳家狀、曰、  
自創建新田宮之時、有吾祖先女奉仕社壇者、  
因襲命婦云、按姓氏錄、日下部俗作草部、而瓊々  
杵尊皇兄火闌降命之神胤、則其所言亦非無謂、可  
以知也、六年癸巳二月十一日、幕府久明致

忠宗公教書、獻劍一腰・神馬一疋於本州一宮、使以  
祈異賊降服、三月廿日、幕府又使執權陸奥守・相模  
守一致公教書、命社司僧侶轉讀般若經於新田  
宮、且奏神樂、賜社別錢各拾貳貫文、使以竭誠  
祈異國降伏焉、四月、前此、新田與開聞、各其社  
司爭論一宮、具陳上請、未得其報、因近有例  
乎新田、是月廿日、公賜執印氏書、曰、関東教書  
至二月十日、使獻劍一腰・神馬一匹以禱異賊降伏於  
本州一宮、因併致之、宜如其命、五月十一日、  
公又賜執印氏書、曰、関東教書至三月、因併其獻銀  
劍一腰・神馬一疋・征矢一腰・弓一張・獻諸一宮、宜  
以如命、永仁元年癸巳四月二十日、公賜執印氏  
書、曰、関東教書至、使以劍一腰・神馬一匹・獻于

一宮禱異國降伏、因併致之、宜如其命、二年甲  
午六月至七月、執印重兼屬

忠宗公戊宮崎、晦日、公賜證書、三年乙未、重  
兼遣代官、自春至三月戊宮崎、乃十六日、公  
又賜書、四年丙申三月十四日、

伏見帝綸旨、造營新田宮神殿一字三間及廻廊二間  
四十九

間等、所用錢凡六千四百五拾四貫七百七拾文、其他  
神寶遷宮等用途不悉記焉、正中二年乙丑十一月、前  
此、課新田神領亦辨造宇佐宮料、至是幕府奉三院  
宣免除焉、嘉曆二年丁卯、命催造營新田宮、四年  
己巳、宰府藤九郎正信・官協善二拜薦鰐口懸于神  
殿、元弘三年癸酉<sub>正慶二年</sub>八月、執印良暹等連署復請造  
營事、曆應二年己卯六月廿一日、泷谷黨及南方賊  
合軍圍守護代酒勺左衛門尉久景等於碓山城<sub>今其遺墟在平</sub>  
佐郷天、二十二日、攻之甚急、城且陷、時石原次郎  
辰村、四郎忠充・市來小太郎引軍來救、適有鳴鏑兩三聲、  
出自新田宮<sub>在碓山城西二十五町許</sub>入於賊陣、城中聞之、皆為  
神助、奮戰甚疾、賊兵敗走、城得不陷、實神靈力

也、是歲八月十五日、久景乃報事於奉行所、文和二年癸巳四月廿六日、執權右京權太夫致執印友雄執達書、命下與

師久公合謀、俱伐賊兵立軍忠、三年甲午、友雄有功、公聞幕府、於是九月三日、尊氏賜友雄書、褒其軍功、年闕七月、

氏久公與師久公議、十六日、

氏久公賜友雄采地重豐領半分於高城郡内、貞治七戊申三月廿七日、

師久公亦賜友雄寄田牧於薩摩郡内、皆裁書各一通以授之、應永十年癸未十月九日、

元久公賜執印友令書、封薩摩國萬德上井入道跡及五代院於阿多郡、石堂村於指宿郡為其采地、使以勵軍

忠、二十八年辛丑八月廿三日、

久豐公賜執印友令田十町於薩摩郡、裁書授之、永享十二年庚申三月、

忠國公感乎靈夢、命工製造香臺、恭薦于新田八幡宮、于正八幡宮、于始良八幡宮各一脚、時公三十歲

矣、文安五年戊辰正月、先是、宣下日隅薩建久中造營正八幡宮、至是、神官等相議、新田宮亦因火後未周備、有所奏請、曰、伏願隨正宮例、宣下三州以成其功、文明十年戊戌三月六日、

忠昌公薦水田五段於薩摩郡千カ畑名内萩原、以資祭

事、乃國老村田肥前守經安・平田右馬助兼宗裁書授之、五月、新田宮神官等論總官職事、執印友秀有怨不爭、竟聞于公、乃十日、國老兼宗・經安承旨、傳賞友秀、尚掌總官、命神官等皆聽其命、如先

規例、十五年癸卯八月、公疾不癒、由是、川上十郎左衛門義久及薩摩守國久、河上彦三郎・伊地知

左衛門尉重(マ)・阿多源左衛門尉(マ)・川上又十郎(マ)・義久(マ)・伊地知又七郎重(マ)・桑波田右馬助(マ)・越前嫡子

阿多・長谷場彌四郎(マ)・伊集院助九郎(マ)・尾張守・川上又八郎(マ)・吉田治部大輔清(マ)・東郷右馬

允重貴、詣于千臺告禱於新田宮、二十一日、同射

筭懸於神前、納手組平寶殿、還如高江係義久邑亦行筭懸如之、永正二年乙丑、前此、新田宮祭田在祀

答院大村地、歲供<sub>二</sub>八祭料<sub>一</sub>、頃年水損至<sub>レ</sub>減<sub>二</sub>租入<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>是、領主渋谷右馬允重貴有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>祈願<sub>一</sub>、拜<sub>二</sub>薦五祭料<sub>一</sub>、曰、至<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>水損<sub>一</sub>、可<sub>二</sub>亦復<sub>レ</sub>舊<sub>一</sub>、十六年己卯十二月、忠兼公之襲<sub>レ</sub>封也、國中擾亂、公有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>祈<sub>一</sub>、手寫<sub>レ</sub>法華經、使<sub>レ</sub>島津三郎四郎忠俊<sub>喜入氏<sub>レ</sub>副<sub>レ</sub>、願文以納<sub>レ</sub>于新田宮、時神領等多係<sub>二</sub>渋谷黨侵地<sub>一</sub>、永祿元年戊午、多歷<sub>二</sub>年所<sub>一</sub>宮殿朽廢、渋谷重綱為<sub>二</sub>檀主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建新田宮<sub>一</sub>、竣<sub>二</sub>功乎九月<sub>一</sub>、乃廿九日、行<sub>二</sub>遷宮法<sub>一</sub>、執<sub>レ</sub>印康船・權執印雅慶・座主宗鍾等與<sub>レ</sub>焉、七年甲子十一月、入來院吉傳為<sub>二</sub>檀主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建華表於新田宮<sub>一</sub>、十三日告<sub>レ</sub>竣云、十二年己巳、入來院加賀守重嗣、論<sub>二</sub>東郷大和守重尚<sub>一</sub>入道、令<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>高城・水引・中郷・湯田・西方<sub>一</sub>以降<sub>レ</sub>于喜俊、令<sub>レ</sub>獻<sub>二</sub>高城・水引・中郷・湯田・西方<sub>一</sub>以降<sub>レ</sub>于義久公、時入來院亦獻<sub>二</sub>隈城・百次・平佐・碓山・高江・同臣<sub>一</sub>、公室、由<sub>レ</sub>是、元龜元年庚午、義久公指揮<sub>二</sub>社領事<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>先君例<sub>一</sub>、乃使<sub>二</sub>長壽院盛淳<sub>一</sub>、川田駿河守義朗詣<sub>二</sub>新田宮<sub>一</sub>、論<sub>二</sub>神官等<sub>一</sub>、每<sub>レ</sub>事仍<sub>レ</sub>舊<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>、抽<sub>二</sub>丹誠<sub>一</sub>、勿<sub>レ</sub>怠<sub>二</sub>社務<sub>一</sub>、月捧<sub>レ</sub>卷數、見<sub>二</sub>天正二年<sub>一</sub>甲戌權執印等上疏、而未<sub>レ</sub>久、十五年丁亥四月、豊大</sub>

閣自將<sub>二</sub>大軍<sub>一</sub>來<sub>二</sub>寇西藩<sub>一</sub>、徑次<sub>二</sub>于泰平寺<sub>一</sub>、社衆死守、皆據<sub>二</sub>神山<sub>一</sub>、隣近寺社多罹<sub>二</sub>兵燹<sub>一</sub>、新田宮亦將<sub>二</sub>禍逮<sub>一</sub>、時大閣聞<sub>二</sub>天朝自<sub>一</sub>古所<sub>二</sub>世尊崇<sub>一</sub>、命<sub>二</sub>九鬼大隅守・脇坂中務少輔・加藤左馬助・小西日向守<sub>一</sub>、令<sub>レ</sub>堅停<sub>レ</sub>止兵、船軍勢亂妨<sub>レ</sub>狼藉放<sub>レ</sub>火宮内、乃廿七日、取<sub>二</sub>寺緣板<sub>一</sub>、書<sub>二</sub>之制札<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>以樹<sub>レ</sub>焉、文祿二年癸巳二月、義久公 義弘公 久保公就<sub>二</sub>國家事<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>深所<sub>レ</sub>願、使<sub>二</sub>長壽院盛淳往告<sub>二</sub>禱于新田宮<sub>一</sub>、曰、神靈垂<sub>レ</sub>憐令<sub>レ</sub>達<sub>二</sub>其願<sub>一</sub>、速造<sub>二</sub>宮殿<sub>一</sub>、薦<sub>二</sub>常夜燈<sub>一</sub>、以報<sub>二</sub>神恩<sub>一</sub>、乃裁<sub>二</sub>願書<sub>一</sub>、通<sub>二</sub>使<sub>一</sub>以納<sub>レ</sub>焉、慶長三年戊戌、京命罷<sub>二</sub>朝鮮師<sub>一</sub>、十一月、義弘公 忠恒公發<sub>二</sub>釜山浦<sub>一</sub>、十二月十日着<sub>二</sub>船博多<sub>一</sub>、方<sub>二</sub>徑赴<sub>レ</sub>洛、薦<sub>二</sub>連歌於新田宮<sub>一</sub>、表<sub>二</sub>酬愿意<sub>一</sub>、十三日三冊、十四日四冊、十五日四冊、皆藏<sub>二</sub>一箱<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>納于寶殿<sub>一</sub>、其託宣連哥、あらたまる年のほしめにしも、國のあかねさす日の光のとけき、義弘公、四年己亥、前<sub>レ</sub>此、京命減<sub>二</sub>寺社領<sub>一</sub>、至<sub>レ</sub>是十月、忠恒公有<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>告<sub>レ</sub>禱、拜<sub>二</sub>薦神領五拾斛於隈城西手村<sub>一</sub>、乃廿八日、公賜<sub>二</sub>執印吉左衛門友則書<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>以領<sub>レ</sub>焉、

六年辛丑八月廿四日、

惟新公為<sub>二</sub>少將忠恒公<sub>一</sub>有所<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>禱、拜<sub>レ</sub>獻太刀一腰  
所<sub>レ</sub>造於新田宮<sub>上</sub>、乃手賜<sub>二</sub>社司書<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>以納<sub>レ</sub>焉<sub>、</sub>是歲、  
惟新公為<sub>二</sub>少將忠恒公<sub>一</sub>及

前太守義久公、仰<sub>二</sub>太檀主<sub>一</sub>新建新田宮寶殿・拜殿・  
舞殿・廻廊・鐘樓・諸末社至<sub>中</sub>二王門・鳥居等<sub>上</sub>、起<sub>二</sub>功  
乎十一月、七年壬寅二月六日、

義弘公又拜<sub>二</sub>獻太刀一腰於新田宮<sub>一</sub>長二尺三分、影八幡大菩薩及龍像、亦行吉所造云、  
可<sub>レ</sub>、前歲所<sub>二</sub>起營<sub>一</sub>、告<sub>二</sub>竣於今年之九月<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>是二十三  
日、

義弘公臨<sub>二</sub>執印宅<sub>一</sub>、二十八日慶<sub>二</sub>遷宮法<sub>一</sub>、公親臨<sub>レ</sub>焉<sub>、</sub>  
國老島津圖書頭忠長・樺山權左衛門尉久高・鎌田出雲  
守政近・比志島紀伊守國貞、帖佐役人伊勢平左衛門貞  
成・伊地知筑後入道、作事奉行川上久右衛門・本田新  
介・白濱次郎左衛門、巢山寺頼玄、隈城地頭相良新右  
衛門、百次地頭新納新八郎、山田地頭伊勢兵部少輔貞  
昌、入来院清敷地頭平田太郎左衛門増宗、執印友則、  
權執印堯慶、座主宗仁、千儀、大檢校等<sub>各與</sub>レ焉、十

二月、

忠恒公拜<sub>二</sub>薦神領百石四升七勺於市來・鹿籠・知覽地<sub>一</sub>、  
又獻<sub>二</sub>金燈爐一表<sub>一</sub>酬<sub>レ</sub>愿意、於<sub>レ</sub>是二十四日、國老鎌田政  
近・比志島國貞・樺山久高・島津忠長、副<sub>二</sub>證書<sub>一</sub>使<sub>二</sub>  
以獻<sub>レ</sub>焉、八年癸卯十一月、

惟新公亦拜<sub>二</sub>獻鉄燈爐一基<sub>一</sub>事見及銀幣、十年乙亥正月、  
惟新公又聞<sub>レ</sub>乏<sub>二</sub>祭田於每年六月<sub>一</sub>、乃撰<sub>二</sub>神領六石三斗  
二升七合九勺六才於高城郡麓村<sub>一</sub>、以薦<sub>二</sub>新田宮<sub>一</sub>、乃廿  
九日、伊勢貞成承<sub>レ</sub>旨裁<sub>レ</sub>書、使<sub>二</sub>以獻<sub>レ</sub>焉、十二年丁未  
六月十八日、

家久公夫人龜壽君告<sub>二</sub>禱於新田宮<sub>一</sub>、恭獻<sub>二</sub>御鏡一面・銀  
幣一本於寶殿<sub>一</sub>、十七年壬子八月、

家久公新架<sub>二</sub>降來<sub>一</sub>、廿七日竣<sub>レ</sub>功、地頭相良日向守長  
泰・執印吉左衛門友則・權執印堯慶・座主宗仁等<sub>與</sub>レ  
焉、十九年甲寅八月、易<sub>二</sub>神領八拾石於宮内村<sub>一</sub>森尾屋敷  
江上屋鋪  
等<sub>二</sub>拜<sub>二</sub>薦<sub>二</sub>于新田宮<sub>一</sub>、乃十二日、國老伊勢貞昌・比志島  
國貞・三原重種・町田久幸、連署致<sub>二</sub>座主坊書<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>以  
知<sub>レ</sub>焉、元和七年辛酉九月、



宰相家久公及近侍臣等、賦和漢聯句、十七日三冊、

十八日二冊、十九日二冊、廿日二冊、廿一日二冊、通

計十一冊成、乃藏一箱薦于新田宮、有以告禱

也、八年壬戌九月、

家久公又賦歌仙連歌十冊、拜薦于新田宮、寛永十四

年丁丑八月、

三州太守中納言家久公及

世子光久公 世嫡孫虎壽公為大禮主、新建新田宮寶

殿、水引地頭伊東仁右衛門祐昌等預其事焉、十七年

庚辰七月、又賦連歌一冊、拜薦于新田宮、其所薦詩

歌、粗寫于左、

幾千代も君明に民やすく  
ゆくゑを祈る神垣のうち 家久

折るかひ治るときと木からしも 我國と守るちかひのまことあれば  
えたをならさぬ神山の松 忠元 たひの首途や神に任ん 久貞

府君拜處八幡宮  
長約舊邦護家運 仰神明靈地崇 貞昌  
榮花萬歲幾無窮

穆々昭々千歲神  
東行名遂功成日 和光無處不同塵 重饒  
錦袖帯榮吟亦新

萬木森々上翠微 精神如在有光威 學之  
階前報喜聞靈韻 他日泥探衣錦歸

有所必應此神宮 綠樹森々萬木中 政弘  
宇宙閑時行可好 和光景穠物皆盡

朝聘東都別故城 八幡宮裏致精誠 理心  
鬼神若降人間福 安往安來稅太平

十九年壬午、初社人有先祖下、自一條家世以妻帶、

襲住職於座主觀樹院、為例久矣、至是、與九品

寺有<sub>レ</sub>事、罪歸<sub>レ</sub>住僧、至<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>寺<sub>レ</sub>避居<sub>レ</sub>隈城、時選

於清僧<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>護國院全有<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>董<sub>レ</sub>席、是為<sub>レ</sub>清僧開祖

云、承應四年乙未<sub>明曆元年</sub>、先<sub>レ</sub>是、新田八幡祀場祭法係

方七里、而隔川隈城亦列<sub>レ</sub>其中、至<sub>レ</sub>捕<sub>レ</sub>罪人、清淨供

物等特為<sub>レ</sub>甚矣、至<sub>レ</sub>是正月、國老島津圖書久通・新納

右衛門久詮・町田勘解由久昌・鎌田源左衛門政有等相

議、八幡祀場欲<sub>レ</sub>係<sub>レ</sub>水引・中郷・高城三邑、而除<sub>レ</sub>隈

城、減<sub>レ</sub>省<sub>レ</sub>供物、且祭<sub>レ</sub>水神、設<sub>レ</sub>築於川、以得<sub>レ</sub>捕<sub>レ</sub>魚土

人所<sub>レ</sub>利也、乃廿三日、國老承<sub>レ</sub>旨、使<sub>レ</sub>府下神主宇

宿若狹守久廣如<sub>レ</sub>京師、就<sub>レ</sub>神道管領吉田刑部少輔兼

起<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>條<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>、二月、兼起逐條、以<sub>レ</sub>神國法<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>對酌

許<sub>レ</sub>其所<sub>レ</sub>請、但如<sub>レ</sub>隈城、惟限<sub>レ</sub>氏子許<sub>レ</sub>其他者、曰

凡<sub>レ</sub>搦<sub>レ</sub>罪人<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>武門法、神以<sub>レ</sub>清淨<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>本、以<sub>レ</sub>正直

為<sub>レ</sub>專、如<sub>レ</sub>水神<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>方域<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>薦<sub>レ</sub>其神<sub>レ</sub>歲<sub>レ</sub>捧<sub>レ</sub>幣<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>

之、必其有免、曷妨<sub>レ</sub>捕<sub>レ</sub>魚、報<sub>レ</sub>國老書、使<sub>レ</sub>若狹齋回

致<sub>レ</sub>免許狀、寛文五年乙巳二月、中將光久公及<sub>レ</sub>世

子綱久公為<sub>二</sub>大禮主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建寶殿<sub>一</sub>、其毀<sub>レ</sub>之也、得<sub>二</sub>建保中璋昌所<sub>レ</sub>著新田宮緣起一冊於寶殿、國老鎌田藏人正勝乃手寫<sub>レ</sub>之、十日復<sub>レ</sub>藏<sub>二</sub>寶殿<sub>一</sub>、五月告<sub>レ</sub>竣、十三日遷宮、國老島津圖書久通・鎌田藏人正信・島津中務久茂・新納又左衛門久了・町田勘解由久昌・鎌田源左衛門政有、地頭平田藤右衛門宗<sub>(則力)</sub>、檢者中村東之坊有親、座主盛雅等各以<sub>レ</sub>任與焉、延寶七年己未六月、三州府君左中將光久公及 世嫡孫綱貴公為<sub>二</sub>大禮主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建寶殿<sub>一</sub>、二十二日行<sub>二</sub>遷宮法<sub>一</sub>、國老島津圖書久胤・島津中務久輝・島津新八久馮・島津帶刀久元・新納又左衛門久了・町田勘解由忠貞・種子島藏人久時・肝付主殿久兼、寺社奉行新納五郎右衛門久中、地頭相良源五左衛門頼庸、社司執印久馬實友、座主寬重等與<sub>レ</sub>焉、八年庚申四月、綱貴公獻<sub>二</sub>寶殿<sub>一</sub>、供<sub>二</sub>祈報用<sub>一</sub>、天和四年甲子三月、綱貴公復<sub>レ</sub>薦<sub>二</sub>鯉口緒<sub>一</sub>、貞享五年戊辰十一月、三州邦君少將綱貴公復<sub>レ</sub>薦<sub>二</sub>鯉口緒<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>酬愿<sub>一</sub>也、元禄七年甲戌閏五月、

邦君左少將綱貴公及<sub>二</sub>老君光久公<sub>一</sub>、世子吉貴公<sub>一</sub>為<sub>二</sub>大禮主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建寶殿<sub>一</sub>、十八日告<sub>レ</sub>竣遷宮、寺社奉行島津織部久達、水引地頭中神内藏丞、檢者檢見崎為右衛門・上別府伴六、執印久馬幸友等與<sub>レ</sub>有功焉、寶永二年乙酉六月、

三州邦君吉貴公及<sub>二</sub>世子鍋三郎君<sub>一</sub>為<sub>二</sub>大禮主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建寶殿<sub>一</sub>、十一日告<sub>レ</sub>竣遷宮、寺社奉行種子島彈正伊時・樺山助太郎忠陽、地頭鎌田出雲<sub>(正甫力)</sub>、檢者木場孫右衛門・篠原次右衛門、執印久馬、座主觀樹院等與<sub>レ</sub>有功焉、四年丁亥四月八日、

吉貴公告<sub>二</sub>禱新田宮<sub>一</sub>、親呈<sub>二</sub>願文<sub>一</sub>、裁<sub>二</sub>杉十萬本於其神山<sub>一</sub>、七月、前<sub>レ</sub>此、公開<sub>下</sub>、大府西丸將<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御產<sub>一</sub>、復呈<sub>二</sub>願文<sub>一</sub>、以告<sub>二</sub>其禱<sub>一</sub>、而既安產也、於是<sub>二</sub>廿六日<sub>一</sub>、拜<sub>二</sub>獻御太刀一腰<sub>一</sub>、<sub>(阿波守康綱造)</sub>於新田宮、為<sub>二</sub>酬愿<sub>一</sub>焉、享保三年戊戌十二月、

左中將吉貴公及 世子繼豐公為<sub>二</sub>大禮主<sub>一</sub>、新<sub>二</sub>建新田宮寶殿<sub>一</sub>、廿八日告<sub>レ</sub>竣遷宮、寺社奉行島津内藏久<sub>(マ)</sub>・市来次郎左衛門家賢、水引地頭堀甚左衛門與<sub>(マ)</sub>、檢者田

中彌右衛門・川北仙左衛門、座主觀樹院亮宥等與有功焉、十三年戊申八月十五日、

三州府君繼豊公有誓告禱、拜獻太刀一腰二尺六寸五分八幡北窓、國於新田宮、十八年癸丑十二月十五日、

繼豊公復獻紫銅華瓶一對于神前、今寶殿所藏、則

禁庭所獻御太刀三腰、其一曰鳩丸、長二尺五寸、正造無銘、飾彫鳩也、其二曰御戸丸、長二尺五寸八分、長光在銘、其三短刀、長一尺六寸一分、表彫劍裏彫樋、助宗在銘、又所授銅印二口、其一彫曰八幡宮印、其二曰薩摩倉印此印今亡、昔

禁庭之補職事於神官等也、京使來任其人、必用此印、或課郡郷院令納其祭料、必用倉印、雖久為例、迨戰國世京使不來、神領散在、惟任職事、每年正月十一日、執印氏・權執印氏等會公文所用此印、任其人如舊規云、其所賜三腰、不詳孰帝獻乎何歳、其他

光久公所獻御太刀一腰二尺四寸六分友成、網貴公所獻御太刀一腰二尺五寸上法城寺橋吉次造、同一腰二尺五寸上村阿波守藤

原良、或

月桂君 淨岸君所獻御幡各二流、或

齊宣公 齊與公所獻御額各二面之類、竝失年月、明和四年丁亥十一月、

重豪公由男未生、自裁願文告禱于新田宮、實國家長久基也、五年戊子正月、國老高橋此面種壽・島津仲久健・川田伊織國福・菱刈藤馬實詮・桂織部久中、承旨、副書納於寶殿、天明五年乙巳二月、前此、世子誕生安永二年癸巳、日益盛長、公手加冠、名曰忠堯、稱又三郎君、於是、遣國老二階堂主計行且詣新田宮、奏兩舞神樂代謁以酬愿焉、九年己酉正月、

重豪公既老、命建石燈爐一對於二王門之外渡頭口、文化五年戊辰二月六日、

齊宣公及夫人丹羽氏偕撰其所詠各三首、手書奉納于新田宮、而

齊宣公、則春山朝立ならふ松も覆のほのくと 春神祇明ら神の恵もあら玉のあけゆく空の春の山端 春眺望沖つかせなみもしつかに海原 之三としの始の萬代の春

首、而丹羽氏乃蓮亭君、花下送日家路をもハする計にけは下の やとる月さへふ幾日あかすそなるは下の やとる月さへにやとる月さへ影やすむらん祝言

いくちとせかハラぬ世くの春に  
ミむ君かことはの花のさかへを

先君光久公所獻青江刀一腰在新田宮、公乞于神、

假取三其刀、更獻一腰二尺六、二十六分、備前國友成所造也、

是歲七月廿三日、副書易焉、文政三年庚辰、

三州府君齊與公有所誓願、拜獻御刀一腰二尺一寸、一文字造、

御脇指一腰一尺二寸四分、藤原正房造於新田宮、六月、副納願文

焉、四年辛巳三月、公又拜獻封箱及普聞品一卷、

珠數一連於新田宮、後又拜獻金燈爐、法鏡夫人拜獻

額一面、竝闕年月、十一年戊子八月十日、大風秋樹、

新田宮一二華表皆崩倒矣、於是、天保二年辛丑、新

建第二華表、而一華表猶未樹、嘉永元年戊申二月、

御家老調所笑左衛門廣郷承

正四位左中将齊與公旨、命御趣法方御側御用人海老

原宗之丞清源・友野市助、寺社方取次愛甲源五郎

季、御勘定方小頭行御徒目附、知御趣法方掛御作

事奉行事松岡十太夫政人、御作事方下目附永山喜左

衛門・八代彦左衛門、郡奉行野村庄右衛門、

山奉行市來清十郎政、御細工奉行日置半兵衛

山見舞藤崎次郎左衛門、御大工頭阿蘇鉄矢、棟梁川添

喜右衛門等、各以其任預造替事、三月廿日、松岡政

人等至水引、二十九日、伐材於神山、四月起功、

方造營時、其年十二月、調所廣郷逝于江戸、翌二年

己酉四月、海老原清源罷職、六月、寶殿・舞殿拜殿向、拜如故、

廻廊及諸末社至仁王門、皆能竣功、然總督調所死、海

老原退寺社方及御作事、未聞有撰上梁文云、故

今聞之松岡、採其所言粗載、此爾、抑千臺川發源

乎日州、通隅入薩、向西注海、新田宮上自北岸

入仁王門、過一二華表、行七町廿二間有忍穂井川、

架降來橋、其衛左右社家僧房、各竝其門、通名蘭

桂、進自橋本、麓左右建隨神社於礎下、竝

祀豐磐間命・櫛磐間命束蘇、木像、而陟神廟於山頂、百十

八間三尺、石階凡三百三級、承安以前所祀神蹟、在

山半腹、柱礎尚存、左祀猿田彦大神於猿良社、大山

祇神神鏡一面於中王社、級長戸邊神神鏡於早風社有俗云風穴、大永三年上總住

人行悅及秀  
遍薦焉。大神奉迎皇孫、中王納其女為皇妃、早  
風起神風、多破賊船、皆有功乎本社之故也、右建  
御供所及籠所、自此又陟可一町至山頂、四周青  
靄、古松老杉、參天茂地、近嘉永中、

宰相公所捐內庫金以新建、則今社也、奉祀瓊々  
杵尊於中宮、天忍穗耳尊於其左、栲幡千千姬於其右、  
一說左作天照大、而背東建四所宮、祀彦火々出見尊及  
妃豐玉姬、葺不合尊及妃玉依姬、西建廿四社、祀  
五部神等供奉天降諸神上、安政四年丁巳正月、  
宰相齊與公既陞官位、復獻願文更有告禱、乃使  
永江休之丞納之寶殿、五年戊午二月、

三州府君中将齊彬公栽苗杉千本於神山獻新田宮、  
可愛陵在神龜山崇瓊々杵尊神靈、號新田宮、距宮乾  
位三町許、泛稱可愛山之半腰、則葬其尊體一陵而俗  
曰中之御陵、書紀曰葬筑紫日向可愛之山陵、  
天書曰葬筑紫日向可愛之山陵、  
向埃山陵天津彦々火瓊々杵尊在日向國無中陵尸上之  
類、皆謂此也、併其他高屋・吾平、曰神代三陵、

皆係日向國、以遠陵故祭之於山城國葛野郡田邑陵  
南原、其兆城東西一町、南北一町云、而可愛後係薩  
州、高屋・吾平竝係隅州、如前所載、其可愛亦書  
緣或埃、猶高江之江、而今稽諸地形、凡有三陵、  
所謂中之山陵周圍二百卅步許、祀小祠、  
嶺、實如載天書、祠傍有古松四株、歷歲既久、文  
化三年、一松傾倒、翦而除之、時有掘根將取薪  
者、掘地深可六七尺、方餘九尺、忽覩礎于石礫、  
其礫大險文、自非神功曷得輸嶺、觀者莫不駭  
畏、乃舍掘根、能藏其墟悉如舊時、據是觀之、  
書記等曰可愛陵、則於三陵有古証乎中陵者、實

足以徵焉、而端之陵在距中陵西廿四間許、山高、  
南北廿八間餘、亦祀小祠、  
距三端陵西南廿二町直徑、  
西距四五十間、祀小祠、  
傳、陵在山上、而今社地卑濕水滯、曰御手洗池、凡  
陵墓必營丘陵、此祠反近人煙、如非陵墓、因水  
會流曰三川合云、今問神官等、可愛陵社為瓊々杵

尊廟所、中之陵社為天照大神廟所、端之陵為天忍穗耳尊廟所云、然不知據、其他武内宮祀忍信命、荒神社祀素戔嗚尊、彼岸所祀船玉云之類、不違悉記焉、